

3838
So624t



2

0053934-000

383.8-S0624t

東西喫煙史

曾我重郎・著

雄山閣

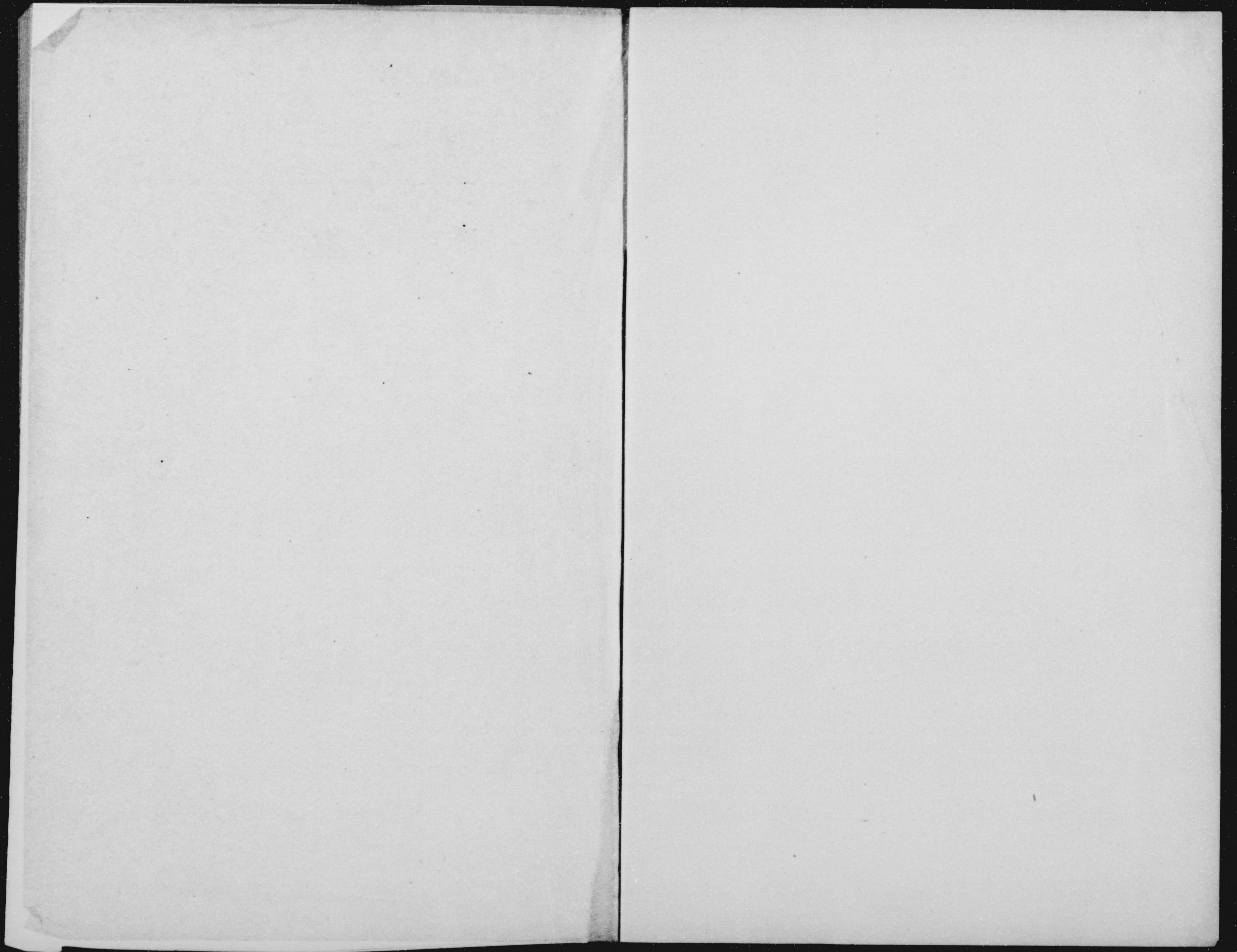
1933

AIB

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

53

一般資料



曾我重郎著

東西喫煙史

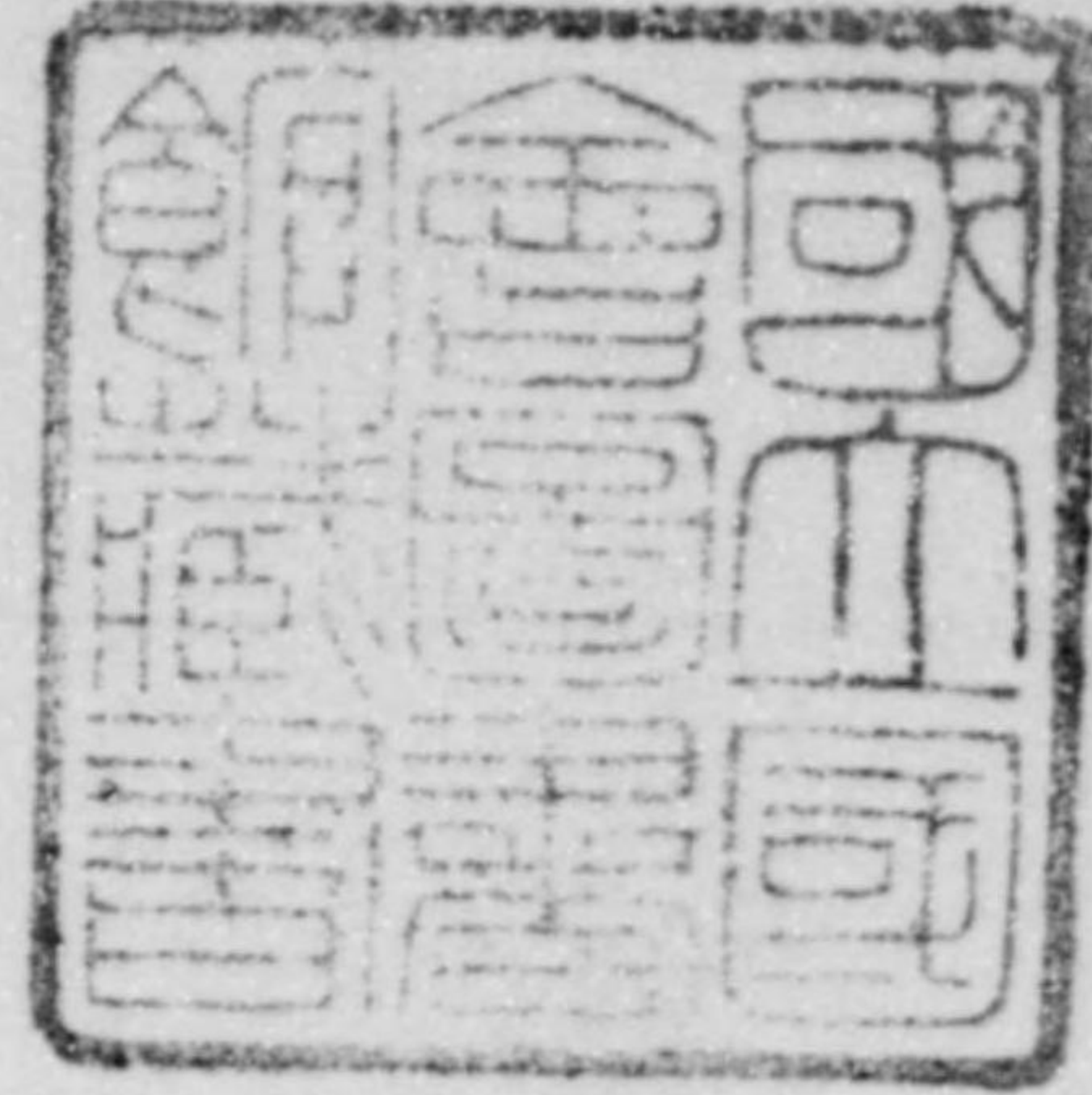
東京雄山閣版

383.850 624x



ルブラン夫人の自画像

ルブラン夫人 Marie Anne Elisabeth Lebrun (1755-1824) はフランスの閨秀肖像画家として著名なり、これによりて十八世紀後半における彼地上流婦人の喫煙の風を窺ふに足るべし



308903

序 文

越後の曾我重郎君、極東遠西の文獻を涉獵して東西喫煙史を稿し其の序を予に求めらる。顧みれば、予壯年のころは愛煙の癖なきにあらざりしかど、既に之を廢して二十年にもなりなんとし、今や却て烟を厭ふこと甚しきものあり。即ち曾我氏の新著に序せんとする資格を有せざるに似たり。

然りといへども、廢煙の後に至りて、予が史癖は、予を驅りて、煙草の渡來蔓延の迹を考へしめ、煙管の異稱と語原とを究めしめたり。予の愛書癖は、予を促がして、本邦の煙草に關する古書を蒐集せしめ、時には之を翻刻せしめ、或は又我國古今の煙草典籍の書誌を編せしめたり。予の詮索癖は、予を進めて、近世俳諧に見えたる煙草の類句を抄出せしめたり。これらの蒐集と著録と、共に固より多きを以て大いに誇り詳なるを以て自ら任ずるにはあらざれども、亦予が一種異國情味の流露せるものに外ならざれば、予が爰に興味を同じうする所の曾我氏の書に題せんとする、不可なきが如し。

惟ふに、南蠻船來航數十年の後、煙草の輸入あり、喫煙の俗速かに流行して禁制の法度も及ばざりし徑路は、日本近世風俗史上に顯著なりしところ、之を同代の宗教史上に於ける吉利支丹の興廢に對比して、其の事蹟相似たるものありといふべし。異端を攻むるが如きの害なかりしとは言へ、其の徑路と其の事蹟

とを考察し、進んで東西喫煙の沿革を精到に探究するは、文化史上閑却すべきにあらざること、蓋し論なかるべく、曾我氏が彼等の雜書を博搜して考證を企て、以て本邦の讀書界に寄與し聊か同好者の攻究に資せられんとするは、眞に嘉尙すべき事なりとなす。予も亦好尙を同じうするの士を得たるを悦び、且つ予が煙草書誌に在りても新に一良著を録し得たるを幸とすること大なり。是に於てか贅言を題することしかり。

昭和八年三月七日

京都小山 新村 出

自 序

本書は史と稱すべく卑俗に墮し、談といふべく稍々煩雜に過ぎたりと思はるゝふしなきにしもあらず。引用參考の書は、市井一般の流布本を出づること難く、所謂稀觀の珍書などいふに至りては、更に力及ばざれば、已むを得ずして孫引きのまゝに糊塗せむとしたるところ亦尠からざるが故に、蛇足の棄つべきも棄てずして、當に録すべきを逸したるものも一二には止らざるべし。さればこゝに、北國の邊陲にありて東西古今の諸書に接するの難きを云々したりとて、逃るべき責にもあらざれば、唯大方諸賢の叱正を乞ひて、以つて後日改訂の機に資せんと冀ふの他、道なかるべし。

卷中、出所を明記せざるあらずもがなのカット、挿繪の類は、机に倦みし著者が折々のいたづらがきに過ぎざれども、強ち棄て去るべきにもあらじとて掲げたるもの、時に又、興に乗りては史實を離れ、殊更に考證を無視して、小説的潤色を施せるところもまゝあれども、これ亦著者の氣まぐれにして、共に大方の笑恕を乞ふべきところなり。

もしそれ新村先生の玉稿を卷頭に飾れるをもつて、沐猴にして冠するもの、嗤ひを買ひ、狗肉を賣るに羊頭を掲ぐるもの、譏りを受くべしとならば、そは唯々無理に乞ひたる著者の負ふべき責として、不遜を

謝すべきは勿論なるも、唯その故に、累を先生の名に及ぼさんことを懼るゝや切なり。
 されば本書上梓の今日に至りて、今更衷心忸怩の情を禁じ難けれども、過ぎたるも及ばざるも畢竟は一
 介の貧書生が好事の一書なればと恕し給へ。

昭和八年三月

雪なほ深き越後龜田にて

著者識

東西喫煙史目次

第一編 喫煙總論 (一)

古代民族の喫煙——太陽崇拜と拜火思想——麻痺性植物の宗教的意義——喫煙民族の東向運
 動——アジア、アメリカの民族的關係——最古の煙草——社會現象としての喫煙理由の考察
 ——喫煙における物の分類考察

第二編 日本篇 (二七)

第一章 煙草の渡來 (二七)

天文以來の南蠻船——切支丹布教と貿易船——天正說慶長說——慶長十年說の誤謬——長崎
 の栽培——天正年間の煙管その他——朝鮮への影響——國內傳播原路——莨菪の辯

第二章 徳川幕府の禁煙政策 (三八)

慶長中期の禁煙令——煙草耕作禁止——元和の嚴令——薩隅の一例——リチャード・コクス
 の日記——農民搾取と強制開墾策——土井大炊頭の禁煙——煙草關係者の逮捕——させる狩
 り——白木屋の商才——異物喫吸——煙具の制限——耕作の制限——飢饉と農村の疲弊——
 有徳院の善政

第三章 煙草と民衆

……………(五七)

最初の喫煙法——紙巻・葉巻——竹ぎせる——水口きせる——慶長きせる——武器としての
鐵煙管——忠彌堀ばたのきせる——請取渡しの禮——きせるの語源——らうの語源——煙具
の流行變遷——極端なる奢侈——婦人と煙草——煙草屋風景——葉多葉粉せりうり——ガチ
ヤガチャ煙草——刻み煙草の變遷煙曲——遊里と煙草——長崎遊女の喫煙——色道大鑑の説
——廓の作法——高尾——助六——煙草と川柳

第四章 煙草と學者

……………(九九)

大和事始——香川秀庵——本草從新——蕙錄——司馬江漢の死刑論——一話一言——寺島良
安——隱元禪師——めざまし草——鶉衣

第五章 煙草えきぞちいく

……………(二〇九)

魯國に流れた幸太夫と煙草——津太夫の世界一週——シベリの喫煙草——ベトロブルカのム
ラク／＼きせる——ポルトガリの嘔煙草——ツング病と煙草——虎吉とアメリカ船——ハウフ
島の賣淫——その他

第三編 異國篇

……………(二二七)

第一章 煙草と英吉利

……………(二二七)

フランシス・ドレークのアメリカ探検——ハリソンの年代譜——ローベル博士等の煙草研究

第二章 クレイ昔話

……………(二五九)

——ジョン・ハウキンズ少將——一五六〇年代の輸入——サー・ウォルター・レイのこと——
——ラルフ・レイン後の流行——ジエームス一世の煙草排撃論——ケイネル博士との大討論——
——一躍四〇〇割の増税——エリザベス朝文學と煙草——バリエイ卿の文學論——マーメイド酒
場の一夜——シルヴェスターの排煙詩——その他

第三章 いんでいあん らめんと

……………(二七〇)

インディアンの煙草神話——喫煙と儀式——パイプの宗教的意義——二神論的信仰——平和
パイプと戦争パイプ——カリユメツトパイプの意義——カトリンの探險報告——ヒヤワサの
歌——古代マヤ民族の喫煙——各種族間におけるパイプの種々相——戦斧パイプ——マウン
ドパイプ——白人の壓迫

第四章 コンゴの傳説

……………(二八〇)

煙草渡來以前の大麻喫吸——奴隸を仲介せざるブラデルとの交渉——ルサナ、ルムンバラ
の傳説——未開民族間における癩痺性植物の神性——魔草マリヒユアナ

第五章 ニコチンの名譽

……………(二九二)

目次

コロンブスのこと——コルテズのメキシコ攻略——マドリッド宮庭の煙草の花——ニコラス・モナルデスの名著述——リスボンの煙草——ジャン・ニコ——アンドレー・テヴェー——兩者の元祖争ひ——フランス文學に現れたる煙草——伊太利への輸入——伊太利の獨立と煙草——メツテルニヒの好策

第六章 北歐、アジアの煙草

(一三〇)

三十年戦争と獨逸の煙草——史劇「エグモント」におけるゲエテの輕率——英國より傳來——獨逸における禁煙令——ベルリンの煙草暴動——シユロツトマンの葉卷製造——ロシアの煙草——新人ビーター大帝の抗争——シベリアの煙草——クリミア戦争とトルコ煙草——トルコ葉煙草の絶品——サルタンの迫害——インド王宮の大論戰

第七章 中華の煙草

(一四八)

支那に輸入せられたる年代と系路——漢法藥としての煙草——人骨の煙管——阿片の輸入——朝鮮の煙草渡來に關する一考察——支那の水煙管——支那文學と煙草

第八章 煙草四種

(一六一)

一、喫煙草——英佛上流社會における流行——文學に現れたる喫煙草——フランス革命と喫煙草
二、嚼煙草——我國における嚼煙草——アメリカ土人の用法——その効能の誇張宣傳——マドロスと嚼煙草——ある若き水夫の手紙
三、葉卷——南米における原始的シガー——シガーの語源——モルトケの葉卷——ビスマルクと

第九章

ブライアー物語

(一六六)

ブライアー自作の思ひ出——アーサー・マチエンの術學的パイプ論——ブライアーの濫觴——ブライアーの製法——ブライアーの美學

以上

口繪及挿繪圖版

- 一、ルブラン夫人自畫像
- 二、世界煙草傳撫系路略圖(著者作)
- 三、荅跋鶴島土人圖(蔦録)
- 四、古製煙管圖(同)
- 五、ルシャイバイブ(ダンヒル氏バイブブック)
- 六、慶長婦人喫煙圖(松浦家美人屏風)
- 七、慶長頃勞働者喫煙圖(下村家花見屏風)
- 八、請取渡しの禮(薩隅煙草録)
- 九、中つぎきせる、三繼ぎきせる(著者寫)

目次

- 一〇、元祿時代吉原圖(師宣筆帝室博物館)
- 一一、大槻勢水肖像(蔦録)
- 一二、魯西亞國煙管圖(同)
- 一三、英國古式喫煙圖(ダンヒル氏バイブブック)
- 一四、同初期煙草店の光景(フラスウエイト「喫煙時代」)
- 一五、同十九世紀酒場の風景(リチャード・ドイル)
- 一六、同中世クレイバイブの種々(著者寫)
- 一七、マヤ人仰臥喫煙圖(ダンヒル氏バイブブック)
- 一八、バウネー祈禱(フィールド博物館人類學パンフレット)
- 一九、平和バイブと戦争バイブ(著者寫)
- 二〇、ハイダ族の木彫バイブ(フィールド博物館)

五

目次

- 二一、マヤ喫煙三態(バレンク寺院のタイル)
- 二二、戦斧パイプ(著者寫)
- 二三、マウンドパイプ三種(オハイオ州發掘)
- 二四、ブアカ族のダツカパイプ(著者寫)
- 二五、ニコラヌ、モナルデス著述の圖(同)
- 二六、ロシアパイプの一型(同)

六

- 二七、エスキモーパイプ(フィールド博物館)
 - 二八、日本古代、朝鮮支那の煙管比較
 - 二九、支那の水煙管
 - 三〇、著者自注のフライアー
- 他にカツト數葉

目次終り

東西喫煙史

曾我重郎著

第一編 喫煙總論

コロンプスのアメリカ發見は、中世暗黒時代より近代文化の光の路をひらく黄金の鍵であつた。新世界の發見によつて、全歐の文化は、俄然近代的發展の第一步を踏み出したからである。この近代文化への第一步において見出された煙草は、成程特殊なる時の利を得たるものとしてのハンディキャップはあつたらうが、それでも尙、その全世界に傳播流行した速度と力においては、史上他の如何なるものよりも驚異的である。

しかも煙草が一度歐洲に紹介せらるゝや、忽ちにして熱狂的歡迎をうけたといふのでは決してない。スペインにおいてすら、コロンプスの後約半世紀にして、やうやく一般の興味を惹くに至つたに過ぎず、英國にあつてはジェームス一世の如き禁煙論者があつて、これが排撃のために、帝王の地位にあり乍ら自ら一書をもつて輿論に訴へ、煙草には一躍四百割の増税を課し、更に英國に喫煙の風を流行せしめたる第一人者、ウォルター・ラレイを憎むのあまり、

遂に彼を絞首の刑に處した位である。史家は彼の死を王位繼承問題と關連して説くのであるが、英文學史を劃するに、前煙草期、後煙草期の二期をもつてせんとするジェームス・バリーの筆法にしたがふならば、ジェームス王は正しく煙草の故に、レイを死刑にしたものと云へるのである。

獨逸にあつては、これを喫ふ者は街の四辻の曝臺に上げられて、一般のみせしめとなつた。唯火をかしたばかりに、その憂目を見た女さへある。ベルシア王シヤア・アバスは、途上禁を犯して煙草を吸ふ者を發見するや家根の上りまで追跡して、これを斬首の刑に處したし、インドのジャハンギル王は、禁煙の國法に叛く者の唇をさいて、以後喫煙不能の鬼唇たらしめた。

更にトルコでは、喫煙する者は、牛の如くに、鼻に孔をあけられて、それにパイプを通し、首には煙草の袋をぶら下げて、市中引き廻しの罰を受けた。ロシアその他では、鼻をそぎ落されたり、牛の糞を煙草の代りに吸はされたりした。

かくの如き煙草に對する彈壓は、昔に西洋のみならず、我が國においても、徳川幕府歴代の一貫せる政策であつた。時には賣買を禁じ、耕作を禁じ、自分兵糧の匱乏の罰を設け、時にはまた搦手より、きせる狩りとて、江戸市民の夥しき煙具を沒收して、これを日本橋際の竹矢來の中に積み上げて、一種のみせしめとなしたりした。しかも萬策なほこれを禁壓するに由なく、司馬江漢の如きは、喫煙者父子死刑論さへ持ち出す有様であつた。

かくの如き反對彈壓にも屈せず、驚くべき速力と廣さをもつて、全世界に擴がつて行つた煙草には、何かしら人間の心をとらへる大きな力が潜在して居ると考へられるのである。即ちこゝにおいて、煙草の本來の特性を基礎とし

ての人間喫煙の現象に對する考察が必要となつて來る。

煙草が他の食物乃至は嗜好品と異るところは、火と最も密接なる關係において用ひられることがその一つである。我等の遠き祖先は火の制御法を發見して、これを自由に用ひることによつて、先づ叢林の覇者となることに成功した。火を制御するすべを知らなかつた他の動物は、遂に適者生存の競争に敗れて、逐はれて了ひ、そのある者は更に他の原因も手傳つて滅びて了つた。だから後世の神話において天上界より火を盗み來つたプロメセウスがジュピターの怒りに刑せられ乍らも、人類の恩人と讃へられるが如く、すでに太陽崇拜の信仰をもつて居た古の人類が、更に地上の火を尊崇して、これに一種の神性を認めるに至つたのは極めて自然の現象である。

火を神聖視する當然の結果として、神にこれを捧げるの風が生じて來る。更に牲儀の觀念より發して、神に捧げる物を、この聖なる火によつて淨める事が行はれるに至り、又は芳香あるものを燻らして、一層その神聖を強調することにもなる。

この太古の喫煙の事實を具體的に推知する唯一の手がかりは、それに用ひられたパイプの遺存によるの他ないのであるが、キプロス島クレタンより發見されたパイプの如きは、その青銅時代紀前二〇〇〇年以上のものとして居り、印度古典バナのカダンバリ中にも、シガー様の香料を燻らす事が述べられて居り、英國ヨークシャイアーよりは、古代羅馬の勢力がなほ、是處を支配せる當時のものとして居る。パイプが發見されて居り、カリフォルニアの土中よりも有史以前のパイプが發見されたりして居るが——是等のものは、直ちにタバコ喫煙の用具とは斷定されないものである。
Dr. Krypt
オランダの人類學者クルト教授の如きは、紀前一五〇〇〇年、當時の地中海沿岸よりアジア大部を蔽ふたところ

の、太陽崇拜の新石器時代(青銅時代の前紀)の民族の間に於ても、すでに喫煙の風が存在したと説いて居るが、勿論それが煙草であつたとは言ひ得ない。成程、精巧なる石器を作り、金属をも使用し初め、牧畜農業をなす迄に至つた當時としては、煙草栽培の如きも、あるひは考へられぬでもあるまいが、この際かやうの論はあまりにも唐突であると云はねばなるまい。

Herodotus

Egyptian

ヘロドタス(紀前四八四—四二五)は、親しく蠻族シ、アン族の喫煙の風を見たことを書き残して居る。シ、アン族は紀前一〇〇〇—一五〇〇年に迄溯り得る民族で、ヘロドタスの當時では、黒海北部のステツプよりアラル海東岸に住み、紀前七世紀頃を最盛期として、アジアの大部を蔽ふて居た民族と云はれて居る。その人類學上の位置は—類蒙古系かコーカサス系かは不明であるが、兎に角、ヘロドタスは彼等の喫煙について次の如くに述べて居る。

「彼等は不思議なる力に富める木を有せり、彼等會議のために集合する時は、とりかこめる火中に是を投じて、その燃ゆる時の香を嗅げば即ち酔酔すること、宛もギリシア人が酒を嗜むに異らず、その果實を火中に投ずれば彼等の酔は更に甚しく、屢々飛び上つて放歌亂舞にいたる云々。」

Tree Spirit

これによつて見るも、それは現今の煙草でない事は、木とか實とかいふ語よりして明かであつて、これは恐らく大麻であらうと推測されて居る。大英百科全書の如きは、端的にヘンプの種子を火中に投じて、その麻酔をたのしむと説明して居る。

Prof. Leo Weiner

又レオ・ワイナー氏の主張する

Pankia

ンゴー地方バルカ族にあつては、ヘンプは平和と友情のシムボルとされ、酋長は「大麻の子」として神の子の意味を有

して居る。(一八八四年ワイスマンの調査による) 我國古來の神道に於ても、大麻は神聖なる幣の美稱であつて、柏と共に神前に捧ぐるの風があるが、此の兩者の間に於ける關係の如きは姑く措いて、H. Ballour 地のヘンプ喫用の風に、宗教的裏付けを認めて居るし、後述するアメリカ土人中メキシコの一部では、煙草を用ふるに「煙らす」「香を焚く」の動詞を用ひて、そこに多分の宗教的意義を含めて居るものもある。

かくの如く原始又は未開民族の間にあつては、聖なる火の思想と關連して麻痺性の喫吸物は、屢々その故に神性と結びつけられて、宗教的色彩の濃厚なるものがある。前述のアジア古代の喫煙の諸相の如きも、畢竟此の範疇を出でないものではあるが、しかしそれはヘンプその他の麻痺性植物であるとは云へても、積極的にタバコなりといふ結論には達し得ないのである。

新石器時代より農耕をやり初めた人類は、その當然の結果として、太陽を崇拜するに至り、更にその素材なる情熱は太陽を慕ふて、果しなき東方への移動となつて現れる。即ち此の時代より人類の東向運動は、幾十世紀にも互つて倦むことなく續けられて、遂にアジアの東端に達し、一方は更に海岸を北上してベーリング海峡を渡つてアラスカより北米に入り、一方は南海を渡つて南米に迄移住して行つたのである。

これは人類學上極めて興味あるところで、アメリカ土人が我等と同様の類蒙古人種であることは動かすべからざる定説であるが、ベーリング海峡を隔て、同種のエスキモーの存在せる事、又ブライチシュ・コロムビアに於て日本語系と見做さるゝ言葉の存する事、等のみが、此の説を證明すべき材料ではない。

Arctic

南米アズテック族の如きは、コーカサス系の痕跡も認められず、身長平均五呎三吋、卵形の顔、狭き額、高き頬

骨、横切れの黒眼、長剛の黒髪、顎鬚頬髯の貧弱、黄褐色乃至チョコレート色の皮膚などの悉くが、一つとしてその類蒙古人種たることを裏切るものはない。アメリカ土人は南北ともに同種であつて、その風習に於てもアジア諸地方のそれと酷似せる幾多の點をもつ。

今こゝでは、詳細を語るべき餘裕をもたないので、一例として、メキシコ古代文化によつて兩者の關係を説くにとどめる。セントラルアメリカの大盆地ユカタン、ベンニンズラ、ホンデユラス一帯には有史以前よりの遺跡の驚異的なものを残して居るが、エリオット・スミスの研究により、コバンの石彫より、明かに象を表徴せる偶像が発見された。これ即ち印度のマカラ象神の繼承である。しかしてその兩者の空間的間隙をつなぐものとして、カンボヂヤ・アングkor-Thomの寺院の骨壺に浮彫された象神、ジャヴァ寺院の石彫に見る象神をあげて、南アジア文化が南海を渡つて、メキシコに傳へられたものであることを主張して居る。

Alexander v. Humboldt
又フムボルトは、メキシコ暦の研究によつて、それが東洋の十千十二支暦と同系統なるを發見し、更にバビロン及びギリシア暦に迄その系統のたどり得ることを説明して居る。又ヒンヅーの信仰たる土水火風の四元思想、天國と地獄との九品界の思想が、些少の歪曲もなく、メキシコに存在して居ることも發見した。

かくの如くにして、アメリカ土人は、アジア類蒙古人を祖先として、アメリカ移住の後も尙ほ、アジア文化を繼承せるものごとく、クルート教授の主張する新石器時代よりアジアに行はれて居た喫煙の風習の如きも、當然アメリカ土人に繼承されたとの説も、容易に理解されるところでなければならぬ。

偶々アメリカ全土特にメキシコ灣岸に野生して居た煙草は、直ちに彼等のヘンプ喫煙又はきんま嘴みの風習をすて

Betel-chewing

させて、こゝに煙草喫吸の端を開いたものと考へられるが、かの北米カリフォルニア有史前の土中より發掘せられたるパイプの如きは、その内壁を埋めた脂の分析によつて、煙草のそれに非ることが立證されて居るので、矢張りメキシコ灣岸、チアパス、グワテマラ、サルゾドル、ヴェラクルズ、ユカタン等の中央アメリカ地方が最も古くより煙草を用ひたと推察されるのである。

有史以前より此の地方に住んで居たのは、^{Maya}マヤ民族と稱するアメリカ土人であつて、その文化は紀前七〇〇—一〇〇〇年にまで溯つて驚嘆すべき遺跡を示して居る。彼等は當時すでに楔形文字を作り、鞏固なる政治組織と太陽を中心とする宗教とを有して居つた。早くよりカ、オ、綿等と共に煙草をも栽培したと信ぜられるが、こゝに興味あるのは、^{Palenque}パレンクの寺院の浮彫である。此の寺院は紀前一一四年以上の記録を残して居るが、こゝの石壁には、^{Chaco}チャクと稱する農業の神が、喇叭形のパイプによつて喫煙して居る有様が、獨特の線によつて浮彫されて居る。

これによつてマヤ民族が此の寺院の記録より、遙か昔より喫煙の風習を樂んで來たことが理解されるのであるが、固より煙草は、此地方本來の野生であつたが故に、マヤ民族は彼等の定住と同時に、即ち紀前七〇〇—一〇〇〇年頃より早くもタバコを用ひ初めたものであらうと考へられる。

即ち新石器時代以來の人類の喫煙の風習は、民族東向運動の潮流によつて新大陸に傳はり、こゝに煙草を發見するに至つたものといふべく、明確なる記録による限り、マヤ民族はその最初の名譽を誇り得るのである。然して彼等の文化はトルテク、アズテクに繼がれ、メキシコに承けられる一方、喫煙の風は、コロンブスの時迄に全米に行き亘つて居たのである。

かくの如く、未開民族間における本来の喫煙は、神聖なる火の信仰から出發して、神前にそなへる犠牲をも淨めんために、薫香を焚いて捧げるといふ風習を生じ、更にその香料を、自然特殊なる麻痺性植物に求めた結果、その煙による麻酔の状態をも、神意にそふ所以なりと解するに至つたのである。

さうして更に、この信仰の問題とは別に、是等の香料の麻痺性が、醫藥として利用できることを發見するに及んで、ますますこれを愛用するに至つたものであるが、これも畢竟するに、肉體的快樂を目的とする麻藥耽溺の行爲を、信仰又は健康といふやうな美名にかくれて、正當化しやうとした幼稚なる心理を否定することは出来ない。

だから煙草が、クリステンダムの歐洲に紹介されるや、流石に異教徒の信仰のごとき口實は揚棄されても、なほ醫藥として靈驗いやちこなる由が強調されて、神聖草とか靈藥草などと讃へられたものである。さうして喫煙の風が急速に全歐へ擴がつて行くに及んで、やうやくこの靈藥云々といふやうな辯解的な口實も清算されて、純然たる嗜好品として、汎くもてはやされるに至つたのである。

それでは今日、我々がひとしく煙草を嗜好品として愛用するに、果して如何なる理由をもつて居るのだろうか。未開野蠻の世界におけるが如く、信仰とか靈藥とかの口實によつて、その行爲を正當化しやうとするやうな辯解がまじきことを好まず、常に強く現實のみを肯定して生きて行く近代人は、自らの喫煙の現象について如何なる説明を與へることが出来るだらうか。こゝにおいて、いろ／＼の方面からの考察が必要となつて來るわけである。

フロイド流に考へるならば、吾人の喫煙心理亦、性慾と根本的關係を有するものと言はねばなるまい。東西もわからぬ赤ン坊が、母の乳房をくわへたまゝ、吸ふこともせずじつとして居る場合がよくある。又片方の乳房を含み乍

ら、もう片方を軽く觸つて居ることもある。俗にこれを慾の出初めなどといふが、慾は慾でも、物慾ではなくして、これは性慾を意味するのだ。

肉體の最も敏感なる部分において、他の肉體の感觸を樂むといふことは、性慾の最もつましき表現に外ならない。前述の乳兒の場合から考へても、又は乳離れする頃の子供がゴムの乳首をくわへて喜んで居ることなどから考へても、決して食慾の満足の爲めではないことが首肯される。畢竟するに唇の感觸に満足して居るのだ。

長じてはさう／＼ゴムの乳首でもあるまいし、又鉛ン棒でもあるまいとなると、勢の然らしむるところ、より率直に異性の唇に感觸を感じるに至るといふことにならう。こゝに今更接吻の話でもあるまいが、元來接吻なるものは、愛撫、同情、寛恕、尊敬の表現である。しかして最も多くの場合戀愛のしるしである。戀愛は人生の華であるが故に、その切實な表現たる接吻は、又人生の最も美しき感觸の一つである。

人間はその希望や憧憬のためには、努力をおします工風したり發見したりする。赤色が元來人間の感情を最高潮にまで挑發するものであることを知つた女性が、その性慾充足の手段として、先づ唇を赤く塗つて男性を惹きつけた、愛の技巧は、殆んど有史以前石器時代にまで溯り得る。

近世では接吻の便宜のために、女性の服装さへ變つて來た。歐州では一昔前キス・ミー・クァツク(早くキスして頂戴!)といふボンネットが流行つたことがある。これは邪魔な前額部のツバをすつかり取り去つたもので、どんなに熱烈に接吻しても大丈夫といふ考案である。又普通のボンネットが接吻の際すり落ぬやうにつけられる頸紐を、キツス紐と稱した。近頃の斷髪が、文金島田や一番型の大丸鬘なんぞといふ類に比して、どんなに接吻の際都合である

かは喋々の要もあるまい。

かくの如く性慾中心の生活が、次第に能率化されて行く中には、美の標準も自ら變化を來して來て、遂には接吻の際最も邪魔な、顔面中央の隆起部、即ち鼻が低い程美人などといふ時代が來ないとも限らない。

然しこれは愛する相手があつての話で、戀人を持たぬ連中にとつては、母の乳房を觸りたのしむ、幼兒時代の自濟的満足から長じて、その快樂をとりあげられて了ふ頃には、教室で鉛筆の頭をしゃぶり、やがては煙草をくわへて、その青春の熱情をなだめすかすに至るといふ譯である。

だから接吻にも、種々の技巧があるやうに、喫煙にあつても、芦、竹、クレイ、ブライアー、エボナイト、象牙、琥珀、紙巻、葉巻といふた具合に、種々觸感を異にする唇への慰めが考案されることになる。したがつて甘い男女の仲を見せつけられた獨り者は、その際不幸にして煙草をくわへて居なければ、勢ひ指をくわへざるを得ないといふ結果にもなる。これ即ちよその戀人同志の仲のよさに昂奮させられた結果の、無意識の自濟行爲に他ならない。

近頃の目覺しい女性の進出は、今迄男性のみの領野とされて居たあらゆる方面において、否定すべからざる勢を示して居るが、しかしこれに伴ふて、世界經濟の不安に原因する結婚難の重壓が、彼女等の上に加へられつゝある。即ち女性が全體的に進出した結果、その慾求亦積極化して來たこと、及び、しかるにも不關、この結婚難の結果、性的要求が著しく阻止されることの、矛盾のまゝに併行せる二つの原因のために、女性の喫煙するものが加速度的に増加しつゝあるのだとも言へよう。

これに目をつけた機敏の專賣局が、早速婦人用煙草を賣り出すや、世の教育家、道學者などの間から猛烈な反對が

起つたが、滿洲問題ならずとも、これ亦時のみが解決する。近頃の專賣局をよろこばして居る、「うらゝ」の賣れ行きが立派にこの問題を解決して居るではないか。

以上の説が詭辯なりとして排撃されるならば、今度は食慾の方から喫煙の現象を考察して見よう。前に述べたやうに、火の使用は太古の動物中から、人類を生存の勝利者たらしめたが、それはこの火によつて寒冷を凌ぐと共に、他の動物を驅逐し、更に極めて廣汎圍の自然界から、そのまゝでは食へ得ない原料を採り來つて、調理することを得たからである。

しかし乍ら、それが故にとて原始時代の人類は、常に自由に食物をとり得たといふわけでは決してない。彼等は身に寸鐵どころか一葉も纏はない赤裸の姿で、恐龍とかマンモスとかいふた類の怪物と闘はねばならなかつた。ルーズヴェルトの虎狩りは、單なるブルジョア・スポーツにしか過ぎまいが、我等の遠い祖先にあつては、それこそ眞の弱肉強食、こつちが食ふか、むかふに喰はれるかといふのだから、その生命と食物との關係は、今日のやうな生ぬるい眞剣さとは、勿論同日の比ではなかつた譯である。

この食物のための絶間なき不安、鬭争のくるしみが、情なくも今日の我々にまで遺傳されて居て、何かしら常に口中に含んで居ねば、心身不安であると、自ら判然認識する程ではなくとも、それでも考へて見れば、猿の頬袋、牛の反芻胃を嚙へぬ境遇にあることは否定できない。

チウインガムなどは、明に此の慾望をみたすべく考へ出された菓子である。だから必ずしもその栄養價や味のみを云々する必要はない。味もそつ氣もなくなつたゴムをクチャク／＼噛んで居れば、それで満足なのだ。アメリカのある

男は、これを四十七時間嘔みつゞけて世界記録を作つたが、更にそれからしやつくりが五十七時間つゞいて、これ又天晴れ世界記録を作つたなどといふ話さへある。

よく活動寫真などにも、きれいな戀人同志が、花さく森の木蔭に、チウインガムを食べ合ふシーンなどが出て來るが、そんな場合、直ちに我等の祖先の素裸の一番ひが、ライオンの死屍にかぶりついたであらうそのかみの食慾を聯想する觀客は、人類學者、考古學者においても、極めて稀れな事と思はれる。しかし乍ら、上述の我等の祖先の、食物故の苦悶の體驗が、今日の我々において、滿腹の後でもなほ、何かしら口中に含んで居て、ゆつたりと満足して居たい氣持ちに遺傳されて居ることは、否定できまい。即ち此の先天的遺傳の故に、喫煙の風習が、かくの如く全人類にわたつて行はれて居るといふのである。

然し乍ら、單に性慾と關連して唇への觸感、食慾と關連した口中の不安などの故に求められるものであるとするならば、唯の木片でも事足りるわけである。特に煙草と限つたものではあるまい。木の切つ端しでは満足できなければ、薄荷パイプ、オゾンパイプの實用新案何萬千いくら風情どころであつても結構間に合ふ譯であるが、それでも尙ほ煙草が求められる所以は、實にその獨特なる煙の故ではないかとも考へられる。

火のないところに煙はたゞぬといふ。煙のあるところ必ず火ありとは、科學の今日斷じて云へないが、兎に角煙は火と直接に因果關係あるものとして、我々に特殊の感じを與へる。しかもそれが、無障無礙、限りなく擴つて行つて、すべてを昏暝の裡に蔽ひかくして了ふところからして、火に神性を信じた未開時代にあつては、煙が又神の啓示の一つとして畏れられたのは當然のことである。伊豆の大島の噴煙を、御神火と稱するときも即ちこの思想の現れに他ならぬのである。

ならぬのである。

故に彼等の神は火——又は光によつて表現せられ、(これは結局太陽崇拜を意味するのであるが)さうして此の光を蔽ふところの雲霧は、神々の表象となる。

邪神、惡魔はそれと反對に、暗雲妖霧の裡にあしき術を弄び、魔女の厨にたちのぼる煙の中からは、常に神と人の善の敵たる惡がとび出すことになつて居る。我が戰國時代の忍術士戸澤白雲齋、霧隠れ才藏等の面々は、雲霧の力によつて玄術を行ひ、兒雷也は藁の吐く毒氣によつてその妖術をふるつたものと傳へられて居る。

兎に角雲煙の彼方は、窺ひ知るべからざる神秘の世界だ。従つて忽焉として發生する雲煙のたぐひは、超人的神通力の結果なりとして怖れられる。

近代科學戰の煙幕は、味方の動靜を敵に知らせまいための隱蔽作用に用ひられるのであるが、これが上海事變の無智なる支那兵にとつては、直ちに命とりの毒ガスと眞違へられるほどの威力を示す。皇軍の煙幕に狼狽した彼等は、毒ガス豫防の最上法は呼吸せざるにありといふので、土中に頭を突込んで呼吸を堪へて居たまふ、窒息して死んだ奴さへある。さてこそ聯盟の支那代表は、これを窒息性毒ガスなりと騒いだ。

ふたゞび煙草について考へるならば、アメリカンインディアン中の最初の喫煙者達は、おそらくその神への祭祀以外に、敵にその煙を吐くところを見せて、火を喰ひ雲を呼ぶ神通力あるかの如くにデモンストレーションをやつたものであらう。だから戦ひ終つたあとには、その武勳を語るしるしとして、彼等勇敢なりし戰士達は巨大なるパイプを誇るこゝになつたのである。これは今日でもなほ彼等の部落中に、武勳に輝く過去を持つ戰士ほど、巨大なるパイプ

の使用が許されて居る事實によつても、實證されるところである。

だから優越感といふものが、程度の差こそあれ何人にも、多少は否定できないものである以上、さうして又人間がすべて模倣すべきの動物である以上、喫煙の風が世界全般の流行となるのは極めて當然の現象だと云はねばなるまい。紅顔可憐十七歳の高校一年生が、帽子の白線を茶澁で染めて、バットを吸ふのも、中學校の六年生が便所のおかげで、敷島をふかして、わづかにその鬱勃たる雄心をなくさめ合ふがときも、皆これである。

事實、我々ですら煙草を吸ふ人の前に出た時には、何となく落ちつけないものがあるが、これは決して單なる手持無沙汰のきまりわるさからではない。むしろ相手から威壓されるやうな氣分に襲はれるからである。これとても畢竟するに煙に對する先天的畏怖心からなのであるが、それが煙草を吸ふ人自體の上にダブつて來て、遂にはその人自身が、自分よりも遙かに強大優越なるものであるかの如くに映するからである。だから此の際、「俺にも一服くれ」といふのは、この壓迫から逃れて對抗しやうとする一種の窮鼠的心理の結果と解することが出來、であらう。

更に見方をかへていふならば、近代科學文明の光や速度や音響や高度などの重壓の下に、我々の神経系統は次第に混亂衰弱の度を増して行く。さうしてそれに伴ふて、我々の慾望も亦健全さを失ふて、強烈な刺戟を求めつゝ、次第に頹廢的となり、變態的となつて來るのだ。

これを味覺についていふならば、次第に極端なる刺戟を求めに至り、過量の鹽分、辛し、なんばん、薄荷、胡椒から初り、にら、んにく、更に蛙のフライ、蛇の蒲焼の如き惡食にまで誘惑を感じるやうになる一方、他面には又茶、珈琲、コ、アなどの昂奮劑に淫するに至る。健全なる神経と身體をもつ、小兒の時代には是等のものを嗜まず、

長じてその神経系統が混亂して來るにしたがうて、求めるやうになる事から考へて見ても、これは充分に立證されるところであらう。

かうして不健全に刺戟された後には、今度は麻痺劑が要求されて來る。酒をのんで昂奮するといふが、實はアルコールのために、緊張しきつて居る神経がしびれて、急にほぐれ出し、日頃はしつかりいましめて置いた筈のものが、遠慮も何もなくなつて、浮世の世智辛さなどすっかり忘れて、思ふ存分奇想天外の野性の心境に立ち振舞へるからである。だから酒の上のことですからなどと言へば、大抵の場合辯解もなり立つことにはなつて居るが、實は酔ふてやることにこそ、その人本然の面目が現れるわけなのである。

だから時に酒は百藥の長などといふ。事實世の中が、かうもキリ／＼に張りきつて、ギャングだとか、聯盟だとか、睨み合ひで日がくれ、警戒で夜があけるといふた今日では、せめて偶にはこの緊張から解放されて、浩然本來の心意氣にたちかへつて見る必要もあらうではないか。

こゝに至つて、甘微なる麻酔の作用をもつ煙草が求められるのだ。酒と異つて街頭に用ひるも簡にして醜からず、しかも緊張しきつた神経の繩張り——その向側は松澤病院の敷地である——をもゆるめて、安慰の境地、方尺を樂しましむるに充分であるからだ。

極度の神経の緊張過勞に際しては、煙草が如何に有難いものであるかといふことについて、著者は親しく日支事變よりの一凱旋兵から聞く事を得た。永い幕營の單調さから來る憂鬱の場合にもさることながら、初めて戦線に出た時に、煙草の力といふものがほんたうにわかつたといふ。命令一下敵陣を衝かんとする沈黙の時、敵弾は前後に炸裂す

る。しかも今は動くことが出来ない。唯じつと命令を待たねばならぬのだと思ふと、恐怖に似たものが悚然と全身に襲ひかゝる。このまゝではやられるかも知れない。一刻も早く飛び込んで行つて、あの機關銃の奴をたゞきのめさねばと、全くあがりきつて了ふ。此の場合に唯一本の煙草は、實に偉大なる力を發揮して、落ちつきを蘇らせるといふ。マツチをする手先の細かな動き、さうして末端の小さな火は自己の内心の力を暗示するかの如くであり、たちのぼる紫煙のほのかなる渦は、身の敵彈雨下の只中にあることも忘れさせて了ふといふ。

しかし、人生は常にかく如き緊張や昂奮の連鎖のみではない。安慰なる生活の裡にも求められてやまない煙草は、それでは如何に解釋されるのか。此の疑問に對して、畢竟これ模倣心理による社會的流行に外ならずといふ説がある。大戰當時、一女性の頭に發生した風は、遂にその美しき金髪を切らざるべからざる迄に彼女を悩ました。さうして此の斷髪の風が一度模倣の軌道に乗つて走るや、遂には滔々たる世界的流行とはなつて了つた。日本の髮結ひさん達が、國粹保有の見地から反對しやうとも、獨逸の理髮業者が來年度の大會には、自動車で集り得ないであらうことに大恐慌を感じやうとも、それは何とも致し方のないことである。且つては楚々として後ろに引きづられた女性のスカートが、脛となり膝となり、太股と迄あがつて來るや、それに反比例して日本絹絲價の低落となり、更に補償法案から遂には、そのスカートの形のまゝに操業短縮となる。或ひは又靴下をかなぐりすてた素足の美が歩き出すや、アメリカの靴下會社の破産から初まつて、ボロ靴下の逆輸入で、再生絹絲の丸帯が、日本の女性の胸を壓することにもならうといふ次第である。

これ皆社會の模倣性、流行の力強さを如實に物語るものに外ならない。喫煙亦この範疇を脱し得ざるものであつて、

古くは英王ジエームス一世の喝破せるところ、カタリナ女后のフランスにあつては、喫煙草の流行があり、ウォルター・ラレイはパイプの流行の光榮ある先導者として後世に讃へられ、グラント將軍はアメリカ葉卷の産額を倍加せしめる。一兵士のパイプに心を動かされたプロシアの大名の喫煙は、やがて全國的流行のトップをきることもなる。葉卷が街上紳士の口に挟まれると、淑女のつましき朱唇も、細卷のシガレットをくわへるに至る。さうして又シガレットは女性より男性へと愛用されるに至る。

アメリカの嚙煙草が、インディアンと共に森の彼方に追ひやられても、そのあとにはパイプにつゞいて、近代の卷煙草がチヨツキのポケットに、そしてベテニコートの内かくしに見出されるやうになつて來る。

流行はかくの如くに變遷する。しかも煙草そのものゝ消費は年を逐ふて増加するのは何の故であるか。煙草そのものが世界的流行であるからだ。澎湃たる潮に乗る一片の海藻こそは我等煙草呑みのすがたでもある。

煙草は有害なりといふ「事實」もなほ此の流行は阻止しがたいのである。支那の婦人に纏足の風があり、アウストラリアの母は、美しく育てんがために、その子の鼻を押しつぶし、アフリカの女性は、金具を全身にぶら下げて身動きも出来ない。アメリカ娘はコテイの看板通りに瘦せたいと斷食するし、日本娘はその洋装の手本を、ハリウッドの職業的げばくしから求めやうとする。みな流行である。身を損ね、命を縮めてまでも、あきらめられぬ流行こそは、まことに戀愛にも似たる誘惑の力をもつ。

「こんなものが流行るのですか」といふ言葉の主語がそれこそ如何なるものを意味しやうとも、それは問題ではない。要は唯「はやる、はやらぬ」が絶対的の權威をもつのだ。醜きものも、愚しきものも、害あるものも、一度流行の潮

に乗る時は、それは最も美しき誘惑となる。煙草にあつても亦それを免れないと言ふのである。これについて生理學者シヤール・リシエの告白するところを左に紹介する。

「これに關しては、余自身極端なる喫煙家なるが故に、又専門家としての意見を有するものである。余はこれを見るに唯流行的愚行といふより他に適評あるを知らぬ。しかもこれを打破すべき勇氣が余には缺けて居るのである。煙草は有毒である、危険なるガス、酸化炭素、シアン化水素、ニコチンなどを含有する。しかも余は是等の毒物の中に生きて居る。この爲めに食欲も、記憶も、睡眠も、心臓も盡く害はれて居る。余は一般の喫煙家の如くに煙草は無害なりと云へ得ない。それはたしかに有害である、正に有害である。」

「余の煙草に對する狂的愛好は、矯正しがたき人間の愚行の確乎たる證左である。喫煙は余がその愚劣を充分に意識しつゝもなほ斷ち得ざる陋習である。しかも余は他の何人よりも更にこれを愛好するといふに至つては、如何に難ぜられても更に辯解の餘地はないのである。」

リシエの告白は單なる告白であつて、何等喫煙の原因たるべきものを暗示しては居ない。よつて更にもう一度、喫煙心理の裏側を解剖して見るならば、最初煙草を吸ふた時に、おそらく何人でも經驗するであらう、あの暈氣嘔氣に堪へ得た後、喫煙の度毎にこれを征伏したといふ快感は、大きくとへて見れば、宛も毒矢をもつて攻め來つた敵を見事撃退した時の如くである。煙草になれた後でも、此の暈氣なり嘔氣なりの兆候は、かすかに又は無意識のうちに感ぜられて居るのであるが、しかし我々の心理的辯護作用はこれを否定して了ふ。さうして單に不快にあらずといふ感じは、このデフェンスメカニズムのスクリーンを透して快感となつて映じて來る。つまり我々はさして不快でなければ、直ちにそれを愉快なりとし、さして悪くなければ、直ちにそれを善いといふ風に考へたがる心理をもつ。喫煙を快しとするのも、結局は此の心理によるものとも理窟はつけられる。

更に此の毒物を征服したといふ生理的勝利感、デフェンスメカニズムと相俟つて、我々の内心に一種樂天的なる第二人格の幻影を生んで、生活の緊張壓迫から逃れて、社會的制約のために奪はれた自由を、わづかなりともとりもどし、原始的生活の奔放に對する憧憬を満足させやうとする。即ち社會生活の劇しき摩擦に對するよき潤滑油として、煙草は好適なる嗜好品であると云ふのである。

この見方は前述の癡痺劑としての煙草の説明と一部相通するところがあるが、事實我々の繁忙なる生活は、欲するまゝに自由、安逸を求め得るものではない。塹壕内の兵士は湯上りの椽側で、一杯やれるものではなく、瀕死の病人をもつ醫者は羽田の沖に釣舟を浮べられるものでもない。この様な場合に一服の煙草は、もの靜かなる休養安逸を與へるに、他の如何なるものよりも適當である。

この説は生活のめまぐるしき渦中に喘ぐ近代人には、如何にもよく説明され得るものゝ如くではあるが、それではアリゾナの大平原に野牛を逐ひ、五湖の森林に怪鳥を射る自然の兒アメリカ土人の煙草とか、又はコンゴの流れのほとりに、河馬の皮の太鼓をたゝいて踊つて居るアフリカ土人の煙草などはどう説明されるのか。よもや彼等も亦、繁忙極りなき生活の裡に、五分間の安息を必要とするほどに緊張せる神経を持たされて居るわけでもあるまい。

こゝに至つて喫煙の説明も行き詰つて了つたといふ感じが多分にある。今までいろ／＼の方面から考察したが、何等纏まつた結論を求め得られぬばかりではなく、却つて混亂の中に深入りして行くやうである。船頭多くして船山に

登ることもせず、さりとして水に沈みもしないが、一つ所をいつ迄も舐も舵も舵もなく、ぐる／＼と廻つて居るやうな昏迷を感じる。よつて此の形而上の問題は、本論の歴史的説明において、それ／＼の場合照合考察すべきこととして、次に喫煙における形而下の問題即ち「物」に關する概略を述べることにする。

即ち喫煙のあらゆる場合において、直接又は間接に、必要かくべからざるものから漸次不必要のものまでを分類して見るならば、先づ、

A 絶對的に必要缺くべからざるもの

B 絶對的とはいへぬが、それなくしては不都合千萬のもの

C あつても差支へはないが、なくとも別に困らぬもの

D それでは喫煙の不可能のもの

の四種に大別できるであらう。

A の缺くべからざるものとは即ち煙草である。煙草そのものがなくては、喫煙は不可能である。見やうによつては、火も亦此の範疇に屬すべきものではあるが、しかし火そのものに對しては、此際殊更なる考察も説明も必要とはしない。火の種類を云々する必要がないからである。勿論蠟燭の火よりも、炭火がよく、燐寸の火よりも、紙を燃やした際の火で吸付ける方がよいと云ふやうなことはあらうが、それはマテリアとし取扱ふより、むしろメトードンの方面の問題であらう。よつてこゝでは、單に煙草のみが考へられねばならぬ。したがつて煙草とても、喫煙草、嚼煙草などの如く、火を要せずして用ひられるものも、矢張り物そのものよりも、用法において異なるのであるから、隨時

各章において適當に考察して行くつもりである。

B の部には、先づパイプが數へられねばならぬ。これは喫煙に際して、缺くべからざる程に必要である。印度の山間部にあつては、土中に小孔を穿つて、それに煙草をつめて、直接その小孔の一端から吸ふ風もあるし、又インディアン中には、祭祀的意義を多分に含んでゐるが、密閉せる部屋の聖壇の香爐に、煙草を燻べて、その煙を吸ふものもあるから、パイプは必ずしも絶對的にとは云へないが、しかし是等の特殊の場合 除いては、普通なくては困難極りないもの云はねばならぬ。そのパイプの全歴史を通じての千種萬様の變化亦、パイプのマテリアといふよりも、乃至はメトードンといふよりも、むしろその型態の問題に歸着するのであるが、南洋の一地方におけるプラタナスの葉の如き、又は我國の紀州山間部における椿の葉の如き、あるひはエジプト・トルコ戦争において偶然用ひられた導火線の紙のごとき、さうしてそれから變化して今日のシガレットを生んだペーパーの如きも、皆此の中に考へられるのである。即ち換言するならば、煙草を吸ふに充分且つ必要の程度に間に合ふところの、種々の道具をいふのである。O のなくてもよいもの、比較的不要なるものとは即ち、シガレットケースとかライターの種類をいふのである。一例をライターにとつていふならば、必ずしもかゝるモダンな便利のものがなくとも、燐寸一本でも、乃至はへつついので、焚きおとしでも、あるひは又途上「卒爾ながら煙草の火を御無心申す——ヤアその方は親の仇！」といふた場合でも、結構一服は吸へるわけである。

然しライターの如き便利なものがある故に、自然喫煙の機會が多くなるのは否めない。つまりこれ等のものは、ある意味では喫煙を助長することにもなるわけである。故にBの部類よりさしてかけ離れたるものではないことは、煙

草屋のショーウィンドウの中に、パイプとライターが仲よく並んで、一緒に買ひ求められることを期待して居るのもわかる。否現にライターの上等品を手に入れて、これを人前に用ひて見たいばかりに、煙草を初めた青年さへある位だ。

ジエームス王の著書によると、當時他人の煙草にむせまいために、煙草を吸ふ者さへあつたといふことだ。ピストルが手に入つたから、ギヤングを思ひ立つたといふ○○○○はまだよいとして、その話しにあこがれて、デバートの玩具部から十五錢のパチンコを萬引して捕まつた、分別盛りの男さへある世の中だ。強ち此の青年ばかりが、嗤はれねばならぬ筋合ひのものでもあるまい。

ジエームス王の所論では、先づ何よりも煙草を吸ふ者に罪があるのだが、これを今日の警視廳に云はせれば、先づピストルそのものがいけないのである。だからあの騒ぎの後では、すぐにピストル狩りが行はれる。さきの青年の場合には、ライターそのものが先づ喫煙の原因となる。したがつてライターを真先に輸入して、高々と（高價といふことは客の購買慾をそゝる重大なる要素となること屢々である）賣り出すデバートは、さしづめ喫煙の助長者として、矢張り此の〇の部類に數へられねばならないであらうが、そうなる又矢鱈に廣告マツチをくれるカフェーとかおでんやといふものも、これに數へられねばなくなる道理であるが、本書では一般的に是等のものにまで言及する必要を認めないことにした。

Dにおいてはいさゝか諛辯のそしりを免れないかもしれないが、事實吾人の喫煙史中に現れて来るものであつて見れば致し方がない。つまりその煙を吸ふことは出来るが、それが煙草ではないが故に、喫煙とは稱しがたいものをい

ふのである。喫煙の日本語は、スモーキングの直譯であるが、スモークとは元來煙を出すといふ意味だけで特に煙草をさすといふやうなことは全然なかつたのである。それが十六世紀よりこのかた、日本の花は櫻木人は武士に對して、英國では女は妻君、けむりは煙草の立前からスモークといへば即ち煙草を吸ふ意味となつたのである。だから此の間の經緯を知らなかつたウォルター・ラレイの召使の如き、主人の口中から煙が出て居るのを見て、火事と間違へて頭か水らをおつかけたといふ様なナンセンスも生ずる。

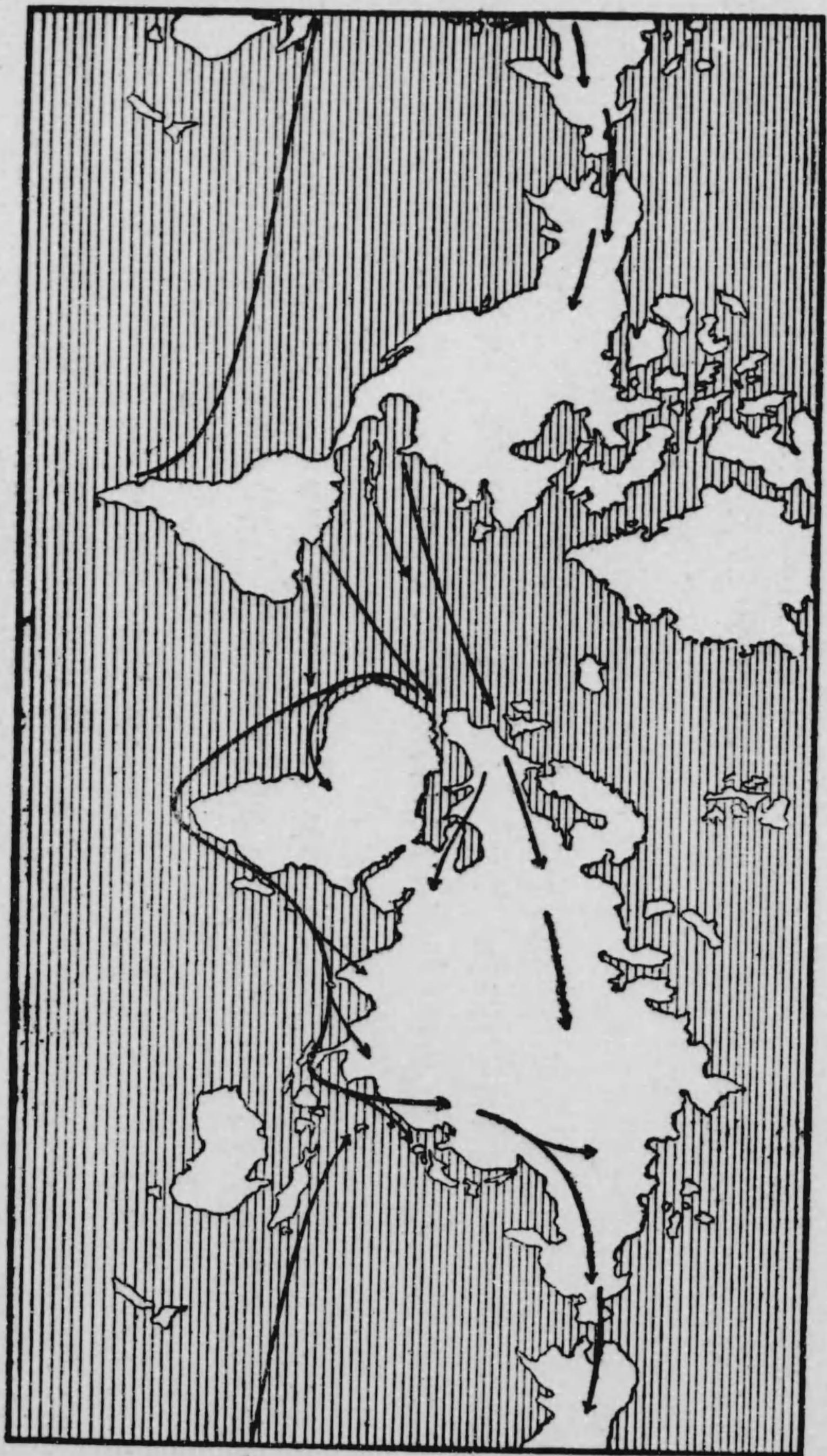
日本語の喫煙といふても、單に煙を喫すただけでは、煙草の意味は全然現れて居ないのであるが、Dの場合に論ずべきは即ちこの煙草を意味せざる喫煙である。即ち自ら求めて、或は誤つて、又は逼られて止む事を得ず、煙草に非ざる異物の煙を吸ふ場合である。

英國のある田舎の牧師は、煙草が吸ひたいばかりに、聖鐘についた麻繩をちぎつて吸ふて神罰を蒙つたのなどは、明らかに自ら求めた結果とは云へ、煙草の缺乏に逼られて堪へきれなかつた情状は、充分酌量されねばなるまい。日本でも煙草が禁じられた頃、止むを得ず路のたうをかげ干しにして吸ふた連中もある。

みな人のまるるやふきの塔供養

にがくしてもたふとかりけり

レマルクの「その後に来るもの」の中にも、大戦中獨逸では、戦線へ送る煙草がつきて、これ又やむを得ず、ぶなの葉ツバと雜草のミクスチュアで誤魔化したことが書かれて居る。ヴァレンチン・ラーヘアなる兵士の専門的嗅覺及び味覺によると、もつと下等な普通品は、大抵海藻と馬糞の乾したものゝミクスチュアであつたといふ。だから大戦



煙草傳播系統地圖

の末期には、獨逸の兵士は實に夥しい森林や蒲團を喫煙したわけである。又、ジエームス王とやらんで煙草嫌ひで史上有名なるペルシアのシャ・アバス王の如きは、喫煙の重罪を犯した者には、海藻すら入つてない純粹の駱駝の糞を喫煙させた。

喫煙させた。



タバコ 島土人喫煙の圖 (大槻磐水著 蕩録ヨリ)

阿片の喫煙に心身の苦しみを胡魔化さうとして居た位である。是等の痲痺劑の喫煙は、煙草のそれと關連して、又は

對照して、同様の興味を提供するものである。

さて、以上の詭辯的饒舌の最後に至つてもなほ、何等纏つた結果を得ることが出来ないのであるが、しかし第二篇以後順次に述べて行く煙草の歴史の中から、多少なりともこれ等に符合するところが見出されるならば、また興味尠しとは云へないであらう。

第二編 日本篇

第一章 煙草の渡來



ガレリオは世界が球状をなして居ることを發見した。これによつて、今迄ヨーロッパから東行の船のみによつて達せられると考へられて居た世界の終點黄金の國ジバングは、逆に西行することによつて、より容易に達せられると考へたゼノアのコロンブスは、その冒險的航海によつて思ひがけなくもアメリカ大陸を發見し、世界の擴張といふ空前の壯業を自ら意圖せずしてなしたげたのである。

このアメリカ發見によつて新世界土産として持ち歸られた種々様々の珍奇なるものの中にも、特に煙草と性病とが非常なる速度をもつて、全歐洲文明の眞髓にまで入り込んで行つたといふ事は、更に我々の興味を倍加させる。

しかしこゝで性病の歴史をも併せ述べる余裕のない程、煙草は隨

處に目まぐるしきあふりを残しつゝ全世界に擴つて行つたのである。その妖力を帯びたかとも怪しまれる煙が、蓬々と蔽ひ來つて我國にまで及んだのは、何時の頃、如何なる系路によつてあるか？

「此草は日本の東方にあぶりかといふ國あり、此國に一人の美女あり、名を淡婆姑といふ。國中の男子此女を戀したふもの甚だ多かりし。死せし後まで世になつかしむ人多くある時一人の男此墓に詣でしに、秋の日早く暮れにければ其儘にて通夜せしに夜更けて甚飢たり。仍そのあたりを探り見れば草のかうばしきあり。一葉をとりて食ふに、飢忽ちにやみ身温かに冷風肌へを犯すことなくして涼氣を防ぐ事酒を飲るが如し、此故に南蠻草と號し、又は煙酒ともいひ、あるひは想思草ともいへり。是より世界萬國に流布す。一度此煙を吸ぬる人は是を忘れんとして忘るゝ事能はず、想思草の名最なるかな。」と西川如見の長崎夜話草(享保四年版)に記されてある。

此種の傳説は支那朝鮮にも残されて居つて、その系統の同一なることを示して居るが、何れにしても南蠻の航海者達によつて煙草と共に傳へられたものであることには疑ひない。

縁がつけば鱧の餌となるサンタマリヤ、大洋の波を幾千里、冒險の意氣にその帆を張つて、東洋の富を求めて渡つて來た遙かなる南蠻の黒船の數々、その中ポルトガルの一隻(船長フェルナウ・メンデス・ピントウ(Fernão Mendes Pinto 1509?-1583))が、天文十二年早くもわが種ヶ島に渡つて鐵砲を傳へたのが、西曆で一五四三年——これを本國ポルトガルで、煙草を栽培した一番ふるい記録が一五五八年であるといふところから考へて來ると、先づ、「草木六部耕種法」に「日本ニ傳ハリシハ、天文十二年ニ波爾杜瓦國ノ人持チ來リテ、大隅國稚兒島ニ植エタルヲ最初トス」とあるのは首肯しがたい暴論である。矢つ張り、種ヶ島の殿様は、銃先から煙を出す術は覺えても、煙草の煙を出す術は知らずに

死んだ——と考へる方が正し。

ピントウは此の漂着後、前後四回來航して居り、天文十八年には、ザヴィエル上人が渡來なされたが、當時ポルトガル本國ではまだ煙草は栽培もして居なかつたのであるから、深き考察に値しない。

永祿に入つては、信長の天主教保護、南蠻寺設立などから、西方伴天連たち相踵で渡來はしたものの、西方諸國に煙草が嗜好されぬ以前の彼我の交渉などを、いくら詳細に調べたところで此の問題の解答は與へられない。それよりむしろマヂェランによつて拓かれた南太平洋航路(一五二二)の影響下に、恐らくアメリカ事情の一斑を直接知り得たであらう南海諸島からの輸入といふことが、より多くの可能性をもつであらうが、それとてもフィリッピンにおけるマヂェランの死後、ふたゝびしばらくの間なりとも孤獨の海に忘れられて居つた地域である。矢つ張り、西歐に煙草のひろまつた十六世紀中葉以後の南蠻船をこそ見張るべきであらう。

元龜元年、二年とつゞいて長崎を訪れた黒船があつたが、當時では、その獨特の海外發展力をもつて、最も頻繁密接な新大陸との交渉を誇つて居たところの英國でさへも、せいゝくビーナ博士とローベル博士が、共同で煙草の植物學的研究をやつて、その著書をエリザベス女王に献上したりして居たくらるで、ヨーロッパは漸く、煙草の香りに匂ひ初めるといふ頃でしかなかつたのだから、勿論これらの船には、煙草の見込みは覺束ない。其の後もつぎつぎと多くの盤船が、我が西岸を訪れて居るけれども、煙草に關しては何の記録も残して居ない。

しかしかういふ風に年々訪れて來る南蠻船は、年々新しい文化を齎してやまない。實に當時の南蠻の航海者こそは、世界文化の尖端人であつたわけで、彼等の帆は決して自國の傳統や文化で張られては居なかつた。むしろ彼等によつ

て、本國の文化は導かれて居たのだ。あのコロンブスの大発見後、ヨーロッパ烈強、特にイスパニヤ、ポルトガルの兩國はキリスト教文明擴張の名にかくれて、侵略の航路を世界の港々に伸ばさうとして居たのである。

新世界の天恵をもたらし、東洋の財寶を滿載して歸つて來る船こそは、まことに希望と憧憬の丘に立つ青年のすがたであつた。彼等航海者こそは、中世の暗黒時代以來、宗教的虛脱の中に眠つて來たヨーロッパに、輝しい理性の曙光を浴せかけたものに他ならない。彼等は、尊き野心に燃えた新時代の先驅者達だ。「弓形なせる帆の下よりあやしき國を眺めつゝ」何千里の海路を往復して、新文明を紹介する彼等は、またかあびりかの靈草を我國に輸入するにも、躊躇はしなかつた筈である。

落穂集（大道寺友山寛文頃の著）に曰く、「略我等若年ノコロ或老人物語仕候ハタハコト申モノハ古來ハ是ナク候所、天正年中南蠻國ヨリ渡リテ世ニヒロマリ候トナリ云々」とあり、山崎美成が「麓の花」（文政二年）にも、「煙草の中國（註合本）に渡りしは天正の頃なり、しかせしよりこの方世にあまねくもてはやし今にてはひと日といへどもかくまじきものとはなれり」と見える。

更にあの煙草嫌ひで氣むづかしやの司馬江漢も「タバコは天正の頃異人持ち來る」といましくしげに言ひすて、居るが、和漢三才圖繪には「按煙草、天正年中南蠻商船始貢此種、以植長崎東土山」とあり、煙草百首亦「——然る時は天正の頃タバコ島より渡りて大隅國贈那國府へ植……」と言ふて居る。めざまし草（清中亭淑親著文化十二年）では「巻たばこは元龜天正の頃より専ら用ひ、きさみたるもその後遠からず用ひたるかと思はる」と述べて居る。こゝに巻たばこといふのは、現在のシガレットとは少々異なるものであるが、これはいづれ後述するつもりである。

然るに伊藤東涯の秉燭談（享保年間）には、「タバコハ南蠻ノ産ナリ百年前日本ニ來ル」とて漠然乍ら慶長説を主張して居る。同時代徂徠の南留別志もまた「五百年以後茶あり、百年以來煙草あり、世はやうやくに事多くなりぬ」とて慶長説をとつて居る。此の慶長説をはつきりと主張して居る文献の二三を見ると、先づ薩隅煙草録（青江秀著明治十四年）には、慶長初年薩摩にてその種子を入れ、同國揖宿郡指宿に植えしを日本煙草栽植の濫觴とし、藩主島津氏その種子を京都近衛家に送り、これを山城の花山に植えたりといふて居る。掌中年代重寶記慶長九年の項には「甲辰とうろの火七月十六日いへみつ公御たん生、明年南ばんよりたばこ渡る」とあつて、つまり慶長十年渡來といふことになつて居るし、萬寶指南車といふ、袖珍常識字典みたいな本にも、慶長十年南蠻國より渡るとあるなどから見て、此の慶長十年説は當時の常識であつた。

貝原益軒の大和本草卷六には「——或は曰慶長十年初めて來る」とて、天正説と共にならべて、その何れをとるともはつきりしてないが、大和事始卷四には「慶長十年の頃ほひ初めて日本に渡るそのち諸人これを賞飲す」と斷言して居る。

遠碧軒記（黒川玄逸著）には「タバコは日本にては關ヶ原陣より後の事にて云々」とあるが、當代記慶長十二年二月の條に「此比たばこといふことあり、各行之。但後にたゞるとて嫌之者もあり是は南蠻より渡ると云ふ、去年の比より京中にあり」と記録せられ、薩隅煙草録と大體に於て一致して居る。更に慶長日記（三）には「慶長十三年丁未二月此比たばこといふ事はやる——」と見える。

然るに北窓鎖談（橋南溪著）には「或人の話に煙草は慶長十年南蠻國より種を渡せり、漢土へ渡れる大抵同じ頃とぞ」

とあり。地方凡例録には「本朝へ種草の渡りたるは慶長十年」とあつて、近代世事談（沾涼著）に「金絲烟（註煙草の美稱）、慶長十年にはじめて南蠻より種を傳へて、長崎櫻馬場にこれをうゆる」と見えるのと相まつて、煙草そのものよりも、種子の輸入をいふて居るのは注目に價する。これによれば、煙草そのものゝ輸入は、慶長十年前に溯るものと考へられる。

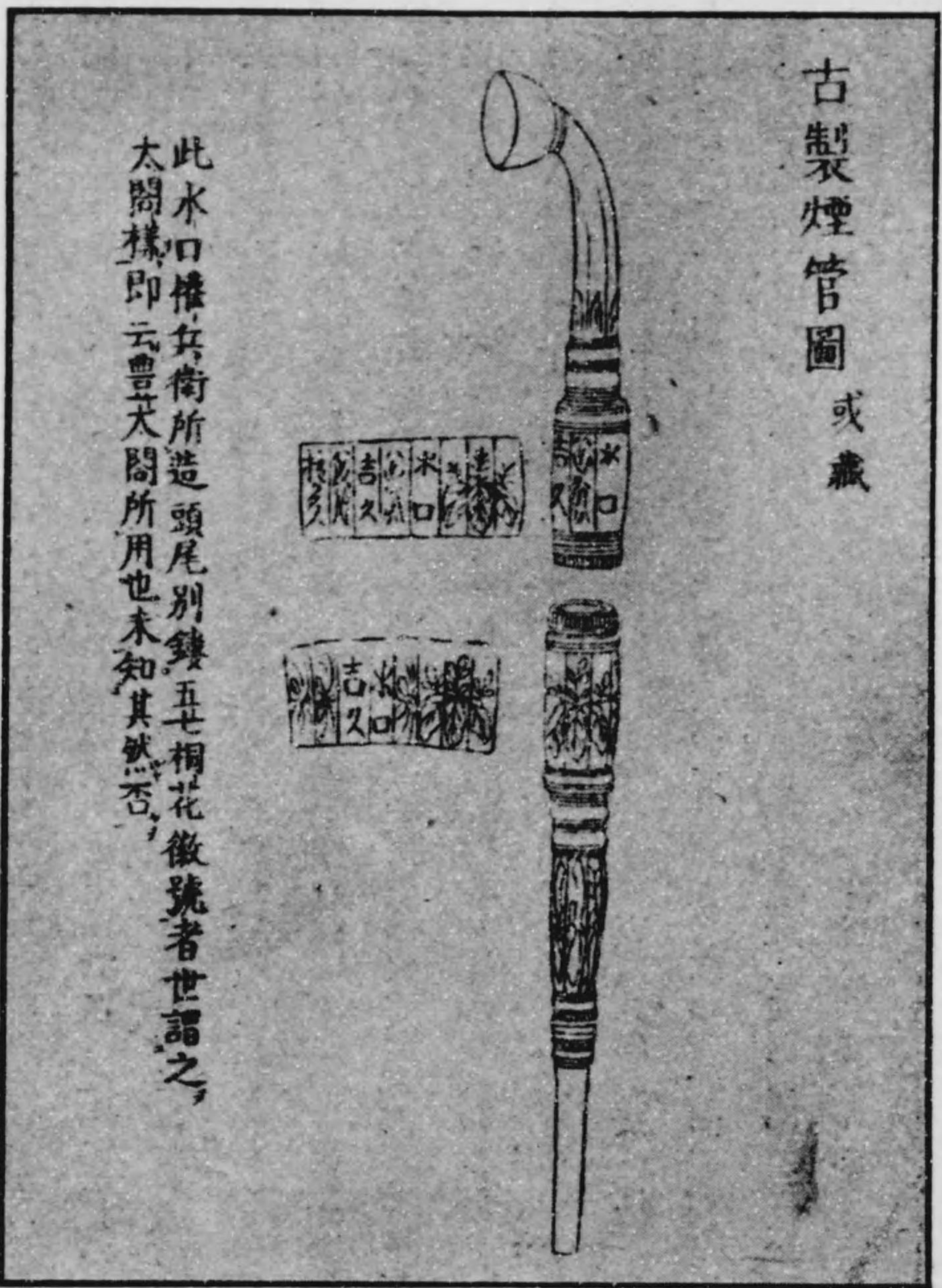
武江年表（齋藤月琴著）（一）にも「慶長十年乙巳南蠻よりタバコ蕃椒を渡す、長崎にて櫻馬場へ初めてタバコの種を栽る」とあり、南陽子の江府事始年表も此の説をとつて居る。更に長崎夜話艸には「蠻人種子を持ち來りて長崎櫻馬場といふところに植てより普ねく世にひろまれり」とある。

即ち慶長十年の頃、長崎東土山（又は唐土山）櫻馬場に初めて栽培したといふ記録が、初めて渡來したと早合點されたものらしく、嬉遊笑覽（喜多村信節著）では「慶長十二年の頃はやりて其種を長崎櫻馬場に植しとかや」と、流傳つてから植えた様に述べて居る。種子を栽る前に、そのものゝ知られて居たのは當然であつて、エタイの知れない植物の種子を蒔くなどは一寸考へられない。

「寛文の頃までありし古老の云く多葉粉の渡りしは近きことなり南蠻人我朝に來て吞初たり」と保會川に記された如き漠然たるものはしばらく措いて、坂上池院の慶長私録、慶長十二年の項を見るに「此頃たばこといふもの流行る、これは南蠻より傳るといふ。ひろき葉をきさみ火をつけけぶりをのむ」とあり、十三年の項では二三年以來とあつて十年長崎栽培の事と符合して居る。三浦淨心が慶長見聞集に、たばこの烟のむ事として「見しは今、たばこといふ草近年異國より渡り、老若男女此草に火をつけ烟をのみ給ひぬ」とあるのにも見ても、當時の流行の程度がわかる。

此の慶長十年説は、最初の栽培を渡來と誤り傳へたものであることは、長崎市史にも明記されて居て、論議のないところとされて居る。十年以後一時に諸國にひろまつて、かくは同年長崎に初めて輸入されたかの如く傳へられたものであらう。向井震軒の煙草考には「日域モトコノ種ナク天正慶長ノ間或ハ元龜元年番商ソノ種子ヲ齎シ來リ初メテ肥陽長

古製煙管圖 或藏



此水口權兵衛所造頭尾別錄五七桐花徽號者世謂之、太閤様即云豐太閤所用也未知其然否

崎村唐土山ニ植ウ」と至極茫然と述べて居るが、奥州會津四家合考（卷十二）には「慶長四年己亥此年金登分判初焉。眞岩初用焉」とある。

更にめざまし草には「近頃ある人の話に越後出雲崎天正十七八年頃の檢地帳を見たるにたばこや何某といへる名をのせたり、されば古きことなりといへき。これは卷たばこか刻みたばこかしりがたけれどもなにまれば彼の舶より持ち渡りしものにこそあらめ」とあるが、天正年間、しかも南蠻船の訪れて來た西方より遙か離れた越後に、煙

草屋營業をなすものがあつたといふのであるから、それより以前に、すでに九州中國近畿と知られて居たものと考へられるが、ある人が檢地帳で見たといふ話の又聞きだけでは、直ちにとつて斷論の根據とはなし難い。

しかし大槻玄澤(磐水)の名著蕙録に載せられた水口權兵衛は所の煙管圖には、其の雁首に水口、吉久の文字と共に、桐の紋が彫つてあり、豊太閤所用と傳へられて居る(上圖参照)。これは一寸信を置きがたいと原著者もいふて居るが、もの好きの秀吉のことであり、且つ聚樂第に伴天連たちを引見したことなどもあつたので、或ひは案外煙草を知つて居たかもしれないが、これ亦参考の程度に止つて、斷言は出来ない。

其後、此の水口權兵衛張るところの水口させるの型を模したのも少くはないが、本朝世事談綺正誤(山崎美成著)には「水口權兵衛所造煙管圖、雖載蕙錄一年號無之、余所見之者有天正五年之刻、所藏之人所以真物而寫云、故今模出之」とあるが、圖を缺くのは遺憾である。天正五年と云へば、西曆一五七七年、ポルトガルに於て煙草が栽培せられてから約二十年である。したがつてめざまし草の著者が、羽州山形民間に得る所とて、二百餘年前の鐵煙管(長さ曲尺一尺一寸八分重さ五十目)を手柄類に記録して居るのなどは、その著述の年文化十二年から溯つて見て、慶長年間のものに過ぎず、この際さして重要なものとは云へないのである。

こゝに異説として、秀吉の朝鮮征伐即ち文祿慶長の役後、喫煙の風、朝鮮より傳はつたといふのがある。然しこれには何の典據といふ程のものもないのであつて、朝鮮の芝峰類説の如きには却つて「近歲初出於倭國」とあり、兒戲原覽にも「南靈草今稱煙草、一名淡色菴或作談、出於倭或云傳自南蠻」と述べられて居る程である。

これについては、朝鮮のところでもう少し詳細に述べるつもりであるが、いづれにしても、煙草が朝鮮より傳來し

たと考へられる材料に乏しく、或は此の説、朝鮮征伐に際して、我が軍隊が九州を出征の足場とした故に、當時すでにそこに輸入されて居つた煙草を知つて戦後故郷に持ち歸つたものを、朝鮮渡來と誤り傳へたものではなからうか。

して見ればこれ亦、文祿又は慶長の初年に於て、すでに我國に煙草が輸入されて居た事の證據と見られるわけである。かういふ具合に、我國に於ける煙草の記録が、すでに天正年間、信長時代にまで溯つて居る事は、それが元龜天正の間に輸入されたものであることを語るに足るものであつて、大體西曆一五七〇年代前後と見られる。其後三十年、南蠻より種子を傳へて、長崎唐土山櫻馬場に栽培するまでは、全國的には知られて居なかつたものであらう。

更にその國內傳播の経路を見ると、先づ九州より初り、慶長の中頃すでにその栽培は近畿山城に行はれて居る。信州にあつては、生坂の煙草は「同村稱名寺の住職西國に修業し、長崎にて煙草の種子を持ち歸りてより、段々ひろまり、遂に諸國に運送して一國の産物となるに至りし」と傳へられて居るが、不幸にして年代を缺いて居る。天正年間早くも北陸に傳はつた経路は判明しないが、越後路より更に會津、山形、奥州にも及んだものと考へられる。即ち常陸國誌には「烟草慶長四年日本に渡る」とあるのを見ても、關東筋にひろまつたのは矢張り慶長の中葉以後であつて、越後、會津、山形地方より稍遅れたかに考へられるが、これとて斷定の限りではない。

で、結局、何の何年、何處の何といふものが何處に傳へたのが最初であるかといふことは遺憾乍ら不明のまゝであるが、その原初の姿を、茫乎たる煙で蔽ふて居るところは流石に煙草の名にそむかないものがある。これは何も日本に限つたわけではなく、イギリスでも、ヴァージニアから煙草を携へて來て、ウォルター・レイにひろめさせたのが最初などと云ふて居るが、これとても慶長十年長崎櫻馬場組であつて、これに先だつ三年前、メシアス・ド・ロー

ベル博士などは、ちやんと煙草を研究して居るし、スコットランドの一部では、パイプをくわへてすまし込んで居たといふやうなわけで、結局何時の間にか渡つてしまつて居て、人を煙に巻いて居る始末である。

何しろ全世界の人間は殆んどみんな——いやその殆んどさへ必要のないくらゐに悉く——此の草の誘惑にかゝつて、驚喜茫然自失して、最初の正確な記録といふものを、後世にのこすだけの餘裕と落着きとを持てなかつたのであるから、いたし方もない所である。たちのぼる煙をながめて、もの思ふともなく思はさるともなき五分間の心境が理解できる人ならば、此の間の事情は察知し得るであらうと考へられる。この自らの原初のすがたを、けむりに蔽ひかくして居る靈草の魔力は、結局、立ちのぼる我がパイプの煙の中にさへも、靈妙至極千萬無限の心象をうつしては忽ちにして消えて行くのだ。

たばこの原初に關して、眞若といふ字について一言する必要がある。先に引用した會津四家合考などにも、眞若をもつてたばこにあてて居るが、流石一世の博識として自他共に許したところの林羅山すら「按本草綱目一則眞若。其狀貌主治及竹筍引煙之事皆似之蓋其流乎云爾」と迷つて居るが、もし眞若が、煙草と同様のものであるとすると、我國の煙草は延喜の昔からあつた事になる。延喜式中に此の眞若が眞若、狼若などの文字で、日本各地から薬用として獻納されて居たことが記されてあるからである。

薦録には「又本草綱目載眞若、其說稍近煙草。且延喜式有獻眞若之說。多識篇訓眞若爲多葉枯矣。愚按此草元來在此邦而古人以之當眞若採藥用一名呼近江艸其後絕無知之者云々」とて、本草和名抄あたりで、眞若——於保美久佐今案多波古とあるのは誤りであることを指摘して居るが、大和本草にも「今國俗すべて眞若をたば

こと訓すこれあやまれり」と斷言して居る。

眞若は、眞蕘、眞蕘又は狼若なども書くが、於保美留久佐、於爾美留久佐、乎爾之留久佐、乎保美久佐などと訓み、茄科の「はしりどろろ」Scopolia Japonica, Maxim (Solanceae) をさすのであつて、同じ茄科ではあるが、たばこ Nicotiana Tobacum, or N. Rustica とは全然別物である。本草圖鑑によれば、眞若は「山地の幽谷に生ずる有毒草なり。莖の高さ一尺餘、やまごぼうに似て、小なる葉を互生す、早春宿根より雪を侵して紫黑色の莖を抽き、長じて莖葉淡綠色に變ず、葉腋に長梗の小花を開く。花色は帶紫黃褐色」といふ至極むつかしい色である。煙草とは、その外形全然異つて居て、葉根共に烈毒あつて、人誤つこれを食べれば、毒腹中にある限りは、名の示すがごとく走り走つてとゞまらずといふ草である。マラソン競争などに、ちよつと嘔んで走ると、常識勝てさうな氣がするが、煙草にはこんな奇怪至極な力はない。

秉燭談にも「ソノカミハ本草ノ眞若ナリトイヘリ、此ハアヤマリナリ、其ノ後沈穆ガ洞詮トイフ書新ニ渡リ、其九卷ニ煙葉ヲ出ス曰、煙草一名思想草、言人食之則時時思想不能離也ト、ソノ說甚詳ナリ、コレヨリ世間ノ人タバコノ煙草タルコトヲ知」つたとあるにもかゝはらず、眞若をたばことよんで居るのは、林道春先づこれを誤り、文豪西鶴にいたつては、唯々此の眞若をもつて煙草の二字に代へて以來、もつて今日にまで誤り傳へられて居るわけである。ひどいものになると、たゞ眞とだけでタバコとよんで、「艸かんむりに良でタバコとは成程うまい字もあるものだ」などと、感心したり、させたり、させられたりして居るのは、どうも感心しない。

漢字制限の今日、今更らしくこんな議論でもあるまいが、タバコは、本朝延喜の帝醍醐の御代、西暦の十世紀す

に宮中御用として、各地より獻納して居たものであるなどといふ間違ひをせぬためにもとの老婆心からである。

第二章 徳川幕府の禁煙政策

きかぬものたばこの法度錢法度

玉のみ聲にげんたくの醫者

これは文録頃の落書と傳へられるものである。(薩隅煙草録) その時代の正否はこゝに論及せぬが、兎に角煙草渡來後、早くも排斥の叫びにあひ、迫害の手におよびやかされたことは、新舊思想の衝突、時代と時代との相剋の一焦點となつた煙草としては、當然經ねばならぬ受難の路であつた。

我が國に渡來してより徳川の中期に至るまで、煙草は執拗なる政權の彈壓の下をかいくゞつて來たのであるが、此の彈壓は、西歐諸國における禁煙令などとはその根本を全然異にして、勞働農民階級の搾取といふところに原因して居つたのである。もとゞ何の經濟的根據もなくして樹立された、此の勇敢無比の徳川政府は、限りある産米をもつて富の根柢をなすものと考へて居たので、その財政計畫が、農民搾取に根本を置かねばならなかつたのは當然である。あれで三百年倒れなかつたのがむしろ不思議とされる位で、幕末の混亂より政府の倒壊にいたるその根本原因は、この無茶な財政計



畫の行き詰りにも存したのである。だから徳川政府が、如何に農民の搾取に、あらゆる方策を講じつくしたものであるかは、單に此の煙草の禁令の小窓より覗いた丈けでも、充分に察知出来る所である。

「慶長十二年七月八日覺語にて「きせる」と云ものを懐中し競ひて煙をふきければ無益のものなりとてかたくこれを禁ぜらる(君臣言行録) 同十三年十月、此二三年來貴賤上下となくたばこといふものを翫弄し諸病平癒のためとは云へども却つて之を吸しものは悶絶して頓死するものあり依て再び禁ぜらる(官本當代記)」

と薩隅煙草録にも見えて居るが、慶長十二三年の頃、早くも禁令を出さねばならなかつた事實から推して見ても、その流行が如何に目ざましい速度をもつて居たかゞわかる。

「十四己酉卯月一此比荆組皮袴組とて、徒者京都に充滿す、五月中擲取之^一依^二此儀^三たばこ法度也、右の徒者もたばこより組に成ると云、きせるを大にして腰にさし下人にもたせ候」

と慶長日記にかいてあるが、このことは前述の坂上池院の慶長私記にも特筆されて居る。事實當時の市井無頼の徒には、鐵製長大の煙管を所持して居て、喧嘩の武器としたものが多かつた。此の時は江戸城内でも同様、喫煙を禁ぜられたが(古老雜話及び、駿河國巡村記)、泰平年表には、「同七月十四日たばこ法度のこと彌被禁、火事其他有^レ費故也」とあるが、其他有^レ費故也といふところに、搾取政治の本性が窺はれる、しかし乍ら、

引きよする煙草ぼんなうの犬なれや

君があたりを立ちもはなれぬ

などと狂歌にもあるくらの、一旦喫煙の習に染んでは、如何なる禁令を以つてしても、これを止めさせるといふ様な

ことが出来るものではない。アメリカの禁酒令が、むしろ飲酒の風を助長するの結果となつた如きもので、その流行はいよ／＼劇しく、いよ／＼盛になつて行つたので、其後三年再び禁令を新にした。腐穢集（安齋叢書三）に、

條々

一、たばこ吸事被禁畢、然上は賣買者迄も見付輩ハ、雙方家財を可被下也。若又於路次見付候に付てはたはこ並に賣主を所に押置可言上則付たる荷物以下改出するものに可被下事。

附於何地もたばこ作るべからざる事

右の趣御領内へ急度可被相觸候、此旨被仰出者也、仍而執達如件

慶長十七年八月六日

見付けたら、賣り手、買ひ手兩方の家財を下さるといふ、懸賞付きといふからには、誰しも素人探偵の血眼で煙草犯人を探しもしやうが、いよ／＼現行犯を見付けた時は、そのたばこの一荷も下さるといふのであるから、結局煙草の賣買はいけないが、のむのは差支へなしといふことになる。だからこんな禁令が容易に徹底せなかつたことは、それより三年、元和元年六月（一説には五月）又々御制禁の布令が出て居るのでもわかるが、又よしそんなものが出て居なくともわかりきつたことである。此度は爲政の地位にあるもの先づ範を垂れねばならぬと氣付いて、武士階級率先して、その徹底を期したものであらしう。

一、先日鎌倉右京亮を以て申上候今度たばこのみ申候衆御暖の儀知行を被召上尤の由申上候、就其よく被聞召候へはかしらたち候衆のみ申由候哉左様にてはめしにくき儀も可有之由尤に存候、就中此宮内少鎌又七

郎此兩人などのみ申由候哉於ニ必定ニは笑止に存候猶々たしかなる證據被成ニ御尋ニ重ねて可被仰聞ニ此方にても可承事

一、今度於ニ中途ニ諸人をも不憚をしいたしのみ申候衆は先知行被召上ニかけ／＼のみ申候衆は其汰沙可仰付やうも可有之候間かたく御法度被仰出、上を何共不存をしいたしのみ候者は深々敷罪人にて候先此衆は可及御暖くと存候

一、この頃承付候西丸女房衆共たばこのみ申候つるよし承付候て内々きかせ申候正儀相知れ申候はゞ重ねて從是又々可申上候、恐惶啓白

元和元年

陸奥守

二月廿七日

家久判

惟新様

参尊報

猶以此方の儀別尋可申候 以上

たばこのことは天下の御法度の事に候間いかほどもきびしく御座候儀尤に候

又同年六月

一、御分國中たばこ御法度稠候得共求摩より于今たばこ商賣に通ひ候由一昨廿三日猿渡新介長壽殿爲見廻、求摩へ差越候と相見得候事、

閏六月廿六日

陸奥守様

惟

新

以上は島津家文書に見えたところであるが、此の元和元年の禁令は、かくの如く徹底的であつて、當時の平戸イギリス商館長リチャード・コックスの日記にも、煙草を全部没収された事が述べてある。すなはち一六一五年（元和元年）八月七日の日附で、

「ゴノスコドノ（註吾之助殿？）英吉利商館に來り語りし中に、キング（即ち平戸の大名）は、天皇の嘉し給ふところのものなりとて、煙草盡く焼きすて領内一人たりとも、呑むべき憂ひなきやうにと命ぜられし由傳へたり。かくの如き令は日本國中布かれたるもの、由。かくて本日彼は先づ手初めとして、四ビクル即ち百ウエイト（註約六十五貫）を焼きすて、他の何人にも同様にいたし、裁たるも抜きとるやうに命じ去りぬ。彼等ジャボンス男女幼少、此草を呑みて狂するさまは奇觀なり。初めて用ひられしより今年に及ばず。」

とある。大名をキングと見立てたり、天皇が煙草を焼きすてのを喜ばれたり、（事實 Emperor's Pleasure とある）日本人の喫煙の際の醉態は奇觀至極だと見るあたり、永年居住して居たコックスにして、なほこんな觀察をして居るのであるから、國情其他誤り傳へられたのも無理からぬ次第である。

こんな風に、元和元年の禁令は全國的に可なり徹底的のものであつたらしいが、翌二年十月には又々禁令の出直しをせねばならぬ状態となつて了つた。かうなつては法令其もの、輕視から、延いては政府の權威までも輕んぜられ

るの懼れがある。武家禁制録に、

一、たばこ作並賣買御停止札

條々

二、たばこ作者町人は五十日、百姓は三十日自分兵糧にて籠舎たる可き事

一、同賣買候同前之事

一、同作候在所者爲過料百姓一人に付て鳥目百文づつ可出之事

一、同作候所代官爲過錢五貫匁出すべき事

右條々堅所被仰出也仍下知如件

元和二年十月三日

安藤對島守
土井大炊頭
酒井備後守
本多上野介
板倉伊賀守

と見えて居るが、たばこ作つた町人の五十日籠舎は、自分の商賣の他に、百姓の仕事にまで手を出して利を獲やうといふ不心得に對して、二十日重かつたのであらう。自分兵糧といふ條件付きとは、中々に興味ふかい刑罰であるが、

それよりも同在所の百姓一人残らず鳥目百文づゝの過料に處せられ、代官は五貫の過錢によつてその責任を連帯に問はねばならなかつたあたりに、徳川政府の基礎漸く固まらんとした當時の、フアツシヨ的彈壓による統制の力強さが如實に示されて居ることは、此種の政治的傾向が各方面から眞面目に論ぜられて居る所謂國家非常時の今日に對した。たから大きな興味を提供するものと云へやう。

然しこのフアツシヨ的統制の力強さをもつてしても滔々たる喫煙の風習を斷つといふことは到底不可能の事であつた。だから刑罰の目的が、眞に犯罪者の社會順化にあるとするならば、むしろ此の禁令それ自體が自分兵糧で五十日の蘊舎を課刑されるべきではなかつたか。

土井大炊頭は流石に當時の才物として、今も講談落語などにその名をうたはれて居る丈けに、此の禁令に署名の一人であり乍ら、實際に當つてはあざやかな肚藝で成功して居る。落穂集(大道寺友山寛文頃の著)卷六、煙草初りの事に記してあるのがそれだ。「(略)我等承及ビ候ハタバコ御制禁ノ儀ハ台徳院様(註秀忠公)御代ノ由タバコヲ作申間敷旨諸國へ仰セ出サレ候ユへ向後御城内ニ於テモ諸人タバコヲ給候儀堅ク御法度仰セ出サレ候由、其節ノ義ニ是アリ候ヤ、御城ノ御番衆各湯呑所へ寄集リタバコヲ吸ヒ居候所へ土井大炊頭殿見請申サレテ御番衆ニ共襖ヲ立テ候様ニト申サレ着坐アリテ唯今何レモ御吸候ヲ我等ニモ振回ハレ候様ニト申サレ候ヘバ何レモ迷惑シテ兎角ノ挨拶ナク赤面シテ居ラレ候所ニ再三ノ所望ニ付是非ナク袖ノ中懐中ノ烟管タバコ入ナド取出シ差出シ候ヘバ大炊頭二三フク吸ハレテ今日ノ義ハ手前モ各方モ同前ノ事ニ候重ネテハ御無用ニ候御上ニテ殊ノ外御嫌ヒ遊バサレ候事ニ候ト申サレ候ニ附其段内々ノ言送リト成リ其後湯呑所ノタバコハカタク相ヤミ候ナリ。」

見方によつては氣障なヒロイズムといふ嫌味もある。恐れ入つて固くなつて居る御番衆から、無理矢理に烟管をとつて、二三服吸ひ乍ら、その心中皮肉な笑ひを樂んだであらう彼土井大炊頭のやり方は、少々鼻につく。然し當時としては皮肉もこゝまで來れば、一種の肚藝であつて、美事と云ふべきであらう。

これで御城内の禁煙は、強制的にはあるが、兎に角一時成功したのであつたが、流石の土井大炊頭も江戸市中の戸別訪問はなり兼ねたと見えて、その禁令は中々に徹底しなかつた。しかも此度出した禁令は秋も十月の三日であるから、すでに煙草の收穫は早いところでは初りかけて居たであらうから、翌三年の煙草の需要には充分應じ得るだけのものが生産されて居たわけである。それを承知の上でか、氣付かないでか、翌三年の六月には、更に天下一統の禁令を叫んで居るあたり、ドコに百年の大計を樹てる爲政者の面目があるのかと失笑したくもなる。

梵舜日記を見ると、「元和四年六月十七日甲戌タバコ賣者昔伊州(柏倉)ヨリ俄改、數十人取擲、雜色ニ申付奉行也」などとあるけれども、こんなことで何とかならうといふ様な、そんな生やさしい流行ではないことは何度言ふても同じこと——いや言ふ度毎にさかになる勢の煙草であつた。

同年の五月に、前令を反覆して煙草の栽培・賣買を禁せられた(國師日記)のであつたが、その効なかつたので、こゝに搦手からの斷然たる處置に出ることになつた。保會川に、

「此の如く煙草は世の費なりとて堅く禁制せられしよりきせる狩といふこと初り日本橋のかたはらに竹行馬を結びこゝに江戸中のきせるを集めしが夥しきことなりと云ふ。」

又神澤貞軒の翁草(五)に、

「寛文の頃までありし古老の曰く(中略)、大猷院殿(註家光公)御代に、煙草は世の費なりとて堅く御停止に成り、江戸町々烟草狩りを仰付られ日本橋のかたはらに矢來を結び、江戸のきせるを其中へ取捨る、夥敷事言計なし、如是堅く御法度なりしが其後間もなく破れぬと老翁の語りき」

などあるのがそれだ。このすてられた烟具に目をつけた一商人があつた。近代世事談によると、現在のデパート白木屋の先祖かどうかは知らぬが、兎に角白木屋なる男が、ある時(元和)柳原の封疆を通つたら、そこに病みつかれた様な乞食が、頭から菰をかぶつて、ひそかに烟草をのんで居るのを見て思ふには、こんな厳しい禁令が出て居るにもかゝわらず、然もその日の食にも困つて居る乞食すらやめられないといふ程に、世人の好むところであつて見れば、いづれは近い中に禁令のゆりることもあらうといふので、早速、江戸京大阪の捨れぎせる烟具の類を二足三文に買ひしめて、庫に入れて待つて居たところ、果せるかな程なく此の禁弛りて、巨利を得て今日に至る由述べてある。

これに對して、本朝世事談綺正誤に、「元和頃は下さまにてきせる用べき筈なし」と正誤して居るが、それこそ正誤せられねばならぬ誤りである(第三章参照)。この白木屋の如きは、大火と見るやその夜の中に木曾に急いだ商人以上に、機敏の商才あつたものといふべきであらう。

かやうに、彈壓はきびしかつたのであるが、縷々として禁令の隙間を洩れる煙はどうすることも出来なかつた。煙草がないとすると、ふきのたうを吸ふてまであきらめかねた。

にがくしくもたうとかりけり

皆人のまるるやふきの塔供養

たばこ法度の春の山でら(新增犬筑波集)

後水尾帝の御製にも、

藻鹽やく海人ならねども煙くさ

なみよる人のしほとこそなれ

とあつて、時代の潮流はかく滔々、上は雲の上より、下は菰の上にまですでに阻みがたい勢で溢れて來た。

下つて寛永年間には、形式的の禁令も流石に弛んだものと見えて、其昔談(三木隆盛著)には「淡婆姑は日本寛永年中の頃より萬國とも一時にこれを用ふ」などあり、麓の花(山崎美成文政二年著)にも「(略)さればたばこといふものをいるゝものなくてはかなはぬ故に、初はかみに包みて持たり、そは寛永元和の頃かとよ(中略)さてそれより袋にいれたりゆへにたばこ袋といへり云々」と見える通り、次第にその器具用具も發達して來た。詳細の風俗はいづれ後章に述べるが、寛永頃のものと言はれる鳥籠物語にも、

「曰、藤人角内や珍藏などの小坊主に、たばこ袋にきせるづつ、火なほのけふりほのやかに松吹風にさそはれて」など見ゆ、それよりのちつきくかゝる器に美をつくし玩弄に志を失ふことになり行くぞうたてき、もし箕子とかいへらん人に見せたらんには何とかいはめそのかみひとたび御制禁のありしもうべなる事にこそ」

などと、禁令は有名無實虚脱の觀があつて、この著者のごときは、ひとたび御制禁のありしもなどと、すでにその禁を解かれたやうな氣持ちで居るが、事實は、本朝世事談綺正誤の「按するに御禁制の弛けりといふはひが事なり、ひと度御禁じのありしより、つきくことゆるやかになりもて行くなり」といふて居るのが正しいのである。

煙草記に亦「或書曰、日本元和寛永の頃天下に令してたばこを植ゆることを禁ぜしむ、然れども止む事を得ず、つるに茶酒の上に立つ云々」とあつて、其の効あるといふことは絶えてなかつたのであるが、こゝに政府當局が、いよいよ農村救済の美名にかくれて、本田畑の煙草栽培を禁じて、搾取政治の本領を發揮したからくりがわかつて来る。

覺

一、當年者諸國人民草臥候間百姓少々可令用捨此上若當作毛於損毛者來年可爲饑饉儉約之儀兼而雖被仰出諸士も彌存其旨萬事相慎可減少之町人百姓以下食までも其覺悟いたし不及饑饉可相計者勿論百姓等は常に猥に米不給様に可申付事

一、五穀之類つゝに不成様可申付事

一、來年よりは本田畑にたばこ作るべからざる事

右之條々被仰出候間被得其意家中之者并領内寺社之輩町人百姓堅可申付者也

寛永十九年

六月廿九日

- 五味 金右衛門
- 小守 遠江守
- 石川 土佐守
- 會我 丹波守
- 久我 因幡守
- 永井 日向守

- 永井 信濃守
- 板倉 周防守

松平薩摩守殿

諸士は萬事その旨を體して相つゝし、町人百姓以下は食までも覺悟いたし、百姓は特にみだりに米を食べるなどいふのである。しかも、五穀つゝにならぬ様であるから、下層程その搾取のされ方がひどい結果になる。煙草の栽培は當時相當の収入になつたので、百姓は擧つてこれを作つたが、米の收穫のみで、その經濟政策の基礎をたて、居た徳川政府に見れば、これ即ち米産減額の結果となり、それが直ちに財政に重大なる影響を及ぼして來るのであるから、煙草の本田畑栽培を禁ずるのは當然である。徳川政府から見れば、百姓は唯一の可搾階級であつたので、彼等に米食を制限してまで緊縮を旨とさせ、能ふ限りの搾取をせねばならなかつたわけである。餘談にわたるおそれがあるが、此の間の事情を知るよすがに、徳川禁令考から農民に關する條例二三を引いて見よう。

覺

- 一、嫁とりなどに乗物無用事
- 一、荷鞍に毛氈を掛申間敷事

これはやはり寛永十九年五月の布令であるが、これと一緒に、肴賣りの村々に入ることを嚴禁して居る。かうして衣食に關する極度の干渉を以つて、米穀の搾取を最大限に能率的にしやうといふのである。彼等支配階級から考へる

と、百姓は菜つば、芋の葉でも生きて行けるのだから——さうして労働して行かれるのだから、米などを食べさせれば、それだけ自分等の損になるのだ。百姓の此の稗、粟、菜ツバのカナリヤ、十姉妹的生活以上のものは、即ち奢侈贅澤であつて、支配階級の収入を減する結果となる——つまり百姓は納むべきものも納めずに贅澤をして居るといふことになる。

百姓は能ふ限り働かせて、能ふ限り搾取せねばならぬといふ方針で押し進めば、彼等支配階級は生活の安全を必要且つ十分に保證されて、政治は立流にやつて行けると考へたのである。甚しきは「市中に出、むざと酒のむべからざる事」といふて居る。これは寛永年間のことであるが、慶安二年には、更に露骨な布令を出して居る。

一、酒茶を買のみ申間敷候妻子同前之事
はまだよいとしてその次には、

一、百姓は分別もなく末の考もなきものに候故秋に成候得ば米雜穀をむざと妻子にもくはせ候いつも正月二月三月時分の心もち食物を大切に可仕候に付雜穀專一に候間麥粟稗大根其外にも雜穀を作り米多く食つおし候はぬ様に可仕候飢饉之時を存出候得は、大豆の葉小豆の葉、さげの葉、いもの落葉などすて候はもつたいなき事に候には、全く啞然たるものがある。流石に氣がさすと見えて、單に勿體なき事と云ふては居るが、これではカナリヤ十姉妹から、バツタ、キリム／＼にまで下落した事になるが、その酷使ぶりを見れば、又中々牛馬以上である。

一、家主子供下人迄ふだんは成程疎飯をくふべし、但田畑をおこし田をうへいねを刈又ほねおり申時分はふだんより少喰物を能仕、たくさんにくはせつかひ可申候其心付あれば情を出すものに候事

全く遠乗りのあとに、馬に人參を食はせると同様である。更に如何にみめかたちよき愛妻といへども、大茶のみ、物まわり遊山などを好む女房は離別すべしと命じて居るし、たばこ等は勿論「これは食にも不成結句以來煩に成ものに候其上隙もかけ代物も入、火の用心も悪候。萬事は損成ものに候」のであるが、萬事に損なのは、正直のところ彼等のふところなのであつて、全く蜜蜂でも飼ふて居る氣もち、折角花の季節を働きつゞけて貯へた蜜はすつかりとりあげて、冬の間は命をつないで行ける丈の極量の砂糖を管めさして置く。しかも上等の砂糖では損であるから、さげ豆の葉芋の落葉を食はせやうといふのである。

かうして生かして置く家畜——と少しも異ならない生活だ——を、更に教訓するといふのであるから、全くいゝ氣なものであつた。

一、親に能孝行(中略)此趣を守り候得ば佛神之御惠もありて道にも叶、作も能出来(中略)身持能成、米金雜穀をも持候とて無理に地頭代官よりも取事なく天下泰平之御代なれば脇よりおさへとる者も無し之

由であるが、一體百姓たちは何時頃になつたら米金雜穀を多く持ち候様になるといふのか。それを又地頭代官などが取るといふ様なことはしないと、わざ／＼断つて居るあたり、全く泥棒に説教されるやうな氣持ちである。

煙草栽培の制限の如きも、能ふ限り搾取して、わづかに生命の保持と、労働力の維持に必要な最底限の經濟範圍を許さうとする方策の現れであつて、出来れば更にその煙草栽培の爲めに開拓した土地にも、米穀を作ることを強制しやうとするのである。

「或云、天下の奢美故諸士の用不足にて年々高めんになりぬれば、百姓も地の者計り作りては年貢にまどふ故に煙草

を作りて商人へ賣り年貢の足しとす、御たばこ塞ぐ地計りも日本國中を合せて近江程なる大國二三ヶ國は空しからん、それにかゝりてする者は皆遊民なり、煙草の道具に費する竹木銅鐵やきもの、其他あげて數へがたし、煙草きざみになりて世を渡るもの計りも三萬餘人あるべしと云へり、煙草を作らぬ様に、それにかゝりたる者共もいたまぬ様に五六年程におやめなされたらば此の一色にても日本の國々廣くなり諸人ゆるくと可仕候、此御仕置計りにても奉公人は多くなり待らん。」

年貢の足しにもと、作る農民の窮狀を知り乍ら、なほ實權に媚びて、これを五六年にて禁するならば、さしたる困難もなく米作地をひろげ、三萬餘の失業者を、彼等の奉公人即ち奴隸とすることが出来ると論ずる。この宇佐問答の著者の考へは、當時のブルジョア・イデオロギイの代表的なもの、一つであらう。さうして彼等は泰然と白米を食み、絹布をまとひ、銀ののべぎせるで煙の輪を吹いて居たわけである。

このやうに、本田畑の煙草栽培を禁ぜられては、瘦せ果てた原野に、木を倒し、石を起し、むなしくも石河原に種まく苦みを苦んでまで、苛斂誅求に應じなければならなかつた。生活に於ける一切の慰安を奪はれて、たゞ黙々として耕しつゞけて、限定された灰色の一生を死んで行かねばならなかつた農民である。

少し本文を離れ過ぎた感があるが、この様な彈壓の下にも、喫煙の風は全く防止すべくもない勢であつて、慶安四年遂には失業インテリ丸橋忠彌、徳川政府倒壊の大陰謀遂行の準備に、きせるを以つて江戸城の測量をなすの聖代の不祥事さへ惹起するに至つたので、流石の政府も仰天して、此の大陰謀に重大なる役目を演じた妖器きせるを、一般に持ちあるかせるのは、危険思想の激化、テロの助長のおそれありと氣附いてか、早速同年、

煙草呑候處家内に定め置候て其場所より外にてたばこ呑ざる様可仕事

と江戸各町内にお觸れを出したが、この様な政治的大陰謀に際しても尙ほ、往年の壓制的態度に出て、斷然禁煙令を施行するの舉に出ることが出来なかつたほど、それほどにすでに喫煙の風は大衆的になつて居たのである。

もう一度耕作の方へもどるが、原野を拓いての栽培は勝手たるべしといふので、真正直の農民は大いに喜んでとりかゝつて見ると、開墾から収益まで數年を要することがわかり、背に腹は代へられず、本田畑に栽培せねばならぬ者續出のところへ、賄賂とり専門の、俗吏共惡勘定方などが居て、開墾地を本田畑に書き換へたりしたので、寛文七年閏二月十九日附、又々、

本田畑にたばこ作候事停止野山は不苦

覺

於三諸國在々所々本田畑にたばこ作候事自今以後可被_レ停止之。但野山を新規に切起し作候儀は不苦候右之趣各御代官中に堅可被_レ申付候 以上

と達して居るが、其後更に八年、延寶三年八月には、又々同前の令を新にし、つゞいて同七年三月には、米穀の産出を妨げるといふ口實をむしかへして同前の令を發し、併せて煙草に關する訴訟は一切とりあげないと決めるに至つたところを見ても、政府が如何に煙草のために煙にまかれ、手をやいて居たかどわかる。

更にそれから十五年、元祿六年十月には、

「此月令せられしは東西内外の下馬所にて煙草喫べからざる旨前々令せられしにこのころ犯すものあり、東は保科肥

後守正容が邸邊、西は牧野備後守成貞が表門邊までには目付して見廻らしめ煙草用ふるものあらば、其主の姓名をも聞糺しむべしとなり」

と常憲院殿御實記(廿一)にあるがこれについて(同卅一)を見ると、

「元祿八年十月二日町奉行に命ありて所屬の與力をして晝夜とも途上にて煙草喫ながら往來するものあらば見及ぶまゝにいましむべしとなり」

とあるが、此のいましむべしとは説諭とか訓誡とかいふ様な紳士的の意味ではなく、縛り上げろといふことである、令條記に「——(略)往來するものを追捕せしむ」とある方がハッキリして居る。

大老堀田正俊の専断は、遂に兎刃の下に屍を曝すの結果となり、ついで柳澤吉保は、近頃の政黨屋がチョン髷さへつければ、すぐ代理のつとまりさうな賄賂政治に辣腕をふるひ、——財政に行き詰つては、荻原藏相の進言によつて、惡貨鑄造によるインフレーション政策で國民の生活を不安ならしめるといつた一代の暗黒網吉の治世では、この二回に亘る煙草禁制のごときは、上乘の政治と言はねばならぬのだらう。

更に、徳川禁令考(四十四)元祿十五年の項を見ると、その十二月二日

たばこ作之儀當年迄作り來候半分可作事

覺

前々よりたばこ本田畑に作間敷旨度々相觸候得共連々たばこ大方作出し候來未年たばこ作候儀當年迄作來候半分作之殘半分之處には土地相應の穀類可作之候若相背輩於有之可被爲曲事者也

午 十 二 月

覺

相觸候書附之通、御料は奉行御代官、私領は地頭より申付候當年迄たばこ作候前々作來候高書付其中半分たばこ作候様申付殘、半分は穀類作候様に申付候段書記之來年二月迄之内御勘定所へ可被差出候又穀類可作之處種子不足之所は奉行御代官地頭より種之儀申付之田畑荒さる様可被致候 以上

午 十 二 月

まことにやゝこしい覺で、こういふのをこそ覺えにくいといふのであらう。果して翌十六年十二月には又々同様の事を繰り返さねばならなかつた。

申年多葉粉作候儀達

來申年多葉粉作候儀當年之通り去年迄作候高之半分作之殘半分には土地相應の穀類可作之候若相背輩於有之曲事たるべき由、御料は奉行代官、私領は地頭より急度可被申付候

右之趣此方より可申達、由御老中被仰候間如此候去冬御觸書之通無相違様可申附候旨被仰出候 以上

永井伊賀守

松平伊豆守

丹波遠江守

荻原近江守

翌寶永元年十二月三日になると、再び同前のことを繰り返して居るが、そんな煩雜で齒痒いことをつゞけて居るよりは、いつそのこと、十五年の御觸れ書の午とか申とかいふ字を削つて、そのまゝ何時迄も改めず、去年の半分、去年の半分で行けば何時の間にか、煙草は全然作らなくなるといふことは、級數の公式 $1 - \frac{1}{2}^n$ などを持ち出して證明せずとも、わかりきつたところではないか。

下つて享保、徳川十五代中興の名主と稱せられる吉宗、迎へられて將軍の職につくや、大いに殖産興業に意を注ぎ、特に農業のために力をつくした事は、一般に知られて居るところ。田畑の荒蕪久しきに亘つて、墾開すべき費用なく、止むを得ず年月を経るまゝに放棄されてあるところには、官費を以つて墾墾の事業を起させ、さらに墾墾後數年間には收穫の少ないのを考へて、租税を免じ、利益の多い藍、茶、甘薯等を初め、徳川家歴代の禁煙をうけて來た煙草までも、その栽培を奨勵して、こゝに煙草受難の歴史の幕を閉ぢたかと思はれる。

九代家治に至つて、徳川家の家憲を破つて煙草を吸はれるに至つたが、「もとより表立ちし事ならねばこれを司るものも内の御用と名付呼べる」由、(家治) 浚明院殿御實記附録に記されて居る。

官權の禁煙が、如何に執拗嚴重であらうとも、完全に大衆の支持を得た此の煙草の縷々嫋々たる煙にして、洩れ難い隙間といふものはないのであつて、我々はこゝにも大衆の動きに抗しかねた官權の敗北を見るのである。すなはちそのかみの落書に曰く、

春もはやながき火繩をすてしより

野邊はけぶりてもゆる若草。

第三章 煙草と民衆

然らば此の煙草に對する大衆の支持とはどんなものであつたか。それは江戸の市民が、徳川三百年の泰平に、如何に煙草と相より相親んで生活して來たかによつて、如實に語られるところである。こゝに暗鬱の農民生活、陰險な彈壓政策をしばし忘れて、市井の間に紫煙をたのしむとしやう。

煙草傳來の初期には、「乾暴シテ其葉ヲ割リテ紙ニ貼リ之ヲ卷テ火ヲ吹キ其煙ヲ吸フ其始メテ希施婁ヲ用フルヤ紙ニ貼ラズ。希施婁ノ制或ハ鑰ヲ用ヒ或ハ竹ヲ用フ」(原漢)と羅山文集にもある通り、葉を二つに割つて、中央の筋を除き、紙に貼つて卷いたといふのであるから、紙と煙草を同量宛吸ふて居たことになる。又希施婁の制或は鑰を用ひとあるが、これは一部富裕の人々にのみ許されたところで、一般的のものとしては矢張り竹又は葭が用ひられて居たことは、本朝世事談綺に、「たばこ渡りたる時節は紙を卷てたばこを吞たり、そのち葭或は細き竹をつぎてそれにはたばこを盛りて吞みけるとなり」とあるに見てもわかる。

又、初は竹筒に入れて烟を吹くなどともあるが、大體、竹葭の先端を、節先五分程残して切り、その節に小孔を穿つて火皿とした眞直なきせるであると考へられる。

青木昆陽の續昆陽漫錄に「本草彙言曰、煙草、晒乾細切如絲縷、成穗袋入筒口、火燃吸之」と、これ今の煙管なき故なり、我國にても遠國の窮境には煙管なしに竹筒の口へ煙草を入れて吸ふものあり云々」とあるが、此の竹筒又は葭が我國煙管の原始であることは明白である。然し眞直の筒では、火からが咽喉へ飛び込んで來る危険がある。此の

缺點をのぞいて現れたものが、同じ竹製ではあるが、立派な雁首を具へたきせるである。

然しこんな煙管も、一寸手に入れることはむつかしかつたものと見えて保會川には、「しかれども今のごとく煙草の道具なし、竹ぎせるとして細き竹のふしをこめ、やうやく火皿程に切り、筆の軸ほどあるものを夫へ横につけて香し也、夫さへ持たる人稀也、下々などは直ちに烟草の葉をぐるぐると巻、呑口に紙をまき火をつけて吞たり」とある。



ビルマルシヤイ地方竹煙管
(ダンヒル氏パイプブックより)

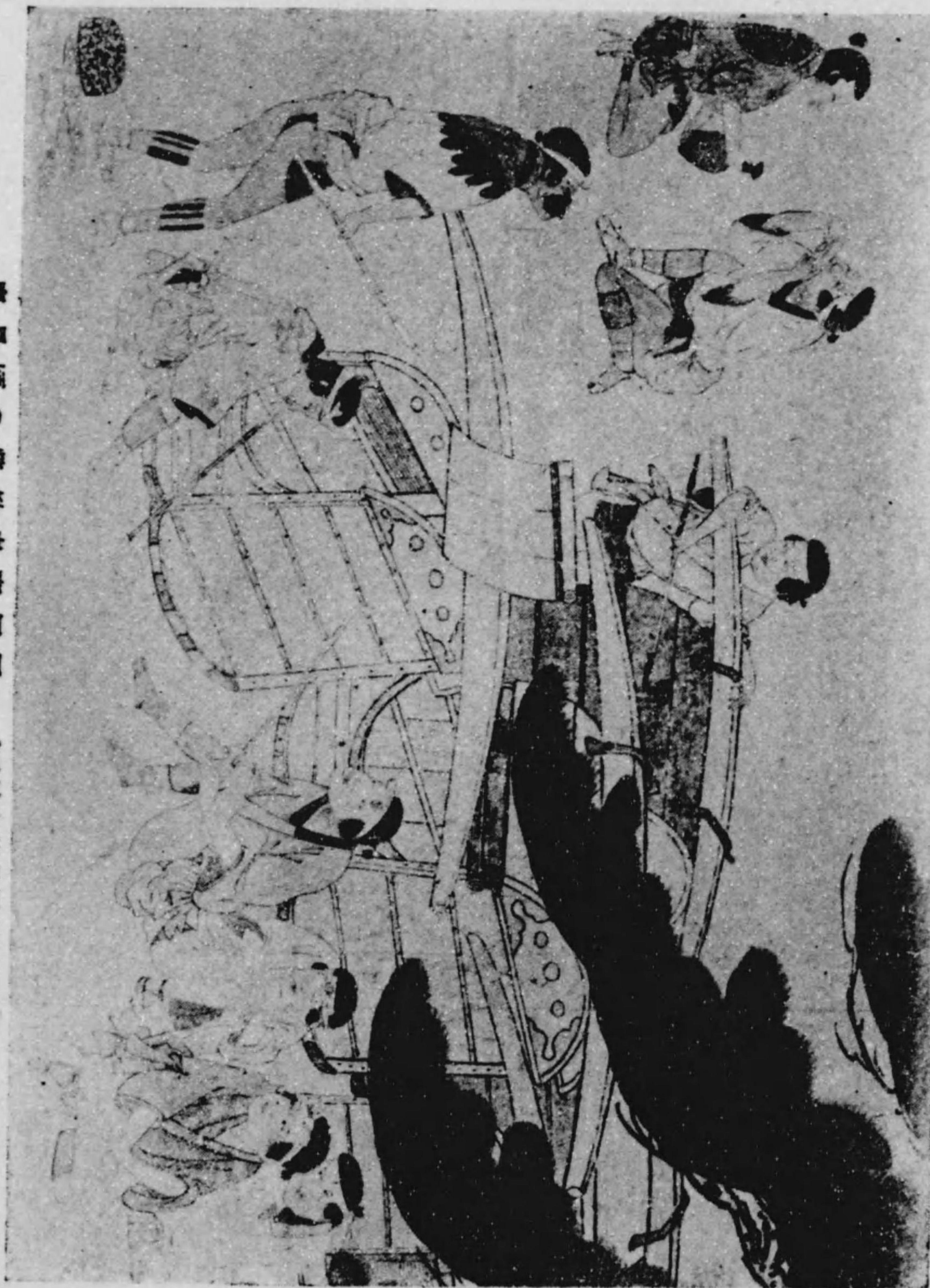
この下々杯では持たれぬ所の竹ぎせるは、徑一寸位までの竹を節から七八分に切り、横に孔をあけて筆の軸ほどの竹をさしこんで、丁度小形の竹杓子のやうなものであつた。こゝに注意すべきは、ビルマのルシヤイ地方の煙管が極めてこれに類似して居ることであつた。矢張り竹製である。(上圖参照) 羅字の語源は老撾より、キセルの語源はカムボヂヤ語より來つて居ることに考へ併せて又興味を惹くに充分だと考へられる。

然し此の種の煙管が用ひられたのは、極めてわづかの間であつて、金屬ぎせるの出るに及んで全く廢せられたものと考へられる。金屬ぎせるは即ち水口權兵衛の水口ぎせるを最古とすると云はれて居るが、その形状は前掲(三三頁参照)の如く、ほと現今のもと同様で、雁首の下部に數環あり、羅字につぐ部分は八角をなして、水口・吉久の文字が刻まれてあり、がつしりした感じのものである。傳へられるごとく、或は桃山文化がこゝまで影響してゐるのではないかとさへ考へられるのである。

更に慶長初年のものとして薦録に出て居るもの、又當時の美人屏風中に描かれたものなどに至つては、全く華奢と



慶長中期婦人喫煙の圖
(松浦家美人屏風より)



慶長頃の労働者喫煙圖 (下村家花見屏風より)

いふよりはむしろ弱々しい位、細長い形になつて来て居て、現在の朝鮮きせるに最も酷似して居る。然しこれ等は主として室内用、又は婦人用であつて、男子用のものは、「五ふくつぎの煙筒タバコ、小者にへうたん、毛巾着、ひなびたこととにぞありける」(好色一代男二女はおもはくの外)と江戸初期の風俗にうたはれて居り、嬉遊笑覽に「昔のきせる皆々ながく小者が肩にうちかつぎ行く様古畫に見えたり、きせる筒とはきせるの事にて、今の如くきせるを入る袋にはあらず、きせるらう長き故多くは煙草袋を結付たり、きせるの短くなりしは懐中することになりてより也」と説明してあるのが即ちそれである。五ふくつぎのきせるとは、五服一度に盛られる程の大ききせるで、當時これが市井無頼の徒のよい武器であつたことは前章に於て述べた通りである。

煙管の長さは初め七寸を標準としたが、家にあつて用ひる時は、らうの長き程煙の來ること舒徐ニシテス爲美トイフといふので、次第に長大のものが流行り出し、一丈以上に及ぶものさへ出て來た。然もこれが鑰、鐵などで作られて戸外へ持ち出された日には、成程立派な武器となるわけだ。煙草百首に「段鑰鐵銅等をもつて是を造、當時のごとき華美なるものにあらず、予藏ヲ長サ三尺竹のらうを用ひず、遊行の時は奴僕に持す」のであるが又「烟ヲ盛ルニ多ク一倍ヲ裝フ可キモノアレバ多ク兩倍ヲ裝フベキモノアリ」(煙草考)といふ始末で、ます／＼その戰時能力を増大せしめやうと計つた。

元和のむかしの不良少年は、煙草より徒黨を組んで、荆組、更にそのいばらも平氣だといふ意味の皮袴組などが、三尺餘寸の鐵ぎせるを振り合つて京洛を騒がしたりしたが、下つて寛永正保の頃になつても、「常には煙管を携へず、たま／＼遊行の時は携ふることなれども、みづから懐中せず、奴僕にもたせる故に丈いと長し、きせるの頭雁の首に

似たる故に雁首の名残り、火皿いと大きし云々」奴僕に持たせる故に丈いと長いのではなくて、丈いと長いが故に奴僕に持たせるのである。巧みに因果を顛倒さして、兇器のカモフラージュを計らうとした骨董集の著者こそは油斷のならぬ人物といふべきだらう。

慶安に入つては、きせるの長大稍すたれたものか、又は常用すれば怪しまるゝ故にか、忠彌は八寸のきせるで測量をやつた。高島屋がやると、濠に石を投げこむとすぐきせるを身構へて「濠の深さをためさんと」するが、あれは學理上から見ると少し違つて居るといふのである。石をなげ込んで、泡の浮いて来るのを見れば、その深さは大體わかるので、忠彌が煙管を以つて覗むのは、お濠の廣さか、乃至は石垣の高さかの何れかでなければならぬ。つまり相似三角形による測量をやつたのである。決してあれで濠の深さが測れるものではない。いつそのこと、その時彼が一丈もある大きせるを擔ぎ出すまでに酔つぱらつて居たならば、それはまた別問題で、いきなりそれをお濠に突込んで見る事も出来やうが、八寸の煙管ではあゝするより外に方法はなかつたわけである。

話しをもどして、室内の煙草に移る。閑雅靜寂の座敷に珍客を迎へた際には、煙草の接待を如何にすべきかについて萬治寛文頃の風俗その他を記せる昔々物語（享保七年新見 傳左衛門著）は委細をつくして居る。

「昔は懷中多葉粉と云事會てなくして、よし共あしく共亭主のたばこ盆あにる多葉粉を吞也。のみやうも今とは違つて、亭主の座敷へ出るまでは吞ず、亭主物語して煙草まいれとすゝむる。客は先づ御亭主よりまいれと、盃茶のごとく二三度いふ。其時亭主鼻紙をへぎて、きせるをとりつばを發し、きせるを紙にて拭ひ、是にてまいれときせるを指出す、客取て戴きのむ、多葉粉能くば譽る、一服二服も吸ふ。つばを懸て我前に置、歸る時分はな紙にて拭て



Fig. 143.—Smoking fashion in old time, extracted from a pamphlet published in the years Manji or Kanbun, (more than two hundred years ago).

請取渡しの禮式の圖

(薩隅煙草錄より寫したれども原圖はめざまし草にあり)

多葉粉盆に入、暇乞して立、拭ふ時亭主其儘被差置よといふ。近年たばこ吞やう左様にあらず、不作法千萬なり。若亭主頭役の老人か親方なれば、多葉粉吞めとありても、たばすとて吞す、その頃隠なき奴といふ人も、六法で伊達かいを盡す人も、慇懃の座敷又は親方の前にて、たばこのむ人なし、もし多葉粉入りおとしても私のにては無之といふて隠候也云々。」

又、「昔は振舞に客來て膳前には多葉粉の外何にても出さず」とある。尤もこういふやゝこしい儀禮の下で、さういふものが出されたら、挨拶の中に日がくれてしまふことだらう。

茅竈漫録(茅原定著)に「其後黄銅のきせる出來たる時も自身には所持せず、家にてこしらへおき、人の來る時とり出し、請取渡の禮あり、年々流行するに従ひ、次第に増長し、今はその法の廢るのみ」とあり、大和本草にも「後に眞鍮のきせるを用、請取わたしの禮あり」など見える。

此の請取渡しの禮とは如何なるものであるか。先に引用した昔々物語は、不完全な説明を與へて居るに過ぎない。再び茅竈漫録を引くと、「蠻人最初傳へしは土にて烟管を長く作り客來の時取出し、一服毎に吸口を折りて、又他の人に渡す故に、請取渡の禮あり。漢人も大抵右のごとく禮式あり、八遷燕式記(寶曆辛巳、清人吳威光長崎ニテ山屋金兵衛ヲ襲ス)に叙席烟筒に煙草をつぎて出す、管の長さ凡そ四尺計り、管の長きを馳走とす、(中略)當時は最初異國傳來の法を失ひ人々烟器を所持し、献酬の禮なく、不遜野鄙の態いふばかりなし云々」

蠻人最初傳へし云々のものは恐らく和蘭製のダツチ・クレイをいふのであらう。一服毎にその吸口を折つて、相手にすゝめたあたり、盃を献する時、盃洗に一寸ひたすと同様の意味であらうが、パイプを一服毎に五分一寸と折つて

居ては、中々贅澤なわけで、日頃見知り合ひの仲などいふのならば、折れ残りの煙管でもよいわけだが、賓客とでもいふ人の前には、工面しても新しい長い煙管をととのへねばならなかつたであらう。だから又折れ残りのきせるは、人によつてはその來訪があまり喜ばれないといふ意味にもなつたわけだ。

これに用ひた煙管は、前述の如く南蠻渡來のクレイパイプである、倭訓抄に「おらんだぎせるは全部すやきものなり」とあるのでもわかるが、クレイが最初英國に製造されたのは、我が文祿慶長の頃であつて、元和に入つては、その製造會社が設立されて居たくらるで、かなり安價に求められたものである。然るにおらんだぎせるダツチクレイとなると更に安値でどしどし英國へ輸出されて居た程であるから、我國へ渡來の南蠻人も、ボキ／＼折つて、交際費の中の極く小部分に加算してもよいわけであつたのだらう。

これによつて、むかしは煙管のやりとりが禮儀正しく行はれて居たことがわかるが、これはつまり、煙草がそれだけ高貴のものと見られて居つたか、乃至は渡來當時の感情をそのままに受けついで、これを珍重して居つたか、何れにせよ、煙草に對するに決してぞんざいではなかつたといふ事がわかる。したがつて煙具は所持せず、主人のもてなしを受けるのが禮とされた。此の點だけは、最近多くの人々の間に復活されて居る。

親子草(喜田有順著、寛政九年)には、「我等など母の物語りにて承り候へば、以前は人の方へ参り候て、多葉粉並きせるなど取出したば、こを吞む事はいたさぬ事の様、武家町家ともありしが、いつの頃よりかきせる煙草入を持参いたし、吞候様に罷成候由、去によつて近頃は一向に見當り不申候が、古き家々にては煙草盆に煙草箱と灰吹きときせるを揃ひ候て有之候、六十年程以前(元文)は右様の事にて、五十年前迄は(寛延)多葉粉入は持参致し候へ共喜世留は

決して持參不致候由、右に寄て考候へば客來有之候節、たばこ盆に銘々きせる無^レ之を、彼是世話あらせられ候事は昔かたぎの所と被^レ存候」と見えて居る。

して見ると此の請取渡しの禮は、元文延享年間迄も行はれて居たものであつて、それが今日では何はなくとも先づ一ふくとか、お茶と共に煙草盆が出されるといふ形で残つて居るのであらう。イギリスでも、流石に紳士達の國だけあつて、矢張り同じやうなことをやつて居たといふ。John Aury (ca. 1680) ジョン・アウブレイの手紙に、「——一本のパイプ、卓を圍み候人々隣渡しに呑廻仕候もの、由、我等が祖父ライトの物語候を記憶仕候」などとあるが、これはパイプの價當時尙ほ甚だ高値なりし故に有之候由といふのであるから、止むを得ざるに出でた請取渡しの禮といふことになる。

きせるの語源は、江戸時代の何人も明になし得なかつたところで、和漢三才圖繪は希施婁番語也と突放し、本朝食鑑には蠻語未詳其義とあり、蔦録にも唯番語也とあるだけで、その何語より來るやを明にしたものはないが、らうに至つてはすでに首肯せしむるに足る説明がある。倭調抄十八に「らう、煙管竹をいふはもと南天の國の名にして羅烏とかけり、しやむに近し、黒斑竹を産す。煙管によろし、よつて此の名を得たりと云へり」とあり、又秋齋問語にも「煙管をらうといふ事、天竺の境に羅子國といふありその所の竹煙管に用ひてよし 故にらうといふよし」と云ふて居る。一説には廣東省羅浮となすものもあるが、矢張り老撾^{Uttar}を指したものであらう。位置も音も符合して居るし、又前述の我國の最初の竹のキセルの形が、ビルマ、ルシヤイ地方のそれに酷似して居る事、又我が九州の一部では、黒斑竹でなければ「らう竹」とは云はぬなどの事實からして、老撾産の黒斑竹を、其の産地の名によつて羅宇と呼んだ

ものであらうと考へられる。

きせるに關しては、めざまし草が「らう竹に鑰の類をきせて作れる故、きせらうと云ひしがきせるとよべることになりしなるべし」といふ様な苦しい解釋をして居るに過ぎず依然不明のまゝであつた。

更に最近の興味ある一説として、アジアトルコの小都市エスキセル (Eskişehir) より、その名を得たといふのがあるが、成程エスキセルは海泡石^{Porphyry}パイプの産地として有名ではあるが、此の地名が傳つて、日本にキセルの語を残したといふためには、少くともキセルの語が我國に輸入せられる以前に、即ち豊臣より徳川の初期以前に於て、つまり一五〇〇年代の前半期において、すでに同市がパイプの産地として相當有名であつたことを必要とする。

しかるにトルコに煙草が輸入された最古の記録は一六〇五年より溯ることは出來ない。尤も一五九九年には、トルコの軍艦が英國の商船に對して煙草を強要したなどのこともあり、その以前より知られては居たものであらうが、十七世紀に入つてロンドンのレヴント商會が、輸入する様になつて、漸く一般的になつたものである。

又エスキセル市が特産として誇るメヤシヤウムパイプの如きも、その歴史は十八世紀の二十年代より初つて居るに過ぎざるなどの事實から推して、十六世紀中葉以前に於て、パイプの製造が盛んであつたといふことは不可能である。況んや、その時代において、彼等の交渉は直接には勿論、間接にも絶無であつたといふも過言でないのであるから、このエスキセル語源説のごときは、何等の權威もないものである。

然るに明治の初期我國に駐在して、日本語の研究をもつて有名な英國領事アーネスト・サトウ氏は、カンボヂヤにあるた佛國宣教師ベルナル氏の東佛辭典 (一九〇二年) の中にクシエル = ビーブ Khisior = Pipe とあるを發見した。これ

によつて我が三百年來の疑問もとかれたわけである。即ちキセルはカンボチャ語のクシエルより來て居ることが明白になつた。なほ渡邊修次郎氏の外交通商史略(明治三十年版)にも、此の語源考が掲げられてある。(新村出博士著、南蠻更紗並ニ琅玕記參照)以上述べ來つた最初の竹煙管の形状及びキセル、ラウの語源が、それ／＼ビルマ、カンボチャ、老撾などのシヤム、印度支那の地域のみより來て居ることは、煙草渡來當時の彼我の交渉が特殊なる關係にあつたことを示すものでまことに興味ふかい。

キセルの語源考はこれ位にして、更に煙管煙具の流行を一瞥して見やう。有名なる清水寺の角倉船の篇額(寛永十一年奉納)に、丸い錢の鏝に、煙管をさし立てたところが描いてある(前掲請取渡しの禮式の圖をも參照)。これは吸口を汚さぬため、脂の下らぬためのものであらう。請取渡しの禮における鏝の扱ひ方は前述の通りであるが、今日なほ京都あたりには、作り付けの鏝を具へた煙管が、往時の作法の名残りをとどめて居るのが見受けられる。

携帶用煙具もまた、元和寛永頃から現れ初めた。それまでは煙具はもたず、奉書紙などに包んであつたものである(五九頁寫眞參照)。殊に、請取渡しの禮の行はれた頃には、所持の煙具もかくした程であるといふから、煙草入れなどは流行しやうもなかつたであらう。山崎美成の麓の花(卷下)に、「たばこの世に専ら流行りて中頃より、みづから持て人の家にいたりても又は野邊などに持行くゆらす事にはなりたり、さればたばこいふものをいるものなくてはかなはぬゆへに、初は紙につゝみてもちたり、そは寛永元和の頃かとよ、(中略)さてそれより袋に入れたり、ゆへにたばこ袋といへり云々。」蕪錄の圖などを見ると、當時のたばこ袋は丁度今の香ひ袋のやうな恰好のものであつた。

なれるに従つてそのもとを忘れるのとへで、煙管なども次第に贅澤となり、金銀を用ひ、その高價を誇つて、かの竹筒などは全く昔語りとなるに至つた。「大身の大名の煙草飲んと有時近習小姓、片手にはつるのつきたる火入れに火を入れ、脇に小石を置き、片手には唐革の二尺四方形なるを四つに折、持來り主人の前に置、革の内にはきせる煙具あり。その革の上に火入を置いてたば粉をつぎ持出して飲給ふて後石にて灰をおとし右の革をもとのごとくに仕廻ふ。大名さへかくの如し、況んや下々に於て今の様に多葉粉盆などいふ事一切な(保會川)かつたといふのであるが、かく大切にせられる一面には、その用具が又贅をつくすに至るのは當然である。特に江戸市民の富裕は、武士階級に壓迫しつづけられた鬱憤をかやうなもの、贅澤や享樂によつてはらすに適して居つた。

寛永頃には、「つぎ／＼かゝる器に美をつくし玩弄に志を失ふ事になり行くぞうたてき、もし箕子とやらいへる人に見せたらんには何かいはれぬ(鳥籠物語)とまで云はれるに至つた。

又茅憲漫錄に、「勿體なき白銀黃銅の國貨をもつて、煙具を作り、或は錦繡綾羅斑毛皮革の文物を以て革具を製し、其の弊年々いふばかりなし」とあるを見ても窺ひ知るに足るが、初めの中は煙管のごときも、京の櫻ばかりか坂本のきせるあたりで満足して居たが、やがて寛永頃には隈本ばり、肥後きせるなどの高級品が迎へられた由、毛吹草に見える。

但しこれらとても大衆向の煙具にすぎなかつたので、當時の有産階級はそんなものでは満足できず、林羅山をして「又煙具を美にすること増衆し」と慨歎せしめるに至つたが、「延享の末迄は、喜世流も石山張、仙臺張杯上向とせし也、漸々銀ながしといふ色付出來、腐かし模様なきせるは甚珍敷事也、然れども二百文位より高直なるはなし、銀の

喜世流も儘ありしなれども諸侯等の御持用にて、町方杯は稀なる事也、去年松平氏の御老中、御持用古銀きせる拜領を見しにおとし張にて目方五匁ならでは無之」と寛保延享江戸風俗志に見えて居る。だから雜山も「禁するものも之を嗜む嗚呼」と歎じて居るが、此の「も」は不用である。新井白石すら友人から金きせるを贈られて、喜び謝するのあまり「(中略) 想思千萬里。芳草既爲煙。遙謝琅玕贈。何酬錦段鮮。斑斑雙淚竹。艷艷並頭蓮。鸞管長且細。累杯小腹圓。嚮如象鼻回。翻如馬蹄翻。」などと悦に入つて居た始末である。

上の行ふところ下これにならふといふより、せめてこんな事にでも使はなくちやといふ市民の心は、「無節竹師品々塗色、化彫、籐卷、青貝等あり商人これをうる(訓蒙圖繪) 方にかたむき、今は(寛保) 金銀赤銅、家彫、横屋宗珉、字與杯のほり有きせるを持つ事(寛保延享江戸風俗誌) になり、また「銀の喜世流に堆朱のらう。是はほて黒しとて赤銅に家彫、らうは白竹の内を漆ぬり杯にして、心の及程は美をつくし(同) たものであり、下つて安永年間に至つては、「人によりて銀のきせるのたつふりとしたるにごま竹の白竹のらうをすげ其のらうにわざとわれを見せ其所へ銀のかすがひうたせて持(森山孝盛著賤のおだ巻享和二年?) つやうになり、その贅澤——江戸好みの底じやれば、煙草入れの凝り方などと相まつて底止するところを知らぬ有様であつた。

「猶たばこ入きせる筒をゑぞにしきなどにて拵へ銀のくさを長く紐にして銀の火はたきを根付にして用ひたり近き頃に至り(享和初年か) 革のきせる筒を仕出して、男向御番役つとむる者などは一般に革のきせる筒を用ふる事になりたり(賤のおだ巻) といふのだから、煙草百首の所謂「近年の煙具を見るに筒包爐壺皆金鑄金玉を以てす巧を盡し精を極む。是を飾つて其費を厭はざるは慎しむべき一つ」ではあるのだが、時流の赴くところいたし方のない世相で

あつた。「其比のたばこ入せいしつにて紙いため又は吹繪墨流しなどにて随分鹿相な」ものであつたのが「今は金入純子、しゆちん色々のさらさ黒塗の高蒔繪なし地にて自慢げにさし出す(近世風俗志) 有様で、徳川中期元祿以後の享樂的世相はかくの如きところまで反映して來たのである。

だから太田錦城がその著梧窓漫筆拾遺に、「人の世に盛なるは歌妓なり。飲食は一箱二十五兩の菓子あり。煮しめ四重にて常價二十五兩なり、三十五兩の重詰もありときけり。是等のことは如何なる風俗にか如何なる人情にか。江戸を去る事十二三里には過ぎずして下總の猿島郡には芋の葉を多くして粟と稗とを雜へ煮て食民あり。まして三十里を隔てたる所は推して知るべし。天下の本たる農民如此。太平の恩澤に浴すればとて奢侈華美かく成行こと、にがくしき事の極なり。賀琛如き人あらば言上もすべけれども今の世は其人なければ世はますく華美に流れて人はますます困窮すべし」と慨歎したのは首肯できる心情と言はねばならぬ。

政府當局も、當時の煙具類のあまりにも奢侈華美に流れるのを、さすがに憂へるところあつて屢々これが禁令を發して居る。即ち享保酉三月、寛政酉三月、更に天明天保下つて嘉永の數回にわたつて、「華美高價之品停止之議御書付」とて

きせる其外同前之品に金銀を遣ひ候儀者勿論彫物象眼之類并蒔繪等結構にいたす間敷様(徳川禁令考)

と戒めて居るが、大體最初銀きせるを使ひ初めたものは誰であつたか、金唐革の煙草入を用ひ初めたのは何人であつたかを考へ合せて見れば、こんなことが言へる筋合のものではあるまい。禁煙令の際でも、彼等がまづかくれてのんで居るやうな始末であつたのだからこんな禁令に權威のあらう筈はなく、「村田住吉の煙筒を四つ一にはり金を

銀に偽せ(江戸風俗總まくり)「男子は煙筒調度に金銀を不可用。べき天保の改革に際しても、金をいぶして赤銅に似せ、甚しきに至つては、これに鐵をきせてまでも、金銀をすてなかつた。

然し奢侈と云ひ華美といふも、畢竟は有産階級にのみ許されたものに過ぎず、中以下には又中以下相應の所持品があつたのである。攝陽見聞集(元祿十二年版)には「四ツ橋播摩屋源藏がきせるは四分一をよしとす、京都は眞鍮きせるよし、江戸は鐵ばりに妙ありと知るべし」とあつて皆大衆向きの格安品をあげて居る。

寛保延享江戸風俗志には、「たばこ入は錦黒縹子、或は黒天鵝絨、是上向にて、中下は大方紙にて宇都宮より拵出し、かます形にて拾にして甚龜末の事也。切地煙草入も形は櫛形或はかぶせ付にて、餘り他の形はなかりし也。寶曆の初吉原杯には鏝袋形とて、表は切の錦に縹子通し裏は女郎の進物杯より専らはやりて段々結構に成し也。羅紗の類は甚珍敷事也。延享の初には八幡黒皮にて、かます形の口にひだをとり如斯にして(圖略)さげたばこ入、結構に成し、多くは伊勢のべにかわといふ赤もみ油紙にて上物としたる也」と當時の一般を語つて居る。

西鶴が武道傳來記(卷八第三播洲の浦波皆かへり討)に「女房は人目を忍び、絞煙草入縫賃僅少を願す」とあるが、これは西鶴貞享四年の出版故に、絞煙草入はすでに延寶天和頃より、大衆的の流行を見せて居たことが考へられる。貞享に入つて行はれた合羽のきれの煙草入れとて、ちりめんじわのよつた油紙製のものなどは、後年現れた伊勢のべに革の逸品の先驅をなすものではあるが、當時粹客通人の間に喜ばれた銀のこはぜをつけた長袋の煙草入れなどとは比すべくもないお粗末のものであつた。

この油紙製煙草入れは、壺屋たばこ入れをもつてその代表に推す。わすれのこり(四壁庵茂蔦著、嘉永頃?)に「勢

洲稻木村の壺屋清兵衛方にて製する黒色にして少し茶色をふくみたる紙面滑ならず堅横の差別なく強きこと革の如し、其仕立るに至つて質朴にして皆くけぬひ也。ながく持たばすれてつやを出し新しき時より美なり。前金物は眞鍮なり、歌に、

肝つぶし伊勢の稻木のたばこ入

ふるなるひかるつよいかみなり」

などと宣傳せられて居るところを見ると、中々の人氣あつたものと考へられる。

これに倣つて江戸橋四日市竹屋が賣り出した吠について同書の著者は「竹屋清藏とて紙煙草入れ一色を賣見世あり、此店にての仕込み物皆雅品にして細工に念を入れたれば當時の通客是を用ひざるを恥とす、尤も價も外々よりは貴し、その中に引札がはりとて極めて下直なるものあり。羊羹紙にて製したるかます煙草入なり。至て雅品にして金物なしと雖もたばこのこぼるゝ事なし、至極便利の品なり價は六十八文これを買ふ者晚く行けば賣切るとて、早朝よりつめかける程なり、その頃は江戸橋より日本橋までの間、北側は悉くたばこ入店の雑店なり」で、その繁昌まことに驚くべきものであつた。伊勢の稻木屋の煙草入れは、「凡南勢の地方にて紙煙草入れを鬻ぐ家は必ず壺屋の記號商標を掲ぐ、然せざる時は往來の客顧るものな(神都名勝誌)き有様であつたといふが、江戸竹屋の吠はこの壺屋紙にならひて次第に上品を出せるものゝ由である。(嬉遊美覽)

しかし、この紙製煙草入れのほんとの流行は、大體天明頃からであつたらしく、賤のおだ巻の著者は、「近き頃に至り(註安永頃か)、革のきせる筒を仕出して男向御番後つとむる者などは一般に革のきせる筒を用ふる事になりたり。

是等は革の方おとなしくてやにも通らず一段と人情の趣く所よろしかるべし。其作者の形容伊達下手物好は廢りて辨利にて質素なるを専らとする風俗に成たる人のいかなればたばこ入などのいか様にも可_レ濟ものなるを、きれより高き拵へ紙を用ひ郡内には目もかけずして、さやちりめんを着するは、いかなる心にかいぶかし。所謂こゝに賢くかしくこゝに類成か、何事も其時代に向ひて實不實の差別なくうつり行く人情こそあだなりけれ」と歎じて居る。

カーライルが衣裳哲學に言ふところも結局はこゝを指すのであつて、如何に「皇帝はその王服を脱ぎ捨て、美人はその襪裾長き衣をすて、品劣れる鞣革の服をつけ」て、「凍死の虞れなき裸體の政治的効果」をあげやうとしたところで、此の平等の觀念は畢竟はトイフェルスドレツクが狂ほしき白晝夢に終るものと喝破して居る。即ち「富裕なる紳士はロシア皮の防水服を求め、名門の佳人は赤青のモロツコ皮に鞣皮の裏をつけて現れ、黒き牛皮のみが世の勞働者と賤民とに残されざるや？」である。

此の黒き牛皮と紅紫のモロツコ皮との差別は竟に撤し難いものと考へられる。「扇鼻紙袋たばこ入の類まで色々に移り變りたり(中略)たばこ入翁が竹馬の頃(寛延)たばこ吞習ふは奇麗なる油紙のひとへなるを楯形にして廻りをかんせん縫にして紺青にて、女は役者の紋所などを隅に小さく書きたるものを用ゐるもあり、男は無地又は奇麗に墨繪などをかきたるをとゝのへて用ひたり。或は柿澁に砂糖を入れて摺交て厚紙へ何遍も引ばあつくなりて皮のごとくなるを能頃になりて廻りをかんせん縫にしてたばこ入に用ひたり、おとなしく御役人などの持つべきものなりけり。又びいどろ紙とて、かんでんをうすく板へながして能かはきたる時へがしてたばこ入に用ひたり。たばこの色すき通りて景氣なるものなり。子供などの持つべきものなり、(中略)、たばこ入も紙のこしらへ方次第に高上になりて今きれより

も價高し、是等全く今の奢にて貴き價を費す位ならばきれのたばこ入とへて用る方ましなり、紙たばこ入能なりてきれば餘り賣れざる故に次第にきれも心早く上る様にもうるどんすに擬ひなど織出してきれば下直なる紙の方はよくうる故次第に工夫して高直になる買人もその通りに押うつりて用ゆる。夫はいかなる人情なるや愚意分ちがたし」(賤のおだ巻)と當時の人情奢侈に流れて止らざるを嘆じて居る。

びいどろ紙のたばこ入は今のセルロイドに當る様なもので、子供など云々とある所から見ると當時は子供も喫煙した事がわかる。同書に「又雁首吸口をきれいに焼物にしてもやうなども焼付たり是は婦人子供の化粧きせるなり云々」とあるに見ても其の事が知られる。

更に「寶曆六年五月京都ヨリ紙ニ蠟ヲ引キ漆ニテ斑ヲ入レベツカフノ如クシタル煙草入下ル代三匁位大イニハヤ」(我が衣文政八年、曳尾庵南竹著)つたが、つゞいて安永以後の流行に至つては、蜘蛛の糸卷(京山百樹著弘化四年)に委細をつくして語られて居る。

「扱煙草入は余の幼年(安永)の頃は今の鰐袋。□□の形にて皆こはぜがけなり、表は似た山木綿裏は黒縹子釐甲のこはぜかけるなるを上なきものとして人も手にとりて見る程なり。價は五匁位なりしに安永の末の頃より丸角はやり出し(今も(弘化)室町に店あり)銀の櫻鋏に織部形の①かやうなり、是今いふかな物の起立なり。又此の同家にて織部形といふ煙草入れをはじめ。□□此形今にのこる。天明の頃かの通人ども銀の櫻鋏に織部形の煙草入を持たざるはなし。寛政に至りて淺草田原町の越川屋といふ袋物見世はやり出し懐中ものに一層の奢侈を増長せり。此店御藏前札さしどもよりはやらせ初む、名物の功をうつし織らせたるは此の店に權與す」

これによると、煙草入れの金具は安永年間より行はれた如くに述べてあるが、横谷宗珉なども高品を彫つた由であるから、此の點に關しては必ずしもこれを信する事が出来ない。

江戸末期にあつては、革製の煙草袋が大に流行つた。大阪の淀屋橋革たばこ入れは諸國に聞え高く、「是は播州姫路に製せる革たばこ入とひとしきものなれども、其製もかた少かはれると表の方に橋の欄間の圖を畫くを以て別てり、淀屋仕立といふものは大小定らず、且革も白革、黒ぬり革、朱ぬりものもあり、これ四つ橋のきせるに對して世に著しくなれるものなり」と浪華百事談にある如く、かの播磨屋源藏の煙管（萬治元年より累代連綿せりと傳ふ）と共に浪華名物の一つであつた由であるが、江戸に於ては又幾變遷、次の如く種々なるものがあつた、（近世風俗志による）。

袂落し煙草入「革類織物羅紗紙製も有之土民とも上輩の人専ら持之、上下を着する時は何人にも必持之」とて、今の札入れのやうなものに、對紙とて米麥などの形に造つた金具二つを打つてあつた。

煙管筒、「革は用ひず羅紗織紋を用ひ今江戸にては紺天鷲絨を流布とす、普通裕也紺天は單にし」たものであるが、更に同様の長筒とて「長さ二尺餘に自製し、煙管を入れて先を結ぶ、或は煙草を吸ふ間も失却せん事をおもひ煙管に結びて喫する人もありし、是れは織紋もあれども縮緬を専らとし、縮緬も紫を専らとす革及び羅紗などは用ひず。此製天保以前往々用之、近年は用之、甚稀也」とある。しかし、西鶴が「村川六郎左衛門が醉機嫌の聲して長袋の煙草入れがあつたらとつて置けと門まで送る女房に言葉残すもおかし」（好色一代男）とかいたのは、前述の銀のこはぜを附けたそれを云ふのであつて、長筒はその型をとり乍ら、かんじんの粹や滋味を時勢のために失はれたものである。

吠形烟草入「かます烟草入羊羹といへる油製紙を専らとす、革其他に製するは稀也、袂落しの煙草入を特に袖より失落し易きが故により糸をもつて七寶形に編んで兩紐を組緒にして繫之、一箇に烟草入一箇に手巾を入れ緒を背にして兩袂に納る。

東西對比年代表

明應元年	1492年	正徳元年	1711年
天文2年	1543	享保元年	1716
永祿元年	1558	元文元年	1736
元龜元年	1570	延享元年	1744
天正元年	1573	寶曆元年	1751
文祿元年	1592	明和元年	1764
慶長元年	1596	安永元年	1772
元和元年	1615	天明元年	1781
寛永元年	1624	寛政元年	1789
正保元年	1644	享和元年	1801
慶安元年	1648	文化元年	1804
承應元年	1652	文政元年	1818
明暦元年	1655	天保元年	1830
萬治元年	1658	弘化元年	1844
寛文元年	1661	嘉永元年	1848
延寶元年	1673	安政元年	1854
天和元年	1681	萬延元年	1860
貞享元年	1684	文久元年	1861
元祿元年	1688	元治元年	1864
寶永元年	1704	慶應元年	1865

或は片編製に手巾を入れ、片方の緒の先に輪をつけて煙草入の胴にかけ緒締を以て締之もあり」といふのだからつまり煙草入れの振り分け荷で今で云へばスキヤ

一の防寒手囊の様式である。

一つ提煙草入「煙草入のみに緒根付をつけて帯に下げ、革以下何にても製之」したもので、せいとすると「左右に彫物を用ひて宮の如くに製したり、此形袂落しには用ひられざれども提、及腰差には用之もあり先年流布今は用之稀」であつたが、共にきせるのさしを附けずと紐で腰につけるのみである。

胴亂「これは煙草入にも又は錢入れにも或は薬入れなどにも用之也。革及織物羅紗編綸等皆製之」したものであ

るから、中々融通のきく袋である。腰差といふのがつまり現在の形式のもので「筒を帯に挟む故に腰差或はつゝさしとも云、革紙織しや織紋並用之、烟草入と筒入れと同製を専らとし、或は異物をも用ふ。」

竹筒、「丸竹を製して楕圓となし、薄く皮を去り或は不去皮種々の彫物をなし頭と尾とは紫たん黒たん等の唐木を以てし頭に機ありて開て蓋となる今用之之人稀なり」とあるが、京傳の近世奇跡考に大高源吾が用ひし煙管筒とて載せてあるのは正に此の類である。

ほんつゝ「同前の竹或は木を穿て製之蓋の細筒は長さ四寸ばかり抜之ほんつゝ音す故に名とす、又紙を重ね張り或は紙捻りをもつて是を編、表に漆ぬるもあり、紙捻製を長門筒といふ長州の藩士内職に是をつくるといふ故に名とす。又紙張りの表に革を包むもあり、近年黒のさんとめ革をもつて作るもの流布せり」といふ。一度剣をとつて起てば京洛の天地ために悚然と慄ひ、憂國の熱血迸るといふ長州藩士も、家ではシヨ／＼ほんつゝ内職とはいさ／＼か幻滅である。

一樂といふのは「ほんつゝの形に舶來の籐を以て作之籐を糸の如くに細かに割り割り、籐の肉の中一分ばかりなるものを横にまげて骨とし編之、泉州堺に一樂といふ工人初製之故に名とす。賤價は金一分或は二朱、貴きは金一兩もあり煙草入もあれど用る人稀也。」又圓形なる赤小豆皮の周圍に孔を明け紐を通して括りあげて作れる巾着あり、煙草入にも往々用之由である。兩口といふのは「羅紗も用ふれど革類と油製紙とを専らとし煙草入の兩側に口あり一方に煙草一方には煙具等を入れ」たのだから、まあ今のセットケースといふところであらう。

火の用心の烟草入「單白紙に荏油をひきたる桐油紙製也、火の用心と墨書す、且最下の烟草入とす困民族中に用ふ。」芝居に夜番爺などの提げて出るのがそれである。

又「形鼻紙袋に似て烟草入也者あり、蓋に囊を合せ作り蓋ある一口に烟草を入れ、無蓋一口に煙管の半を納る、是駕舁等賤夫の所用、黒革黒油製紙にて作之先年はこれに刀豆形のきせるを用ひたり、近年はすたれたり。」といふのもあれば「桐木を彫つて煙草入れとし餘木を以つて蓋とす、山樵等所用、桐及び他木に櫻皮を張れるもあ」るが、現に著者の地方の農夫達も、水田中に落しても軽く浮くが故に煙草をぬらす事がないといふので廣く持用して居る。これと同様なものにとんこつといふ琉球製の朱塗のものなどあつたが、内地好みでなく、あまり迎へられなかつた。

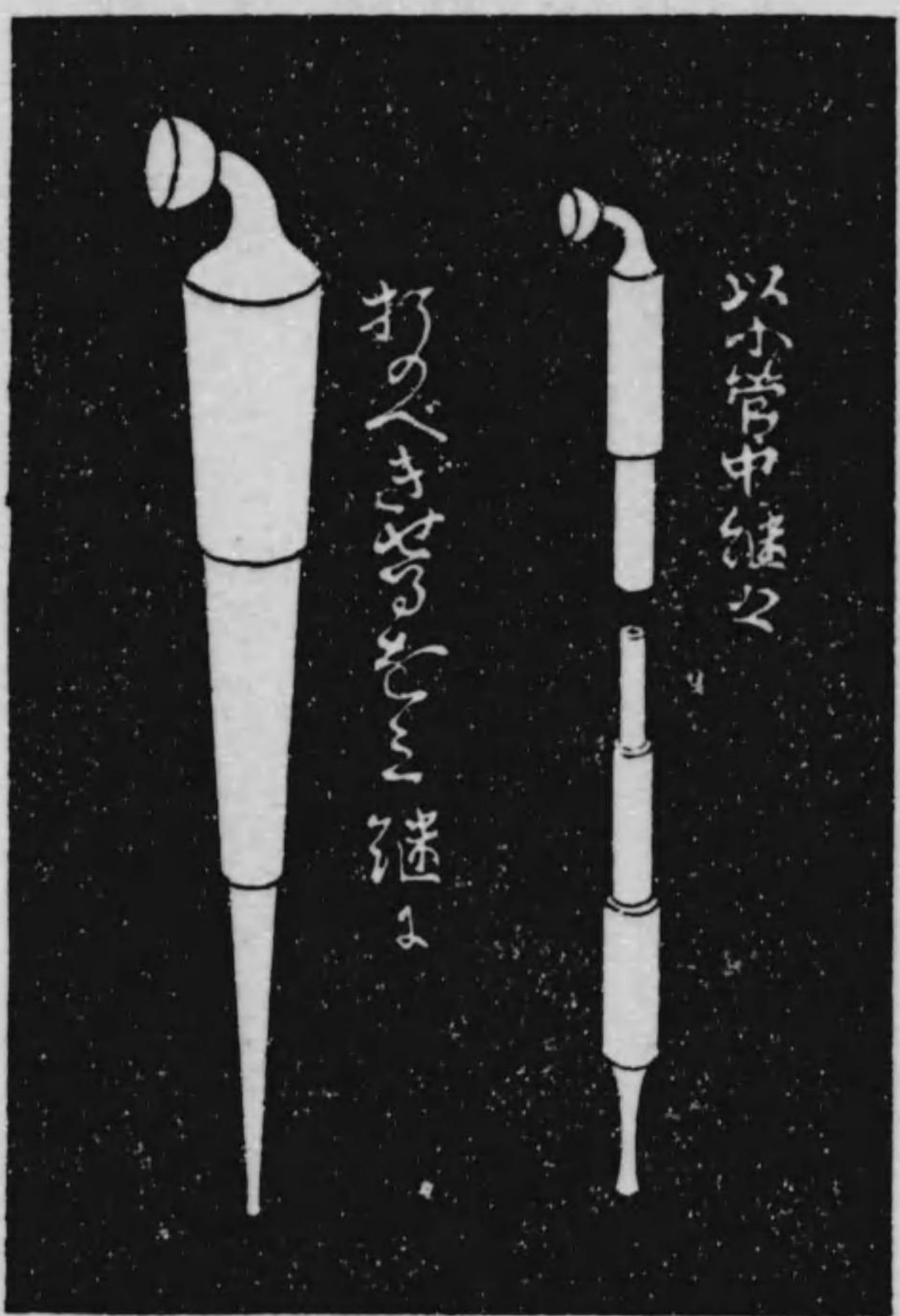
又毛皮の煙草入れとて「虎又は熊鹿の毛をからす用、今稀也、凡二百年前六方丹前など云へる俠客、武士の供する奴僕必持てり。」といふ。西鶴の一代男に「五ふくつぎのきせる筒、小者に瓢箪毛巾着ひなびたることにぞ有ける」と見えるのがそれである。

此の風俗誌は更に「煙草入名物は大阪淀屋橋は馬皮製、舶來皮、滑皮は稀也。織物類はなし、提煙草入れを専らとす、金具は鐵眞鍮、天保以來江戸にも大阪淀屋橋名物煙草入の招牌を掲ぐるもの二三あり、江戸四日市竹屋煙草入是亦荏油製紙を用ふ也、壺屋より價高く上品也、近年大鷹紙を油紙となして提煙草入をつくる、色は全く黒也、其の膚滑ならず全一に小皺あり天保中大鷹のために流布せる壺屋のものもすたる云々。」と總括して終つて居る。

轉じて煙管の變轉を一通り見る爲めに、再び賤のおだ巻を引く。

「きせるも品々流行りたり。されども大抵今も（寛延天明頃）かはらず京都の櫻ばりのみは萬代不易の形にてその頃もおとなしき人は用ひたりしが今もかはらず又流行もせず其外品品新作いづれとも大同小異にしてさして目立ちたる

もなし、しかしながら昔は打のべぎせるを十人に三四人も有たり、又女は繼らうとて長きらうを二つに切つて夫を相口をこしらへ繼ぎ長き煙管にして居たり。仕舞時は二つにして懐中するなり、(其の繼目の相口を角にするもあり銀にてするもあり、ほり物など迄に物好したり)又懐中きせるに打のべぎせるを三繼にて入子にしてふり出せば能か



げんの長ききせるになる様にして納る時は吸口より入子にして仕舞ふ様にして短くなるなり。一旦はやりて殿中御役人など専ら用ひたり。畢竟懐中のためなり。又瀬戸物きせるもありけり、雁首吸口をきれいに焼物にしてもやう杯も焼付たり、是は婦人子供の化粧きせるなり、ともにすたりて今はあまり知る人もまれなり、きせる袋もその頃は皆衣類のたちあまりなんどにて手前縫にしたり。」

こゝにいふつききせるといふのは、あの五ふくつぎのきせるなどといふのとは、全然意味を異にして居る、圖解したやうに單に雜字を二つに折つてあり、使用の際に繼ぐものである。近世風俗誌に「京阪にては中繼ぎきせるを専用とす」とあるによつて更に明確である。或は、「長きせる女用等に小管を以て中に繼之」とも説明してある、又「繼ぎせるも貞享の初頃は常のきせるみな長ければ懐に入るゝために作りしなるべし」(嬉遊笑覽二中)といふに見ても、西鶴の五ふくつぎとは全然別物である事がわかる。五ふ

くつぎとは鶉衣の「只木がしらの松風に駕立て繼ぎせる取まはせば云々」とある方がそれで、五ふくも一度に盛れる大きな火皿のきせるである。

「又打のべぎせるを三繼」とはのべぎせるを三つ組の入子にしたもので多くは眞鍮であつた。この單一なものがち、上は銀ののべぎせるから下は刀豆ぎせるの鐵ばりとなるのである。

「形刀豆の如き故に名とす、眞鍮に腐かし模様を描く管のところ圓ならず、楕圓をなす、先年醫師間に流行せり」(近世江戸風俗志)とあるが、刀豆ぎせるは尻まで刺青した宿場の雲助にこそ似合へ、被布に茶釜の竹庵では一寸そぐはぬ感がしないでもない。

又裝飾的の方では「焼附或は七寶焼と號して錫を以て眞鍮の上を染る。又金減金にするもあり、或は横すじを引き、或は深彫、片切彫、色繪の高ぼり、象眼、七寶流し等あり、昔は水口今は大津にて是を製す、追分張といふ。大阪は四つ橋を名物とし、三都中江戸を上となす、京の櫻ばりは粗製なれども大いに賣れたり、客煙草盆に用るなり」(近世江戸風俗志)。

此の他、地方的の名物としてきこえたものには、山城の二條きせる、攝津築島きせる、さきの水(無)口きせる、肥後隈本きせる等があつた。煙草考によると「按ズルニ本邦ノ煙管ハ處々ニ造ル、京都大佛門前、三條橋東、江州水口、同州坂本及四十九院、肥前後兩州、奥州仙臺コレ最モ有名ニシテ大佛管ハ寰宇ニ遍シ、其ノ製各小シク其ノ形容ヲ異ニス、又後藤竹、肥後尺、書院、數寄屋、公平、鶴鶴、小柳、樺花、野老、土佐小雀、懐中、中繼、曆卷管、小泉倒輪、隱居、二朱、問屋、瓢箪管等ノ品アリ、其ノ形容同ジカラザル也」とあるが、今これらの各々について説明す

るの煩をさける。

江戸末期では池の端のきせるが知られて居た。「きせるは池の端住吉屋清兵衛が田沼ばりとも出世ばりとも云うがはやり、其後水野某が好にて今戸張など出来たり、又其隣家瀧口宗八といへるは専ら吉原のきせるを作れり」(嬉遊美覽)とある。嘉永頃には「らう竹短きを好み總たけ五寸以下」(武江年表九)となつた由であるが、當時女用のものは「煙草入きせる扇鏡袋履物にいたるまで大方男持の少し小さきを用」(皇都午睡)ひたものである。娘容儀草紙に「昔は女のたばこのむ事遊女のほかは怪我にもなかりしことなるに、今たばこのまぬ女と精進する出家はまれなり」とある。

最近賣り出された婦人煙草「うらら」に對して、起された反對運動は、多くの話題を提供した。しかし新しい婦人煙草を發賣したからとて、それは直ちに婦人に對して、喫煙獎勵の意味を積極的にもつものではあるまい。今迄喫煙して來た婦人の爲めに、よりよい煙草を提供するといふことが、即ち積極的に獎勵する結果となるといふのならば、それは明かに要求されて居るからである。

人間の生活行動といふものは、すべて時と所によつて異つて行く。特定の國、特定の時代において大多數の人々によつて支持されるものがそれ／＼の道德の基準となるのだ。よしそれが一部少數の人々によつてのみのものであつても、全般に重大なる悪影響を及ぼさぬ限りは、それは又、社會の寛容によつて許さるべき個人的自由でなければならぬ。偏狭なフアツシヨ的行動によつて個人の自由が制限されるといふことは、望まぬ現象である。

かく言ふたからとて、世の所謂道學者流に、「うらら」發賣當時のあの昂奮を今一度思ひ出させやうと煽動するのではないから、唯こゝに「母の喫煙はその子供に影響なきや？」の根本的問題に答へて、此の渦中より脱れたいとおもふ。

婦人の喫煙が子供に及ぼす影響は、他にも多々あるかも知れないが、何といふても哺乳に當つて、それに含まれたニコチンが乳兒に對して如何なる害毒を及ぼすかといふことであらう。

此の問題についてはエマヌエル氏の實驗が解答を與へてくれる。即ち同氏は先づ十人の授乳婦に一一二時間内に、六―十五本の煙草を休むことなしに吸はせた。その中の二三人には肺の中まで吸込ませ、他の者には吸ふた煙を良く口中に含んで居て、しかる後鼻孔から出させる様にした。

かくてそれから四―五時間の後において、初めてニコチンが乳汁中に證明せられ、肺の中まで吸込んだ方の乳汁には、矢張ニコチンの含有量も多かつたが、然し何れの場合にも、乳汁分泌に對する喫煙の不利の影響は見られなかつた。次に、乳兒においては、乳汁一立につき、約〇・〇一―三麩のニコチンが移行して居るところの授乳婦によつて哺育されて居た二人の中の一人は、検査前には正常であつた其の糞便が一過性に悪くなつただけで、他の乳兒は検査の後にも、何等の異状を示さなかつた。

尙ほ同氏は、以上の實驗により、七―十五本の煙草を吸ふたのち、一立の乳汁につき大體に見積つて、最大量〇・〇三麩のニコチンが移行するとしても、此の量ならば、シュロツフ氏の自家實驗でニコチン一―三麩を攝取した後、やうやく第一の毒性症病が現れて來たといふ事實から推算して見れば、乳兒の體量を顧慮して尙ほ毒物としての境界下にあることを證明し得た。

故に一日五六本の紙巻煙草の喫煙ならば、乳兒に對する何等の危懼もなく許されてよいが、十五本以上となると乳兒に對して毒物的作用をなすことになるから嚴禁せねばならない。要するに節度の問題である。(醫博佐藤省三氏によ

る)。故に、たかゞ一本の「うらら」のために、かくもいきり立つ一部の人は、その結果においてむしろ婦人の喫煙を奨励することになり易い危険があることには氣づかないのだろうか。殷鑑遠からずそのよき例を我々は米國の禁酒法に見て居るのである。

八水隨筆によると「予が父弱年の頃（萬治寛文頃か）大阪高麗橋にて唐人の裝束したる商人、竹のきせるにて一ふく一錢づゝに人にのませたる」を見たところがあるがこんなのは異例なので、西鶴が武道傳來記の卷八第一野机の煙くらべに、敵討つとて「領境の里に人しれず借宿して、（中略）文吉は葉真若賣ぬ」とあるが、當時（貞享）では刻煙草の世利賣はまだ現れず、此の葉煙草のせり賣りのみであつたのである。

即ち「貞享年中迄刻多葉粉店賣計りにて世利うりなし、葉煙草を調へ手前にて刻む也。然れども若き女中などの類はやに深きをきらい刻たばこやにて色合黄なる和らかなるを調吞たり、元祿年中よりたばこ世利賣出る」と我衣（曳尾庵南竹著、文政八年脱稿）に見えて居る、「其後元文中神田鍋町に叶屋と云刻たばこや出る十餘人切子をかかへ荷六七荷出す、江戸中を賣弘めたり此時よりかつぎ荷初る、寶曆年中に至てすべて刻たばこやになひ箱とな」つたのである。

これは小さな引出しの多くついた箱を天秤にかついたもので、これをガチャ／＼多葉粉とも稱した。塵塚談に「我等幼年頃は藥簞笥のやうなる箱に引出しをつけて引出しの中に仕切りを入、二行に刻多葉粉を入藏拳ウツクの鑲を引出し毎

につけ肩へかたかけにして賣歩行けり、鑲がガチャ／＼と鳴によつて其音を聞て呼入かひけるなり此箱にて商ふもの五十ヶ年以來より絶たり」とあるが、此の著書は小川顯道七十八歳文化十一年の上梓と云へば、このガチャ／＼多葉粉は元文年間叶屋に初つて、明和年間までの三四十年の風俗で終つたものであらう。飛鳥川にも「刻み田葉粉賣は、こまかなる引出し付たる箱片々の肩にかけてあるく、今は（文化七年頃）なし、一度兩荷にしてせりたるが玉たばこに皆つけらるゝ」又續飛鳥川（寛延寶曆の頃、文化の頃まで賣物）には「刻たばこ賣十匁八文」などと、皆なつかしいひびきを殘して居るが、わづかにして此の商賣のすたれたのは、地紙賣の華やかさなどに思ひ合せて淋しい氣にもなる。賤のおだ巻は寛延頃を偲んで、「扇鼻紙たばこ入の類まで色々に移りかはりたり。其頃はまづ地紙賣とて四月半ばにもなれば綺麗なるひとへ物に（極暑といへども單物足袋を用）足袋雪駄をはき地紙の形にこしらへたる箱を三つ計其間に骨を入れたる角に長き箱を組入、馬の胸かひにて中ゆひをして肩にかけ地紙／＼と呼で賣歩行けり、屋敷／＼の臺所へ呼込て扇を物好にあつらへ又即席に折もありよき慰にて下女はした迄地紙うりの男つきによりて取廻していらぬ扇を折らすもありけり。」で小粋な若者が、氣の早い江戸ツ子の中でもこれはまた四月の半ばから夏を走つたのである。

「右の地紙うりは伊達衣服を着し役者の聲色或は浮世物眞似などして買人へあいきやうをしていれるが多くありなり。刻多葉粉賣にも此種ありける。」（塵塚談）。「前に記す地紙賣の歩行時分きさまみたばこやとてこれも小綺麗なる形をして（是は年ばいの者おやちなども歩行けり）いくつも引出しを附たる小簞笥様なる箱を背負て品々の刻たばこを入、商に歩行たり是は夏に不限四季ともに家々を廻り出入取付など出來て重寶なりき、地紙やと同じく今（註享和）はすた

りて知る人もなし」(賤のおだ巻)。

然るに江戸ッ兒が名物と誇る字羅のすげ替はこれに反して色氣のないこと夥しく、時にはとんでもない失敗をしでかす事さへあつた。寶曆現來集(山田桂翁著)に「らうのすげ替、安永のすへより此商人來る初ての内は誰言となく隠密と申觸らし、悪るさする人達は恐れたり、此商人は内へ入つて、らうすげ替る間、ゆるりと内へ入居故に右の沙汰に申しなしたるもの、隠密の役にはあらず。」といふたところで、當時の老中田沼意次、政を擅にして紊亂し、天變地妖相ついで起るといふ時であつたので、江戸市民は皆恟々として心定らず、羅宇屋が牢屋と聯想されてスパイと見られたのも無理からぬ話である。

寶曆頃の店うり煙草屋は柿色の暖簾を張るを通例としたもので、「東風吹くや赤柿色の長暖簾拍子そろへてきざむ七くさ」(煙草記寶曆六年)などと歌はれたものである。人倫訓蒙圖繪に「茗苳(註茗苳の誤りか)屋丹波吉野高崎新田、其外國々のたばこをかい、これを商ふ、刻師こゝにてかふ。きざみは大津柴屋町より初めしとかや、駒臺あり、庖丁は堺よりいづる黒うち三文字石わりよし代二匁」などと見える。

塵塚談に「多葉粉刻やうのかはれる事、我等二十歳頃迄(寶曆)は五分切といふてあらく刻を伊達にせしに近年(文化)は至て細く糸の如くに刻也四五年來はその上にこまかになりこすりとかいふを賞翫す、刻むに押ゆる板をこまといふそのこまの木口をすりてのみるやうに刻む事なり」とあるが、この細かい刻み方は支那傳來で、昆陽漫錄に、「前年或人西土(支那のこと)のきざみ煙草一包を恵む(中略)そのきざみ甚はそき故絲烟といふなり」とあるに見てもすでに享保頃には、所謂金絲烟の美名で呼ばれたこまかな刻みが輸入されて居たことがわかる。

當時の江戸市民の煙草消費量も中々莫大な額に上つたもので、年平均七百三十五萬八千斤餘にして市民百十餘萬人にあつるに、一人當り六斤六分八厘いくらとなることから推算すると、百中喫せざるは二三人といふ統計が煙草百首(真商橋著文政三年脱稿)に示されて居る。是等の莫大な煙草は「寛政頃には新材木町の河岸へ荷物あがり、斤目を改むる煙草の市有り爰を煙草河岸と云へる」由寛天見聞記に見えて居る。

煙草屋營業も從つて大きく、「下谷御成小路佐久間町に出る所刻み煙草屋見世に、薩摩たばこと申看板出居たり、間口三間奥行も餘程有之、刻たばこやなるが見世より奥江掛けて、たばこ切二十餘人も並び居て、たばこ切居なり、是迄七十餘年の間江戸中荒増歩行せしが、二十餘人も並でたばこ切居たる見世を不_レ見珍敷故留置く」と寶曆現來集の著者を驚かした大店もある。又「或人曰煙草一式の具をこしらへる職人、諸職の内三分一ありと云ふ」(煙草百首)とされ、「昔はなくて當時行はれ是がために口を糊する人世間に滿るもの茶と煙草なり、此の二品の具をつくる人も、夫を交易する人も此物どもなき世には何をしけんとかやしまるゝばかりなり」と閑田次筆の著者伴蒿蹊を心配させた位であつた。

かくの如く莫大な煙草がどうなるのかと云ふとみんな煙になるのである。最初のほどは何のかのと賣薬もどきの効能をならべたて、煙草を辯護する必要もあつたらうが、かうなつて來てはすでに一種の社會的風習とも見られるのであつて、個人的に云へば音楽や舞踏などと同様に、缺くべからざる一種の生活的要素であるといふまでになる。さうして煙草に對する態度も自らより自由な、より精神的の分子をふくんで來る。出來るだけ煙草をたのしまうといふ心

の傾きは、やがて立ちのぼる煙への誘惑となる。靜かにもを思ふともない安逸に、立ちのぼる煙の末を追ふ虛心夢幻の中にこそ魂の自由がある様に思はれるに至るのである。

我等が儚なき幻は茫乎として煙にからみ、煙は更に夢の尾にもつれる。ひとり靜かに立ちのぼる紫煙のあとを追ふと、瞬時も同一の象をなす事なく千變萬化して消えて行くが、尙ほ巨細にこれを見ると、凡そ如何なる場合と雖も、煙は必ず圓運動をなして居るのがわかる。廻轉ローテーションでなければ渦狀ヴァルヴであり螺旋狀スパイラルである。此の煙の運動は、又スウェーデンボルグの神秘思想に通ずるものがあるやに考へられる。即ち彼によると、我等の血管中を流れる血球の一つ一つが皆その軸を廻つて居る事は、天體に於ける諸星雲の形狀、太陽系の運動に於けると同様であり、又卵の中の螺旋運動カザの捻りより、胎兒の臍の緒の捻りにも通ずるといふのである。此の自然に於ける廻轉復歸の大詩調は、煙草の煙にもまた極めて完全に示されて居ると考へられるのだ。

よし煙に對して、こんな思ひをなす事がないとしても、何かしらこれに働きかけて見たい衝動には誰しも驅られるであらう。煙曲とか煙術とかいふ様なものも、畢竟こゝから初つたもので、元祿年間にはすでに簡單なる煙曲があつた由であるが、正確なことは分つて居ない。

薦録（寛政八年脱稿）によるとその年代は不詳であるが、「往年江都ニ一幫間猫莊兵衛トイフモノアリ、善ク猫聲ヲナス故ニ世人諱名シテ云フナリ。且ツ煙ヲ喫シテ奇狀ヲナス、一タビ薫ズレバ口中ヨリ吸フ所ノ煙ヲ噴キ一輪トナシ又一噴シテ輪トナシテ前輪中ニ收ム、カクノ如キモノ再三大小四五匝ヲナス、或ハ一噴輪ヲツクリ承塵上ニ貼ツテ戯レテ言フ、浮漚釘ナリト、時人甚ダコレヲ奇トス」（原漢文）とあるがこれ等は煙曲中でもまだ初步と言ふべきもので、

「たばこのむに輪をいくつとなく吹く人あり、壁に釘を打つてそれに輪をかける人あり、或はけむりを外へ出さずこたくく内へ吞で、ほのぼのと明石の浦の朝ぎりにと一言よみしまいてけむりを出す人もあり」（柳里恭著ひとりね安政頃カ）などといふのよりも平凡である。

支那の昔某國の大宮が一人の士を抱へたが、一技を獻する事もなく數日にして辭去しやうとしたのでこれに餞別を與へた。さうするとその男のいふには、今迄何もせずまことに申譯がない。何か一つ置土産と思ふがこれぞといふ技もない、唯少し煙草を飲む方法を知つて居るからこれをお目にかけてやうといふた。さうして大勢の前で隨分の煙草を吸ふたが煙をちつとも吐かぬ、列座の人々皆不思議に思つて居ると、やがて彼は「請フ衆客吾技ヲ觀ヨ」と「徐々口中ヨリ前ニ吸フ所ノ煙ヲ噴キ或ハ山水樓閣トナシ或ハ人物トナシ或ハ花木禽獸トナシテ疊樓海市ノ如ク名狀スベキ莫シ」であつたと虞初新志に記してある。

わが寛政の頃、備前の國に俗稱彌平といふ農夫があつた。彼も練習の結果煙曲の技に長じて、煙曲彌平の名をもつて諸國を巡業した程の技能をもつに至つた。それを見た人の話によると、「大いなる火皿の煙管に煙草多く吸ひ込み、吹き出して畫ける圖數多くして一々しるし難し、或は雲龍、柳に蹴鞠、長さ二間の鎖を吹き、或は又二つ輪違ひ、三つ輪違ひ、梅鉢、北斗、くまり猿、傾城、虛無僧、富士山、いろはにはへの文字など、百般見事に吹きわけ、その中殊に感じ入りたるは、雲のかけ橋と云つて、小さき輪にてソリ橋を吹き出して、一りの仙人其橋を渡りて空中へ昇り行く圖など、技神に入り面白かりしとも面白かりし云々」（百家奇行傳）。

又矢張り寛政年間であらう、大槻磐水翁は、驚嘆すべき煙技を見たことを述べて居る。「コノゴロ亦城西ニ一狎客ア

リ、好ンデ此戯ヲ善クス。其技藝最モ奇ニシテ自ラ輪玉亭吹煙ト號ス。茂實一夜一友人宅ニ在リ、親シク之ヲ視ル。其人暗處ニ坐ヲ設ケ、煙盆煙具ハ其ノ傍ニ在リ。戯曲數番、先ヅ諸客ニ向ヒテ其曲名ヲ告グ、管ヲ把リ烟ヲ裝ヒテ火ヲ點ジ仰テ之ヲ噴ケバ、則チ座上一堆ノ雲ヲ起シ、雲中忽チ輪トナリ或ハ圓或ハ楕、或ハ一或ハ二三、或ハ輪ヲ扇上ニアラシメ、或ハ一管中ニ吹キ入レテ管尾ヨリ數輪ヲ噴出ス。或ハ己ガ懷中ニ吹ケバ則チ其ノ袖ヨリ出ス。或ハ傀儡ノ口中ヨリ之ヲ噴出セシム。或ハ吸フ所ノ烟、兩鼻孔ニ入レテ他ニ入ラシメザルノ類、曲々怪異、千狀萬態、愈々出デテ愈奇ナリ。衆皆コレヲ奇トシテ、未ダソノ爲ス所ヲ知ラズ。彼又自ラ謂フ、恐ラクハ諸客余ノ縷烟ノ中ニ別ニ設クル所有ルヲ疑ハンカト。乃チ傍人ノ煙ヲ請ヒ、一吸忽チニシテ奇狀ヲナスコト初メノ如シ。曲名數十盡クハ臆記シ難シ、都下ノ人響應アル毎ニ爭ヒテ召シテ其ノ興ヲ助クト云。嗟、此技固ヨリ獨得ニ出デテ此妙境ニ入ル。ナンゾ心ヲ用ヒテ此ニ至レルヲ一奇技ト謂フ可カラザランヤ。夫レ煙草ノ天下ニ盛ナル、終ニカクノ如キニ至ル、奇モ亦甚シト謂フベシ、實ニ昇平ノ餘事也〔原漢文〕

明和の頃には娘煙術などいふものが、四辻に立つて

ものおもへばほそりにけらし

がんくびの

ながらうべくもなきいのちとて

など、吹いて居たとの事であるが、これは法螺の間違ひかも知れない。空氣の動く街頭でこんな事の出来るものではなく、矢張り煙曲は室内のものであるべきだ。然しそれは江戸のむかしの話して近頃のモダン煙曲師は飛行機セルで

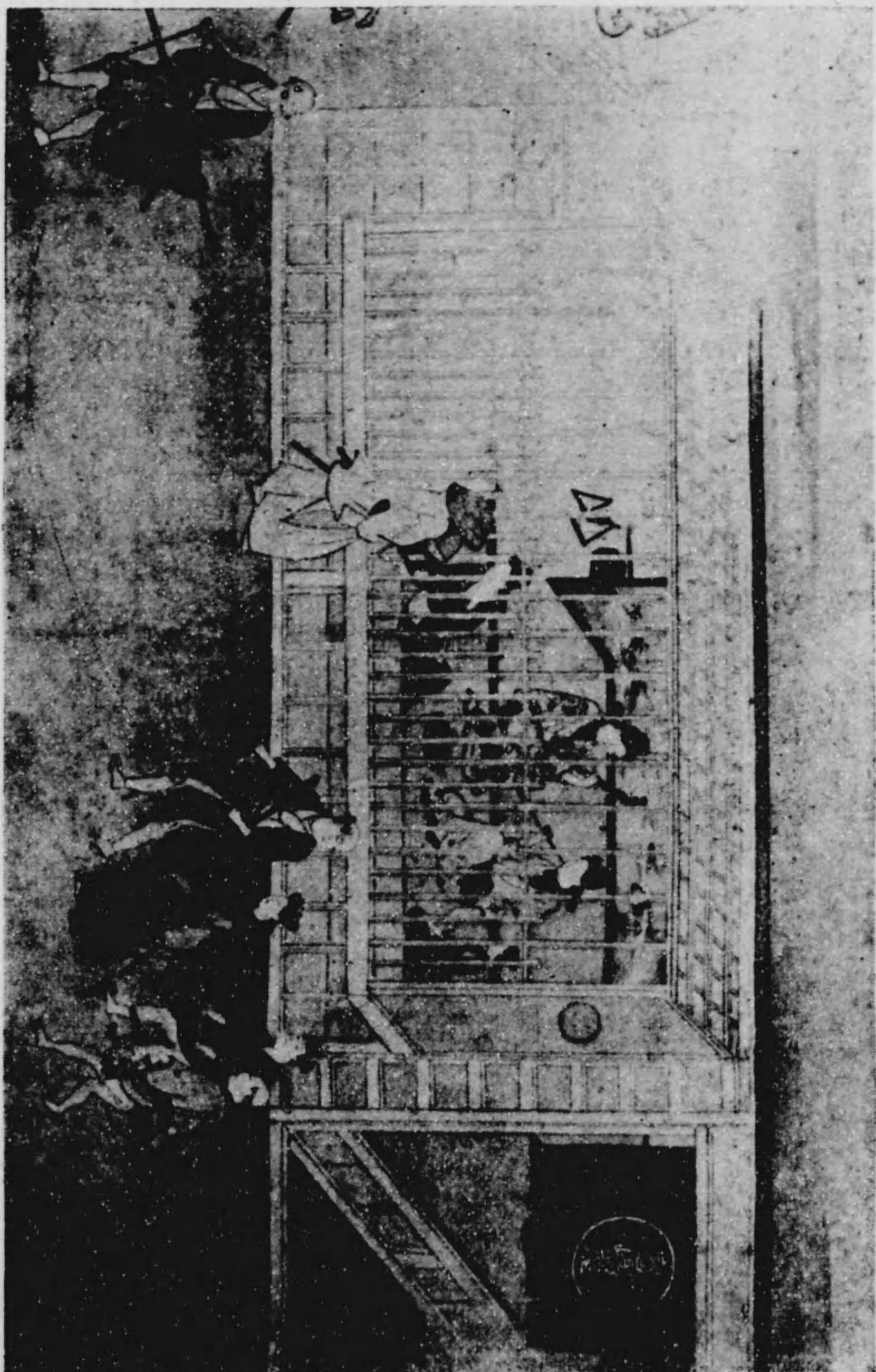
都會の大空に大きく吹いて見せる文字の曰く、

anshup

かくの如く娯樂的に發達して行つた煙草は、それでは遊里方面では如何なる扱ひをうけて居つたのか、江戸時代の庶民生活をうかがふに最も好適なるものとして、しばらくこゝにその人情をさぐつて見やう。

「異方煙草を我邦に致すや其の始めは妓女娼婦寄聲通意の媒と爲す」〔羅山文集〕とあるごとく、オランダ人など長崎に来ると、先づ丸山に遊んで、遙けき海の旅を終へた一夜を樂んだのであるが、その席に待つた丸山の遊女達は實に我が國で煙草をのんだ最初の婦人の部であつたわけだ。英吉利あたりではジェームス一世の死後（我が寛永二年に當る）なほ婦人喫煙の風はなかつた由であるから、日本の遊女に煙草をのませるのは彼等にとつて興味ある事であつたに相違ない。

殊に例の請取渡しの禮などを教へたり教はつたりして居る中に自然、「寄聲通意」の目的も達したであらう。此の長崎の遊女あたりは、だから當時の文化の尖端人であつたわけで、握手の禮を行ひ、ばらそるをさし、めす、ほるこで南蠻料理を味つて、彼等異邦人のなす所は悉くこれを做つて、その純情を示した。煙草もその一つであつて、青圍紅房の裡、情をよせ愛を語るに唯一の通詞となつたものである。言葉の通ぜぬもどかしさに、煙管の吸口に唇の紅を塗つての思ひさし。といつて手れん手管とか筒もたせなどいふ言葉はこゝから來たものではないが、兎に角、遊女と煙草との關係はかくの如く昔より初つて居る。



元禄時代吉原の圖
 (師範館帝室博物館所藏)

江戸時代の遊女に於けるたばこについては、畠山箕山の名著色道大鑑(延寶六年梓)によつてその大體を知る事が出来やう。

「真若の事、傾國に於て對客の挨拶、一座の景氣、専らこれにしく事ありじ、さるによつてこれをもちひざる傾城なし、座附には太鼓女郎より太夫職へこれをさゝぐるにより、みづからたばこをつぎてのむことなし、天職とても太鼓女郎あればかくのごとし、座敷うち亂れてからは其の差別なし。雙六かるたの節は、猶太鼓女郎よりさゝぐ。都て傾城のたばこをのむに灰になるまでのむ事を制す、すこしのみて烟草をなかばのこしてきせるを返すべし、座敷うち亂れてみづからのまむとする時、手をさしのべて盆をとる事なかれ、人にいひてよせさするか、遠からずはきせるの皿にて引よせたるも女郎には似合ふてにくからず、吞をはらできせるを盆の上にくくに置くはかたし、ついなげ込みておくか、さなくばたゝみの上にすてたるよし、夜更人しづまり、火入の火斷たるに、行燈にて吸付のむには灰をつけてのむ事風流なり。是傾國の上より出て他女のわきまへさる所なり、油火をきらひ、火皿に紙をまきて吸付る事、男は自然ともすべけれども、傾城はみかけすぐれず、只灰をつけたるよし、又吞さしたるたばこを火入にうちあけ、其火につけてのむ事ゆめゆめすべからず、其野卑なる事匹夫の業にひとし、必是をいましむべし。問曰、全盛なる女郎の、よき煙草を手刻にさせて、絶すのみたらむはよろしかるべきか、答曰、是よろしからず、それも心やすき客などに對し、いでやきのふこれくの人たばこを玉はりしが、あしからぬやうに覺ゆるはなごゝて、とりよせ引きちらしたるはさもあらむ。されどたびくにかゝるふるまひをよしとはさだめがたし。又問、傾城のよきたばこを擧屋へとりよする事よろしからずとて、いたくつたなきたばこを擧屋の出すに、太夫職

の女郎などそれをむざ／＼とのむは見かけみぐるしかるまじきや如何、答曰、諸郭へ對しては申されねど、まづ京の學屋といふにはおしなべて、其ほどみぐるしきつたなきたばこを出さねば、太夫職の香かぬるほどの事なし、まれ／＼にたばこあしくば、太鼓女郎をよびてたばこをあらためられよといひつくるまでにてよし、大阪とてもよき學屋のたばこはさまざまあしからず、大津伏見奈良堺などはよくもあらし、なれど、又それ程の女郎の住處なれば、目にもたゞぬなるべし。」

と述べて、更に代表的の喫煙家として、上林の麗子金太夫を推賞して、

「わきてたばこすきなりが、雙六三味線歌がるたなどにかゝりし内には、心しりの越中辯に禿などを呼びてたばここと聲かくる。直道に吸付てさゝぐるを、ついたりて幾度にもたゞ一息のみ引てかへす、終に二息と引く事なかりき、よそほひの見事さ、躰くわつだつにてさすが上職めきたり。」

とあるが、いくらくわつだつがよろしいとても、鼻の穴から噴き出してはいけないので、

「女郎様などの鼻の穴より吹出し給はんは、いまり焼の香炉のごとく見苦しななどはおろかなりけふもさめはてぬべし云々(ひとりね上)。」

吉原通ひも通人となるまでには中々の苦勞で、たばこ一服にもかれこれやかましく、きせるの扱ひにも粹と不粹がわかるのだ。「手きさみのたばこを外へもつて、さまざまの細工したるたばこ入を、珍らしげに持事宜しからず、奉書をおりてうち入たるはさまよし、懷中より出すもよからず、下べに持たせて取寄て見よし、されど人に寄て懷中もゆるすべき、其取出たる煙草のへりなばへり次第たるべきを、度々につゝみかさむるなど至つて見苦し」(色道大鑑卷

二)いのであるから、うつかり煙草ものめない。

それに寶曆頃になると、「昔は客の衣類けつこうにて茶屋は龜末成りしが茶屋りつばに成り客はそまつに成體我知らずかさ高になるも客はがん首をたゞきまげたる喜世留を島の袋より出して吞ば茶屋は銀のきせるをびろうと錦の提多葉粉入に金物打たりあたりも照りかゞやく如くの喜世留舞留の匂ひふん／＼たるを吞み」(北里戯場鄰の疝氣、原武太夫著寶曆十三年?)しかも茶屋の若者などの方が「不斷の着るるなどに羽二重紗綾ちりめん金入錦の帯銀の喜世留一本にて三分壹兩程のあたひなるを持(同上)つて居たので、遊びはます／＼面倒になる。

「總て女郎買と云はけいこなくては自分のりやうけん計にてはなりがたからん其故は座敷遊びの内は曲りなりにもまぎらかすものなれども床に入女郎とさしむかひになりたる時皆おなじかたなりと、女郎床へ來る時寝入たる體か今日のさめたるふりして多葉粉すい付出せばかなつらをして吞うちにも何いふたらよからう杯とあんじ事初て逢たる女郎には咄しもならず(同上)もうおあづかり申ましょにやう／＼氣がやすまり、これからがおやまの初陣二かいへあがつてたばこ一ふく寒むござりますナアといへばさよ御座りますといんぎん也」(虚實柳巷方言)で場なれのしないこと夥しいが、習ふよりはなれろで、いつのまにかお店をしくじつて地紙賣りにまでなり下り、四月なかばに單物ひともの、さてこそがまんがすぎて風邪をひき、疝氣のすじて七八日弱つたことにもならうといふのだから油断はならない。

おいらんの道中などでも延享寛政頃までは「多葉こを少しづゝ紙につゝみ禿に數多くもたせ茶屋にて一ふくのみ残りはそのまゝ茶屋にさし置て立なり、立寄茶屋毎に右の如し故に仲の町茶屋どもは右多葉粉にて一年中多葉粉を求むることなしとなり。然るに遊女ども三四十年以來(註安永天明頃より)(中略)毎日同じものを着し着替は一つも持さ

る由なり、たばこなども高價のものをゆれども少しも人に吞する事なし、時勢の然らしむるの人情かくいやしくなれり(塵塚談)といふのだが、人情のいやしいと否とにかゝはらず、遊女あたりの持つ煙草入れは先づ白奉書といふことにきまつて居た。惣じてのしやれ者を野暮といふので、ひとりねあたりにも白の奉書の煙草入れを第一とするとあるし、少しふるいが好色一代女にも「今の世のよねの好きぬる風俗は(中略)禿いひやりて供の者に持せおきし白き奉書包の煙草とりよせて吞むなど——」とある。

五人の男をのばせさしたといふ、あのアーケディア・ミクスチュアには及ぶべくもないが、當時でもミクスチュアがあつたらしく、ひとりねに「たばこにはほひを入れて吞む人多し、青樓の人などすべて有、伽羅など入てのむ事一入あしき事也、伽羅を入れて吞し人に健忘の病をわづらひ死なざることあらずと云ふ事なし。さのみこればかりは好色にもならぬ事なればさりとはいらぬ事」といふて居る。折角伽羅をまぜても好色にならぬどころか、健忘の病にかゝり、死なざることあらずといふことなしといふやゝこしいことになるのだから、それは「野州馬頭山の最上の油脂の深きに秩父薄邊の脂のつよき葉と等分に合せ刻(中略)右の煙草は火をつけてきゆる事なしきせるに息をいれざれども五町が間減ざるを奇とす」(煙草百首)といふ五町煙草にも劣るミクスチュアといふことになる。

かういふ場所で伽羅入りの煙草を吸口の二つある煙管などで脂下つたあげくはお定りの勘當か心中といふところであるが、三浦屋の高尾五代目は紺屋九郎兵衛なるものに身請されてから、「たばこやとなり高尾たばこと申候」と三浦家傳説にある。此の染物下手のだ染九郎兵衛の場合などはまことに仲もむつまじく、添ひ逢げたといふが、中々さうまくも行かぬ事が多い。

勘當へ持つてうせろと銀煙管

あげくの果てはかうなるが、それでも親の心で銀ぎせる。しかも出入の親方に二人をたのむといふ所で、水いらすの煙草店といふのが定法であらうか。されば、

より給へあがりなんしと新世帯

張るには張つたが、訪ねて来るのは三年越しの廓仲間、いづれも金の使ひ方は知つて居るが儲け方は知らぬといふ蕩兒、されば折角のうれしい世帯も、

吸煙切臺煙草香 新家世帯不堪張

只今惟有定紋枕 會照鴛鴦比翼房

と不孝に當つた罰がそゝろ身にしみる頃、父もよる年波といふので、やうやく勘氣もゆりて家に入つてほつとする間も與へず、こんどは姑の眼が光る。長火鉢長きせるそれに長つ尻の姑婆、何しろホルモン内分泌の調和を失ふて、イオンの濃度に平衡を保ち難いヒステリー婆アに對して、片方は青春夢甘き若い女である。おまけに會ては鴛鴦比翼の閨房裡に相語つた戀の勝利者である、互に氷炭相容れざる亦止むを得ぬとしても、何にしても姑の長きせるは恐しい。昔しやねと嫁女をまへに長ぎせる

しかし、きせるの恐しいの時と場合によりけりで、三浦家の揚卷と不朽の艶名を謳はれた往年のダンディ助六は、雨もふらぬに傘をさして花道にかゝつて、さて曰く「大門へぬつと顔を出すと仲の町の兩側より附近の女郎の吸付煙草で煙管の雨が降るやうだ」と。だから、

助六の傘はきせるの雨にさし

助六が雨は村田に住吉屋

であるが、更にこゝへ地廻り連から喧嘩を賣られれば、

助六にきせると棒の雨が降り

出すことになるのだが、彼が花道に傘をひろげての大見得に、まづ百棧敷あたりが有頂天になる。代六文の火縄を賣りつけられて、ぎつきり詰められ煙草ばかりのんで居る連中、

煙草をば達者にくらふ百棧敷

の中には火なわ六文を拂ふまいとか、

どこからか吸付て来る百棧敷

切落し肩から出して吸付る

のもあるが、時には、

戀聲は火なわを貸した男なり

などいふとんだ嬉しいこともある。然し火なわうりの権力は大了たもので、

火なわうりほつても別火くはせぬ氣

でどうしても六文は拂はせやうといふのだ。仕方なく火なわを買へば、

蹈んばつてさう來なさいと火縄うり

だから、百棧敷あたりは全く身動きもならぬところへ、更に、
火なわうり人をつつべし込んで行き
火なわうりでつちるやうに人を入れ
るのである。

彼等は又きせるとも稱して、本業は切落し土間札詰の客へ煙草の火を賣るのであるが、其他に、役者の出入に聲を

かけるとか、淨りりの所作事の相の手に役者をほめるとか、又は右の川柳のやうに客をつつべし込む役をもつて居て、小屋の中では中々の勢力があつたのである。

第四章 煙草と學者

三浦淨心は「せめて此の草をなも知らでは異國の聞えしかるべからず」と、大いに國際意識に眼覺めたところを見せて居るが、これに對して煙草排斥論を主張した者も決して少くはない。大和事始の著者、貝原益軒は、本草洞詮を引いて、大論陣を張つて居る。

「煙草名を想思草、言は人これを食時則時々思想おもひおもて離



大槻啓水翁肖像 (啓水存響ヨリ)

事あたはず、辛味氣温にして毒あり、寒濕痺を治し、胸中の痞隔痰塞を消し経絡の結帯を開く、人の胃腸筋脈と通暢する事を喜。故に烟氣口に入りて直ちに胃に循て行、内より外に達す、四肢百骸至らざるところなし、其功四あり、一には醒ればよくこれをして酔はしむ、蓋し火氣薰蒸して表裏皆徹す、酒を飲が如く然り、二には酔はよくこれをして醒しむ、蓋し酒後には是を嘔つて氣を寛し、痰を下す時は餘醒俄に解、三には飢ればよくこれをして飽しむ、四には飽ばよくこれをして餓しむ、蓋し空腹にして是を食へば則飲食快然として消し易し、人遂に是を以酒に代、若に代へ、終日はを食て厭ず、然れ共人の宗氣一呼に脈行三寸、一吸に脈行三寸、晝夜に一萬三千五百息也、五十度身を周て脈行八百一十丈此自然の節度也。臟腑経絡皆氣を胃に受く、如胃中に入て頃刻にして身に周し、常度にしたがはずして駛疾の勢あり、こゝを以て氣道頓に開通體俱に快し、然りといへども火と元氣と兩ながらたゞ一勝は一負、人の元氣なんぞ此の邪火の薰灼するに堪べけんや、必眞氣日々に衰へ、陰血日に涸、暗に天年を損す、人は是を覺えざるのみ、凡内痞外痞を病もの、其開通の力をかりて、寒濕痰帶を驅除して又殊功あり。もし陰虛して火あるもの、是を食へば烟をますが如し、是を戒よ、洞詮の説かくの如し、至論といふべし、今俗に飲食の中にも、殊に酒、茶、煙草の三飲は、貴となく賤となく、智あるも愚なるも、わきて是を賞す、されば酒は毒有と雖いへども少く飲時は人に益あること醫書に見えたり。殊に聖人もこれをすて給はず、茶は渴を潤し煩膩を去の能あり、たゞ煙草のみ益なく害多き事これに過ぎたるものなし、俗輩奴婢のこれを味は責るにたらず、士君子たる人の蠻國の俗をしたひ、身に害あるものを好み賞する事は甚ひが事なる可、元和元年六月廿八日將軍家より天下に令を下して、煙草を吸事を禁じ給ひしは、理ある御掟おきてなりしが、今その禁のゆるみけるこそなげかしけれ

308903

といふので、洞詮の醫學的智識はよくも脈の速さまで、曲尺ものさしで測られたものだと敬服に値する。此の學理的立場から反對されては、煙草、堪らない。

香川秀庵は「煙草は古昔無きところにして今日天下に滿つ、有らざる所なき煙草より甚しきはなし、其氣猛烈にして其味辛辣、醱汁多し、偶々喫すれば毒有り、人は醉麻眩倒す。之を喫て慣るゝに及べば則ち半刻も手口より離さず唯氣を吞む如し、烟氣腹に入れば必ず惱悶を致す。今や口裏唯烟を吸入して却つて吹き出し去り、喫後直ちに唾を吐く。若し其煙を吞めば又悶多し、嗜好の耽に及びては皆其の煙を吞むで異事なし。習慣の久しきに至つては、昏に酔倒の患ひなきのみならず、却つて又好喜の樂みあり。(中略)種を蒔くには必ず上田を用ひ多利を收む、これ工商の奇貨となすといへども、又稼穡の巨害に非ずといふべからず。予甚だ此物を惡む云々」として健康と經濟の立場から、尤もな反對をして居る。

本草從新は「火氣薰灼、耗血損年、衛生者宜遠之」と、おどかして居るが、三百匁のめば、四百匁の血を増すところの何とかドラッグが巾をきかせる大膽の今日では、こんなことでは驚かない。

大槻馨水はその蘭學の新智識を、蕙錄に發揮して、「先是十五六年余與一二同志講究蘭書、時偶閱獨度奴私、創墨兒、吸蒲涅兒、列墨力伊、伍乙志諸子所著書、其載答跋菰之圖說詳且備矣。乃欣々然喜謂是豈易得乎、因私翻譯三子之說——するに至つたが、春波樓司馬江漢に云はせると、「彼大槻玄澤と云ふ人は仙臺侯の外科にて蘭學に名あり、頃日タバコの起源の書を引きて皆漢學なり、タバコは多くは愚人卑賤の好む者にて、故に此書は世の嘲弄ものとなりぬ」とかで、馨水を嗤つて居るが、これは少し、江漢のヒガミ根性からではないかと、痛くもない肚をさぐ

られるおそれのある程、それ程薦録は名著なのである。

司馬江漢は全く禁煙論の急先鋒とも見られる程に、煙草を排斥して居るが、今其の理由を見ると、
「近世煙草を嗜む事愈衆くして之を樹る者亦多し、最良美田地に限らず、夫烟草これを多波古といふ、(中略)竊に謂ふ、洞詮に言ふところほど其能を説くと雖も、實は則ち人をして其毒を知らしめんと欲するのみ。豈須臾の快をなして終身其患を殘さんや、且夫人初めて是を吸ふ眩暈せざる事鮮し、煙管の中に油煤あるを、禽虫誤りてこれを甜む、即ち死す、峻烈此の如し、咸常に見る處なり——」

とて、如何にその毒の劇しいかを説いて居る。更に世人が豆腐は煙草の毒を消す妙薬だから、豆腐さへ食べて居れば、そんな中毒になることはないと傳へて居るのに對して、「豆腐の力安ぞ其の峻烈の氣に克つ事を得ん。銖積寸累遂に大患をなすこと必せり」とムキになつて反駁して居るが、豆腐と煙草ちや成程角力にもなるまい。

更に經濟的見地からして彼江漢は、

「夫タバコの大害は田畑を損ず。又火災の患此の微火より發る、屢々禁ありと雖も敗る、戻ることなき術あり、今よりして小兒にもこれを吸はしむ可からず、もし禁を背くものあらば父子をして共に死罪にす、大約三十年四十年にして漸々止むべし、又烟具を鬻ぐ者はいたます云々」

とて、日本人が性來、遠き慮を缺いて、思ひをこらし理を究めるといふことをせず、自分一人のこのみ考へて、子孫百年の後の幸福を計ることがないのを、丁度桃の花のさいて居る利根川岸に水を見て、己れの脚に喰いついて歩くことが出来なかつた狂犬にたとへられるとて、禁令の効發せざるを歎じて居るが、成程、俾が煙草をのんだら親子と

も死罪だなどといふ、フアツシズムで睨みつけたら、禁煙の一事はうまく行くかもしれないが、ロシア、トルコあたりの制裁でさへも、せい／＼鼻を削りおとす程度だつたことから考へて、やがて國家の重大危機をまねくもとならう。

司馬江漢よりも、一話一言の著者蜀山人はあの飄逸な狂歌からは、思ひもよらぬ頑冥さで、こんなことを言ふて居る。

「世は末法ニ下リ人ニ一ノ大病付ク、所以者何ハ慶長元和ノ比ヨリ煙草ト云妖草異國ヨリ渡リ人年々ニ賞翫シ用ルコト日々ニ燦也、無法ニシテ失多シトイヘドモ風味ノ美ニ迷ヒ、此失ヲ顧ル人ナシ、聖人ノ世ニ此草デナバ五辛五戒ノ誠ヨリ堅カルベシ。(中略)是ヲ用テ藥トナスコトアサマシキ迷也、業深止メ難キモノハ、實テ大分ノ無作法ヲクシナム可シ、

一、第一痰ヲ吐事

一、談議講釋ノ時不可用事

一、呑ガラノ灰ヲ吹出時可心付事

一、食事ノ時、煙草出スベカラズ、尤モ吞ベカラズ事

一、風上ニテ人ノ面ニ煙ヲ可恐事

一、キセル掃除人前遠慮ノ事

一、上下トモニキセルクハへ、コトワザ成ベカラザル事

一、天草飽マデネチ入、永吞殊ニウヘヲセ、度々痰ヲハキ咄スベカラザル事

此他惡敷事數多有トイヘドモ右九ヶ條（八ヶ條ノ誤カ）ハ極タル罪業也、スベテ威イカ、リ續ザマニ飽マデ吞風情見苦シクコソアレ、願ハクハ我子孫相續セバ此書ヲ傳テ堅ク守リカ、ル惡事ヲ手ニダモトルベカラズ、悲哉此草ハヤリ初メシ時其比ノ名君末代ノ失ヲ考思召御法度堅ク仰出サレ、或時ハタバコ作りタル者ヲ籠舎セシメ、或時ハタバコキセル辻々ニサラシ燒捨商賣人禁玉フトイヘドモ此ノ草ニ一度フレ味ニ著シタルモノニハ令ヲ捨ル事モ更ニ不厭、御成敗ニカナハズ、切支丹ヨリモ止ガタク依レ之ソロ／＼高人ノ中ニモ用玉ヲ方出來ル故ニ今ハ是ヲ嫌フモノアレバ却テ希有ノ思ヲナセリ、鼻有猿ノ笑ヲ得ガ如ノ世トゾナリケレ」

あの蜀山人が、か程迄に煙草をにくんだとは一寸信ぜられぬやうではあるが、同じ一話一言中に、禁煙令の出た事など、すつかり寫しとつて喜んで居た程の煙草嫌ひであつたので、太破己とか又は妖草などと、いかさま、かのラスプーチンを聯想させる様な惡名で罵りもしたものであらう。

ものも度を過せば何とからで、こんな調子に乗りすぎたいや味のものより、もつとおとなしい養生訓の方が、遙かにきゝやすい。

「煙草は性毒あり、烟をふくみて眩ひ倒るゝ事あり、習へば大なる害なく少は益ありといへども損多し、病をなす事あり、又火災のうれひあり、ならへばくせになり、むさぼりて後は止めがたし、事多くなりいたづかはしく家僕を勞す、初よりふくまざるにしかず、貧民は費多し」

養生法にも、「煙草は其の質を委しく論すれば害のみにして良とすべき處なし」と尤もらしいことをいふて居るが、

その尤もなことは安齋隨筆に劣ること數段である。即ち

「これを好まざる人は毒物なりとて其害を論ずる人もあり、酒を多く吞人は酒毒にて遂に内損の病になり或は吐血、或は浮腫、或は黃胆等にて死する人あり、煙草を好んで烟毒に中り内損して病を發して死したる人を不見不聞、然れば毒物に非ず良物にも非ず、烟を吸て讀書寫字に而心倦み氣鬱したる時には氣を運し、鬱を開くを覺ゆ、食後に烟を吸へば口中爽なるを覺ゆ、此の他には何の事もなし尤無益の物也」

和漢三才圖繪では、

「往古無_二烟草_一而莫_二不足_一、多吸_レ之亦不_レ充_二一_一羽糧_一、費_二田甫_一減_二穀類_一。故呼曰_二貧報草_一（中略）竟_二以立_二於茶酒之上_一不_レ嗜者百中唯_二二三_一人耳。雖_レ有_二小毒_一嗜者亦無害矣」

とあり。貧報草の名を載くやうでは、國家的經濟不安の時節柄、早速經濟審議會の鋸にかけられるところであらう。むかしは烟草もなく何の不自由もなかつた事は事實だが、それだからといふて烟草はなくても間に合ふものだと云へぬ事は、昔なかつた汽車や飛行機、ラヂオ、キネマが、今では我々の文化生活に「ひと日もかくまじきもの」となつて居るので見ても、うなづける所である。大勢すでにこゝに至れば、隱元禪師が惡_二煙草_一、偈も、僧房の片隅にか響くまい。

一管狼烟香復吐 恰如炎口鬼神身

當年鹿苑有此草 不說五辛說六辛

めさまし草古今形勢では、その効用を大いに推賞して居るので少し長いのを我慢して、こゝに引用して見る。

「たばこといふもの異國よりこゝへ渡來せしより二百年にあまりて久しきならはしとなりぬれば世の人貴賤ともにその謂をも知らずよるひるとなくけぶらす事となりて、今はひと日もこのきみなくてはともいふべくまことに酒にも茶にもまさるものになん。されば手と口とに離さず、しばしもかたはらにおかねば事かくるが如し、(中略)親しき友どちよりつどひて、ふるきをかたらひつるにもこれなくてはそのしほなきにも似たり。たとひ山海の珍味をつくせる酒宴のむしろにも、時々これを吸されば物たらぬ心持す、又野邊の遊び川せうえう、月の前花のもと酒のあと茶のさきにもこの煙をかほらし、雨に對し雪を賞し、閑窓のうちにひとりつくゑによりて物かふがふる折ふし、又旅行く朝戸出て、たばこ吸ながらあゆめる趣、又家の中にありてもあやにくに事しげきころたゞひといきすひたるはいはん方なくぞ覺ゆる。憂につけ樂しきにつけても、これを伴はされは悶ゆる氣もひらかず、嬉しき心のびざるがごとし(中略)、もろこし人は一名想思草と云ひて、人ひと度これを吸ふときは朝夕おもひこがれてやむ時なしとなん。とにもかくにもあやしきまでに人のめづる草にこそありけれ。」

こゝに煙草の主治効用として、金瘡、槍瘡刀創、子兒の疳、食あたり、毒蛇、そこまめ痔脱肛等々とならべ立てて、藁の油うりと眞違へられるのも本意ないところであるから、先づ大體これくらゐにして置く。

漢文といふのは、司馬江漢でなくとも、讀ませられてはあんまりよい氣持ちのするものではなく、極めて非現代的、非能率的の文章だが、さうかといふてこゝですつかり省略するといふわけにも行かぬから、二三その代表的なものをこゝに出して見る。

葉如落蘇、截成縷噓吸豈爲口腹累。握管歎起一片煙。坐花嘯月多風致。臺城楊柳春色暗。爐峰晴靄山光翠。

これは先も後もまだ長い安積覺の文。次には酒に酔ふた時、唄ふ都々逸なるものがあれば、煙草に酔ふた時――苦しまぎれにうたふ支那の歌もある筈だ。その一つ二つ。

煙

祇園 瑣

一管吹煙爾草薰 平生愛爾送朝昏

香甘金石三杯酒 吐見蓬來五色雲

喫煙

伊藤 縉

詩促歸心酒促眠 一画盆樓管坐吹煙

氣氤自若函關紫 遺興何勞問李仙

詠煙草

天野 景胤

異香粉滿座。長管弄煙初。洞口秋雲亂。峰頭夜火餘。對花吹郁郁。送鳥吐疎疎。月暈生人面。風絲繞客裾。應同強沆瀣。亦似學响噓。內氣三吞盡。塵襟一服除。換我腰底物。薰我腹中之書。朝暮此南草。想思名不虛。我が腰底の物を換てと云ふたところで、まさか禪をとりかへて、腹の中の書物の香りをよくするといふ意味ではない。矢つ張り煙草を讀へて居るのであるが、漢字制限の今日、かういふ中華民國文學は、やゝともすると禪のとりはづしなどと眞違へられ易い。

かやうに賛否兩論をきいて見ると、どつちもどつちだが、元來煙草を飲まぬ連中が、ほんとうに煙草をしつて居る喫煙家をさしおいて、その功害を論ずることはその前提においてすでに誤謬があり易い。眞に煙草を知つて居る者は、

何と云つても喫煙家だ。然るに我々は愛煙家の口から、煙草の愛すべきものであることをこそきけ、飲むべからざる有害のものだとはきいて居ないし、よしそいふ事を言ふて居ても、事實飲む事をやめなさいといふ連中ばかりが喫煙家なのだから、矢つ張り煙草は飲む方の勝ちである。飲まない方の負けである。こゝに鶉衣の美文をかりて、煙草禮讚の諸士に捧げる。

「夜道の旅のねぶたきとて、腰に茶瓶も提られず、秋の寢覺の淋しきとて、棚の餅にも手のとよかねば、只々此の煙草の友なるこそ、琴詩酒の三つにもまさるべけれ。埃ちかのもえ枕をさがしたるは宰予が晝寢の目さましにて、行燈に首のばしたるは小待従が待宵ならむ、達摩は九年の壁にむかひて、炭火の重寶をさとり、西行は柳陰にしばし火打の光をたのしむ、されば出女の長ききせるは、夕ぐれの柱にもたれて、口紅兀さじと吸たる、少しは心づかひすらんを、船頭の短きせるは、舳さきに匍匐つて、有明の月を詠ながら、大海へ吸がら投たるよ、いかに心のはれやかならむ、やごとなき座敷に緞子張の煙草盆を、あまた敷に引き渡したるより、路次の待合に吸口包たるは、にくからぬ風情なれど、さすがに辭義合に手間もとるべし、只木がしらの松風に駕立て、繼ぎせる取まはせば、茶屋の噂のさし心得て、匏ながら藁火もりてさし出したる、一瓠千金のたとへも此時をいふにや、または雲雀なく空のどかに、行先の渡場とひ乍ら、畑打のきせるに、がん首さし合て一ふく吸付たる心こそ漂母が飯の情より、うれしさはまさらめ、そも煙草の徳も昔より、人のかぞへ古して、今更いふもくどければ、かの愛蓮にならひて、此數の品定めせむに、酒は富貴なるものなり、茶は隱逸なるものなり、煙草はさしづめ君子の番にあたりて、用ふる時は一座に雲を起し、しりぞく時は袖の内にかくる、こゝに神龍の働ありともいふべし、下戸と妖物は世にすたれ、下戸は

なほ少からず。今や稀なるは煙草ざらひにして、野にも吸、山にも吸ば、たばこ入の風流にさかんに、きせるの物ずき、とりくにあたらしくて、若輩の目を迷はせども、楠が金剛山の壁書を見ておもふに、たばこははさかぬのを専とし、きせるはよく通り、灰吹はころばぬを最上とこそ、さらば色みえでうつらふ花の人心にも、畢竟そのものの本質實儀をうしなはされともなり。」

煙草の人情は東西今に變ることなく、ポオドレルがうたの一ふし、バイロンの「島」の一句、みなその心を鶉衣とおなじうするものである。煙草の故にテニソンはヴェニスを棄てたが、カアライルはエマアスンとの一夕に百年の知己を得たと傳へられる。南歐に香り高い葉巻を作つて居たジブシイの女は、その情熱の爲に身を亡ぼしたが、アンドレアス・フテラルは、エンテフルの夏の夕べ、木陰の薄闇に持ち古したパイプを薫らし乍ら、神から一子を授かつて居る。ソロモンの榮華に此のものを缺いたのは、彼千歳の憾みと云ふべく、シエクスピアは、煙草のむすべも學ばなんだばかりに、ロメオやジュリエット、さてはハムレットなどの美しき青春をも、儂ない運命の下に萎れさせて了つたのだ。故に、我朝の古人、煙草のまぬ憂愁の兒をいまして残し給ふはいかひのほくに、

西行の秋はたばこもなき世かな

第五章 煙草えきぞちいく

人間の困苦や冒險の場合に於て、煙草が如何なる役目を演じて居るか、勞働と煙草、探險と煙草、戰爭と煙草等々我々が精神肉體の極度の緊張試験に際しては、煙草は全く缺くべからざるものとさへ考へられる。



山谷に猪牙ちよまやる船頭は、隅田のあげ潮に煙管をくわへるに過ぎまいが、天竺徳兵衛の鮫豆ぎせるは、太平洋に吹鼓をたゞき込み、竹内藤左衛門は粗糲に漂流して、五斤のたばこに何處もかはらぬ人情に泣き、船頭孫七はぼるねおに送つた九年の歳月を煙草に慰められ、幸太夫は氷雪のシベリに橋をかつて、國主から金銀の煙草入れを貰つて居る。板子一枚下は地獄の船乗り達が、夜毎あきらめかねて濱邊に待つであらう妻子に便りさへする術もなく、灰色の海原廣き只中に、我が船の影はうつつても鳥影一つも見えぬ

水、水、水。水はあふれて限りなくひろがつては居るが、飲むべき水は一滴もなく、帆をめぐる信天翁の廣い翼に、弓は射たけれども、沈み行く太陽のみは徒らに赤魴い。あの老水夫の結婚の夜の客の袖ひきとめての物語り、それにも似た我が海の子等の漂流談に、如何に異國の煙草の香りが高く匂つて居ることか。

幸太夫（天明三年漂流）が魯國から歸つて、將軍に調した折（寛政五年）の漂民御覽記を見ると、平岡美濃守の質問に對して彼は興味ある返答をして居る。

問 たばこは此方同様に候哉。何と申候哉。喜世るは焼物にて候哉かねにて候哉

答 此方よりは下品に御座候。やはりたばこ申候。きせるは焼物も御座候。かねも石も御座候。水晶にて天火をと

りそれにてたべ申候ふ。私共は勿體なく候ゆへ、天火にてはたべ不申候。何故と尋ね候ゆへ勿體なき段申候へば笑申候。

何か凸レンズでも使つて火をつけたのであらうが、それは幸太夫には如何にも勿體なく畏いことであつた。

幸太夫については、さう詳細のことを知る由もないが、寛政六年、仙臺の船頭津太夫等が、魯國に漂流した顛末は、環海異聞として残されて、稍詳細多岐に亘つて居り、興味亦尠くはない。彼は、初め仙臺から蝦夷島に渡らうとして、北海に流され、魯人に救はれて、氷海を経て魯國に入り、更に大西洋を南下して、南アメリカの南端から、再び氷海に迷ひ込んだりしたあげく、太平洋を北上して、十年目に歸國したといふ、まことに數奇の運命にもてあそばされた男である。つまり、彼は完全に世界を一週して、且つ南北兩洋の氷海をまで経験して、いろ／＼の事象に接したのであつたが、無學の悲しさには、我等の求めるものを充分に満足させてはくれないで居る。それでも、興味多きことは幸太夫のその比ではない。

同書卷二、ナーツカ滯溜記事に、

「島に生し候萱のごとき草を焼きて灰にしたるをたばこにすりませ置島人獵より歸りたる時其手掌へ一つまみ與ふれば是を得て甚悦ぶ様子にて直にこれを鼻へこみ又齒ぐきの間へも入申候。烟草の氣ある中は含み居るなり。」

嬉遊笑覽に「一種喫たばこといふものありその器物紅毛の細工にて犀角瑪瑙などに金銀をかざり精巧に造れるものなり云々」とあるが、我國では一般に用ひられなかつたところであるから、津太夫にも珍しかつたわけである。

「又煙草土地（伊爾歌都加）に産す。刻煙草は唐山（唐）より來るは油くさく覺ゆ。此國の人多くは喫煙せぬ習慣な

り、上人はまれ／＼に一二吸つたぐさみにのむ様子なり。ヤコテプラーツケは甚好み吸ふなり。本國の女子は絶て喫煙するものなし。喫煙草といふものあり。これ煙草を細末にして器へ入置き、折々鼻へひきて喫ぐなり、これも女人は用ひず、たま／＼老婦など養生のためとてかきて涕をたれ涙をながし居るを見たり」とあるに見ても、寒氣のはげしいシベリアでは、風邪、鼻カタルの豫防などの爲めに、喫き用ゐられた程度に過ぎなかつたやうに考へられる。

更に同書の土俗風俗のところには、

「煙草は男女老若おしなべて服するには非ず。まれ／＼にのむ人あり、上等の人は時々慰にのみ楽しみとする様子なり。煙管は金石磁器様々あり、總名を「ガンザ」といふ。燒物にしたる物を「バトロブコ」といふ、銀にて作りたるも見たり。右いへるごとく人々皆用るには非ず。但海上渡世する人は多くは喫煙するなり、是は「ツンガ」といふ病を防ぐ爲なりと也、止白里地方の種族ヤコテプラーツケは至つてこれを好み服すみな木管なり。」

この一般にはさして用ひられぬ煙草をのみたい一念で、津太夫等は何れも土産の葉煙草を求めて、自ら刻んで服んだが、土地の人々がこれを臭いとか、煙いとかいふて嫌ひ避けるのには、可なり氣苦勞したといふて居るが、後には土人の世話を離れて、家をかりて住む様になつてからは、誰に憚ることもなく、思ふまゝに呑みつゞけて、土人の嘲笑をも氣にすることなく、充分に満足したとかで、これによつても如何に彼等が、煙草に飢えて居たかゞわかる。

喫煙草についても、これが専ら「邪氣の外襲を除く爲め」にのみ用ひられて居ることを述べて居るが、事實シベリ

ア地方に煙草の入つたのは、比較的近世のことであるから、當時はまだ一般の嗜好に投ずるまでにはなつて居なかつたのであらう。

津太夫等は更に此地から、樞で露都に連れて行かれたが、露國では先の幸太夫の場合にもあつた如く、日本との通商條約締結を希望して居た矢先きとて、是等漂流民などは極めて親切にもてなしてくれたものらしい。津太夫一行の中には、とう／＼歸國せず露國に歸化したものさへある。

ペトルブルカ(レニングラード)では、「虎斑又は紫色白色卵黄色の石——石の名はムラ／＼といふよし——細工物にもつかふと見えて煙管頭に製したるも見受たり。」とあるが、大槻翁に言はせると「蓋馬腦、下品也。和蘭ノ麻兒迷爾斯^{スチン}延^ス謂^フ」のであるから、大理石(marmor-stein)のことだ。(一一〇頁参照)

こうして一八〇三年八月、ペトルブルカ出帆といふのであるから、寛政六年六月漂流してから丁度八ヶ年目に歸國の見込みが立つて、大西洋を南下、同年十一月中旬「南アメリカの中よしポルトガル領エカテリナと云ふ大湊に船を泊む(中略)男女共に齒は黒し、常に松脂のごときものを嘔む、不斷口を動して居る様に見ゆ」と述べて居るが、これは嘔煙草をいふのであらう。嘔煙草も、喫煙草同様、我が國で殆んど用ひられはしなかつたが、古く長崎を訪れた蠻船の水夫達が、煙草を食べて居るのを見たといふ事もあり(大和本草)、寶曆元來集にも(卷十、文政七年五月、異國船常陸國多賀郡へ着の中に)嘔煙草の事がかいてある。

イギリス船上陸致候者合面

一艘六人乗 一艘六人乗

ゲンフ	ケンヒサン
キヨホク	スメワ
ハト、ン	ケンヒス
ラウロフ	ナフル
フレルキヤウ	ランキウ
キイヒス	メラタ

「右は何れも煙草を好き食ふ又は含む」とて仰天して居るが、我々が仰天するのはアフリカの奥地へ入つてもない様なその名前である。津太夫が南米で見た嚙煙草は、これより十五年も以前である。

一寸わきにそれる處れがあるが、幸太夫の雜記中にツンガといふ風土病（寒氣に中つて四肢筋脈をひきめ肉硬くなつて黒紫色を呈して動作する能はずといふのであるから、おそらく凍傷であらう）があるが「ヤコーテプラーツケ等此の病を患ふ者を見うけず、常に煙草を嗜み食ふて豫防する故にやと人々いへり」とあるが、この嗜み食ふといふのは、嚙み烟草を意味するのではない。津太夫等は久しく此の地方にも居つたのであるが、嚙煙草は南米に入つて初めて見たくらゐであり、且つ我が國では、むかしから煙草をたべると、「給」又は「食」の字を用ひて居ることから推してもシベリアのものは嚙煙草でなかつたことはたしかである。

寛政七年、青森の儀兵衛等が、イシハヤ（バタンの屬島といふ）に漂流した顛末を記した漂流始末書を見ると、「たばこ御座候てきせる無御座候。香様上品は煙草を能粉々にいたし、鼻孔へ吸込申候、中品は右品を長さ二寸幅五

六分の紙へ包み、火を付吸申候、下品は巻葉にいたし五寸ほどに切り先へ火をつけ、又は右巻葉のまゝ喰す者も御座候」

とて、是にも喰することが述べてあるが、勿論嚙煙草といふ程のものではない。我國でも、地方へ行くと、疍のくすりだとして、子供に煙草を食べさせる所があるが、これを嚙煙草と見るものはない

文政四年、奥州南部大辻村の庄吉、漂流してシヤムの屬國ベラホに至つた物語り中には、煙草は近年シヤムから渡つたばかりであつて、煙管といふものはまだないので、木の葉をまいて筒にした先の方へ、煙草をつめて吸ふて居たと述べて居るが、我が熊野の一部にも、まだ椿の葉などに巻いてのむ風が残されて居る。

紀州遠浦村の虎吉等が、嘉永三年米國漁船に助けられて、太平洋を渡つて歸國した顛末をしるした紀州船米國漂流記に、オホーツク海沿岸の風俗が物語られてあるが、日のみじかいカムチャツカあたりを夜國といふて、

「夜國にても細工は相應に致し候哉、面木木の煙管を以て煙草を吞候由、煙草は亞米利加人と交易なり、アメリカの婦人は煙草を喫吸せず、此の煙草は亞米利加の珍製にて葉を蜜にて堅く煉りかため、厚一寸許り、長五六寸、巾一寸許りに製したるもの由、アメリカ人等は常々これを喫吸し、又不斷口にも含み居るなり、此の煙草を嚙する事、口中の藥にて肉食の毒を消すなり、漂人此の煙草を船子供より澤山に貰ひ候へども味嚴敷、吃烟しがたかりし故後に中華に持渡り賣りしに、目方三百匁價銀十二匁に賣候由、此製は唐土にては出来不申と云、其故價高く賞翫するものなり、まして夜國裸島なんぞにては、重寶するよし、最初漂人ども持合せ有之日本煙草一玉づつ船子に遺候得共格別不敷、後に唐土に渡海の砌、右の刻煙草を贖として船子共一同より戻し呉れ候よし」

とあるが、これはケークタバコの種類ではなからうかと考へられる。型に入れて固めたもので、削つてパイプに詰めて用ひられるのだが、水夫などには、嚙煙草としても愛用せられて居る。

更に虎吉はハウフ島で、

「女は薄葉のごときものを少し前に垂れ下げ前陰を覆ひ候ばかりにて、尻の方丸裸なり、此の女をアメリカ人大船へ引上げ日本の惣嫁買ひのごとく面々奸姪し價は煉煙草一寸程づつ切つて遣しける、これを女口に含て小船へ歸るを裸男下にて待うけ、無理無體に口中の煙草を押し奪取勝に奪ひ合ひ義理も情もいはぬ裸虫の形状なり、(此の煉煙草裸島にては殊に珍重するにや、船子ども、取はづして一切浪におとしければ、彼男女波の中へ飛入り恰も魚の泳ぐがごとく群り波をわけて拾ひ尋ね候よし)」

といふ煙草に對する文字通り赤裸々な人間のすがたを見て居るが、嚙煙草のやうに強い味は、古來淡泊の味になれて居る。日本人には矢張りむかないものであつて、現在では西歐にすらも、わづか炭鑛夫、水夫達等の劇しい勞働に従事する者の一部に用ひられて居るに過ぎない。喫煙の妙味は何といつても、その軽い癡醉と、香氣と唇への觸感と、さうして立ちのぼる煙の中にあるのであつて、喫煙草、嚙煙草のやうな、煙と特殊の觸感とをもたぬものでは、その魅力の幾割かを失ふて居るわけである。

第三編 異國篇

第一章 煙草と英吉利

タバキアンの社交的常識は、英國に於ける煙草の初りに關して、先づ一五八六年ラルフレインがヴァージニアより持ち歸つてサー・ウォルター・ラレイに贈つたといふことか、乃至はフランシス・ドレークが一五七三年の夏、新大陸より持ち歸つた事などの街學にわたらざる禮讓さで、婦人を前にした喫煙室の興味を集めるであらうが、然し常識とは單なる科學の窓にしか過ぎず、そこを通して内部の何を見るかに至つては、甚だ心許ない性質のものである。我々がこゝにもう少しその窓を押し開いて、喫煙家の常識を確かなものにしたといふのも此の故である。

日本では前述のやうに、煙草が輸入され、用ひられてからかなりの歳月を後れて、漸く慶長の中頃に九州に於て栽培されたと傳へられて居るが、英國に於てはこれと反對に煙草に關する智識を有し、科學的研究もされ乍ら實際用ひられたのはそれより後である。

コロンブス以後、新大陸への探險隊は幾重の波のうねりに乗つて歐洲より大西洋へ乗り出して行つた。英國にあつては、その勇しき冒險家の名譽を先づ、フランシス・ドレークに捧げる。彼が西印度諸島の探險からプリマスへ歸つて來たのは一五七三年八月九日であるが、こゝに興味あるのはウィリアム・ハリソンの「英國年代譜」である。即ち

その一五七三年の項 次の如く見られる。

「一五七三年、此年イングランドにて「タバコ」と云へる印度の草の煙を、小さな杓子様のものにて口より吸ひ込み、頭、胃に入るゝこといともてはやされたり。こはりようまちその他五臓の久しき病に効ある由なり。」

此の英國年代譜は著者の死後二ヶ月遅れて出版されたものであるが、彼の死亡は一五九三年故に、この一五七三年のごときは明確なる記録であつて、決して他人の著述や話によつて書かれたものではなく、親しく目撃した最も信頼すべき所であるとされて居る。

此の事によつて、ドレークが英國に煙草を輸入した最初の名譽を負ふとなす説は有力なる支持をうけるやうではあるが、ドレークが歸國したのは同年の八月であつて、一五七三年は残すところわづかに四ヶ月である。此の短時日の間に、當時多からぬ煙草がハリソンの記録ほどに大いにもてはやされるに至つた (Grellie taken up and used in England) とは無理である。矢張り此の以前より多少知られて居つたものが、偶々ドレークによつて一般の流行に迄導かれたものではあるまいかと考へられる。然もハリソンの年代譜は、「此草未だあまねからざれば其の代用として**菲沃斯**などを用ふ」と述べて居る。

か様に煙草の代用として、同じ茄科の植物が用ひられたといふ事實は、矢張り煙草が、一度味はゝれたが故であつて、何の経験もない者が初めつから、代用品で間に合せてそれが流行とまでなるとは一寸考へられない。即ちドレーク以前に何等かの形式で煙草が知られて居つたといふことは否定し難いところである。

果してこれより先三年、一五七〇年にメシアス・ド・ローベル博士はピーター・ビーナ博士と共同で、**煙草の植物學的**

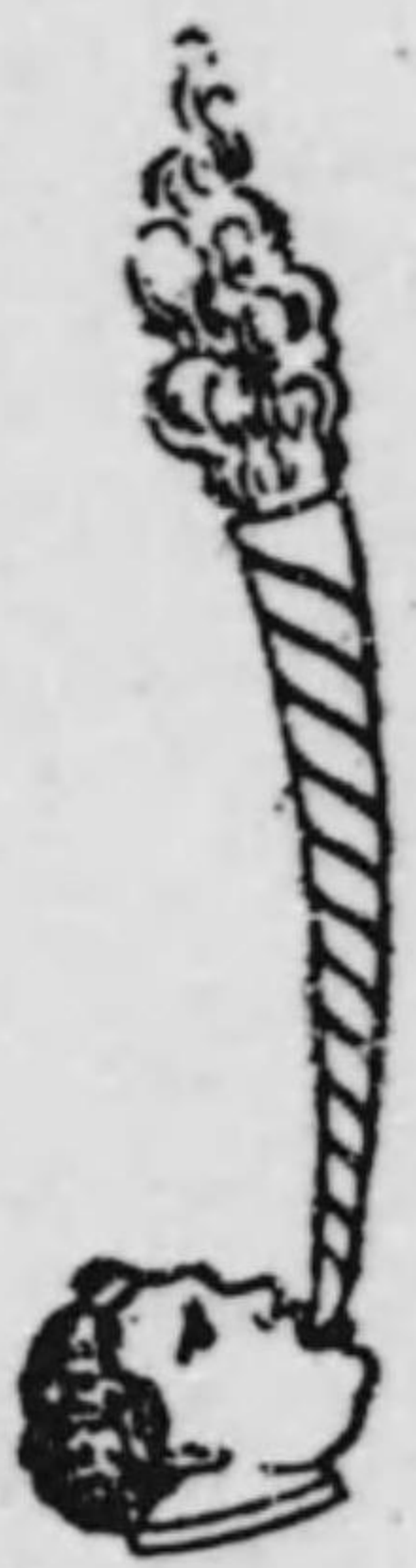
Mathias de Lobel

Peter Pena

Indorum Sana Sancia

vive Nicotina (tallorum)

研究をその著述中に加へて、エリザベス女王に献じて居る。その中に「親しく**菲沃斯**の煙にむせ返つて居る男を見た」ことから、當時**菲沃斯**と煙草とが混同されて居た事を論じて居るあたりは、我が國の款冬の藁などに思ひ合せて面白



ことである。更に此の二學者のいふところを見ると「讀者はアメリカより歸り來つた多くの水夫が椰子又は苜蓿で作つた小さな煙出しを持つて居てその先の方へ此の草の乾いた草を詰め込むのを見る事が出来る」として上掲の如き興味ある圖をそへて居る。原著者も自ら此のものを試みて、これが明かに**菲沃斯**と異つて居ることを知り、更に此の草の醫藥としての價値に論及して居る。さうして「此の草が語られるところには、何處にも靈草として尊ばれた」由であるが、これによつて見ても、一五七〇年以前に煙草が知られて居たのは明かである。

故にハリソンの年代譜も、ドレークの輸入も、單に第二次的の重要さしか誇り得ないことになるのである。然らば此の一五七〇年以前の煙草は何時、何人によつて此の國へ齎らされたものであるか。我々は更にこれより數年を溯つて見る。

John Hawkins

海軍少將ジョン・ハウキンスは一五六四年フロリダに渡つて、フランス人が土人にならつて喫煙して居るのを見た

Edmund Howes

John Stow, Annals or General Chronicle of England

と報告して居る。エドマンド・ハウスは一六三一年に、ジョン・ストウの「全國年譜大全」を更に増補出版して居るが、その中に「タバコは最初ジョン・ハウキンス將軍によりて英國に輸入せられたり、これ一五六五年の事なれども、一般に用ひられたるはこれより後のことなり」とかいてある。これはビーナ・ローベル博士のいふところとよく一致した精確さを示して居る。

ハウキンズは一五六五年九月二十日、彼の第二次西印度探險から歸つて來たが、その際フロリダに於て親しく煙草を知つたもので、彼と行を共にしたジョン・スパークは此の航海に關する報告を一五八九年に公にしたが、その中に一五六五年七月フロリダのフランス殖民地に於て次のごとく觀察して居る。

「フロリダ人は旅行の際には棒の先に土製の碗をつけたるものと一緒に草の乾したものを所持して行く、それを土の碗の中に詰めて火をつけ、管を通してその煙を吸ふてその空腹をみたすのである。これで彼等は四五日といふもの食はず飲まずで旅をつゞけて平氣である。彼地のフランス人亦是に倣ふて居る云々」

ハウキンズはこれを見て當然、フロリダの煙草 (*Nicotina Rustica* 種) の標本を持ち歸ることを忘れはしなかつたであらう。

John Taylor

これによつて英國に於ける煙草紹介者は、先づジョン・ハウキンズなりと云ひ得るのであるが、ジョン・テイラーが一六三五年の著「トーマス・パーの一生」の中にも、煙草は一五六五年ハウキンズによつて輸入されたことを述べて居るが、馬車が同時代に現れた事に關係さして、悪魔が煙草を馬車に乗せて持つて來たのぢやないかといふ様なことを云つて居る。

Dr. Brushfield

ブラッシュフィールド博士は更に「煙草は一五六〇年頃ヨーロッパに入つて來たものであるが、英國に知られたのはこれより數年の後である。即ち一五六五年サー・ジョン・ハウキンズは煙草の最初の報告をなして居る。實際彼が煙草を持ち歸つたか否かは不明であるが、恐らく持ち歸つて來たものとして誤りはないであらう。他の種類のものにはこれと別にスペインより入つたものがある」と云ふて居るが、スペインより英國へ煙草の渡つたのはすつとあとの話し

でジョン・ハウキンズと一五六五年といふことに對しては何等の脅威を與へるものではない。

エドマンド・ハウズの年表には更に、エリザベス女王の二十年(一五七七年)頃、杏、マスクメロンなどと共に煙草が輸入せられた時、サー・ウォルター・レイは人々が奇異の眼を瞠つて居る間に、眞先にこれを吸ふてあるいたとかいつて居るが、此のレイの喫煙は、その年代と共に記憶せらるべき事柄ではあるが、煙草の輸入年代のためには決して重要なものではない。唯こゝに事新しく煙草の輸入を記して居るのは、或ひは異種の輸入を意味するものであるかも知れないのである。事實新大陸への航海者の注意を惹いたのは決して一地方、一種類の煙草ではなかつたので、従つて英國でも異つた種類のものゝ異つた港へと持ち歸られた故に、年代記録に差異も生ずる結果にもなるのである。十六世紀後半に於て數種類の煙草が栽培せられて居つた事實は、この事を雄辯に立證するものに他ならない。

前述のメシアス・ド・ローベル博士等が、すでに一五七〇年になした煙草の植物學的研究は、先年ジョン・ハウキンズによつてフロリダから輸入せられた所のニコチアナ・ルスチカ種によつたものである。これに對してフランシス・

Nicotiana Rustica

ドレークが、最初の煙草を輸入したと稱するものも強ち虚説でもないのである。即ちドレークは一五七三年、西印度諸島より歸つたのであるが、此の地方にあつた煙草は、ニコチアナ・タバキウム種であつて、先にハウキンズを持ち歸つたと信ぜられるルスチカ種とは、その形體に於て大小あり、花の色にも差異があり、一見異種の植物と誤られた

Nicotiana Tobacum

のは、當時にあつては、まことに無理からぬ話である。これを煙草なりと稱すれば、さきにハウキンズが持ち歸つたものは、煙草に似た草であらうといふ風に考へられるのは當然である、況んやハウキンズの報告には「タバコ」の名は用ひてなく單なる一種の草 (a kind of herbe) と稱して居るから尙更の話である。

初めてタバコの語を用いた文献は、一五七三年のハリソンの年代譜であるといふ事實から見ても、ドレークこそ眞の煙草を持ち來つた最初の名譽を受くべきであるとするに至つたのは、まことに責むべからざる誤謬であらう。ドレークが持ち歸つた煙草が、西印度産であることはかのハクルートも認めるところであつて、「煙草の種子は此の國に西印度より齎されて、今はこゝに生長せり。此の草を用ひてリヨウマチを治せるもの尠からず云々」と述べて居る。西印度諸島の煙草は明かにタバキウム種であるが故に、ドレーク亦煙草紹介の名譽の幾分を要求してよからう。

一五八六年七月ラルフ・レインに率えられたヴァージニア殖民の一隊がプリマスに上陸した。彼等は何れも新歸朝の誇りをもつて、パイプで煙草のみ乍ら港の街々を濶歩した。このことは勿論一般のセンセーションを起さずにはおかなかつた。今迄煙草といふものの存在を知らなかつたわけでもなく、或は喫煙の繪を見た者もあつたであらうから（ビーナ・ローベル共著の挿繪の如き）、初めての見聞ではなかつたにせよ、事實眼前に口中より濛々と煙を吐き出すのを見ては、今更これに驚嘆したのは當然のことで、エリザベス女王の史學官、ウィリアム・カムデンは親しく此の様を目撃して次のごとく述べて居る。(History of the Most Renounced and Victorious Princess Elizabeth. 1615.)

「然して彼等はタバカ又はニコチアと呼ぶところの印度の草を持ち歸りし者の中、我の知る最初の人々なり。彼等はインディアンに教はりしまゝ是を用ひたり。その時よりして以來此の草は大いに迎へられて、價も中々に高値なり。然れども人々、忽ち至るところに、土製の管にて此の強き煙を吸ひ込み鼻より吹き出して貪り食べ、或は身體のためとなし、又は單に悅樂のために用ひたり。されば煙草屋は何處にても居酒屋の如くに繁昌せり、さる人英國人は蠻人の好むところを好み用ひて悦び、病を治すと信するを見れば彼等は蠻人の性質を帯ぶるに至るまで墮落せ

るやに思はると云ひしもことほりなり云々。」

かくのごとく、英國に煙草の用ひられたのは十六世紀の後半からであつて、その輸入の最も古い記録は一五六五年に溯り、ジョン・ハウキンス少將がその名譽を受くべきものとされて居るが、かくの如き個人的ヒロイズムの穿鑿よりは、むしろそれが如何にして大衆性を附與せられるに至つたか、誰が此の流行をリードしたかといふことが、より重大なる問題である。故にウォルター・レイ、リチャード・グレンヴィル等の名が喫煙流行の先驅者として、最も大きな興味と好意とを寄せらるべきものと見られるのである。

一六〇四年、國王ジェームス一世は、此の流行に對して、「煙草排撃論」なる一書を公にして敢然煙草、及び煙草飲みに挑戦した。これは英國煙草史上、最も華々しき頁を飾るべきものであるが、委細はあとにするとしてこゝでは唯その傳來に關するジェームス王の意見を述べる。

「此の煙草の愚劣にして根據なき渡來は最初の喫煙の腐敗せる野卑と一致するものなり。此の惡風の我が王國を侵してよりさして久しからざるものにして、それに関する最初の著者、最初の紹介の事情はすでに不明なりといふべき程のものに非ず、此の草を持ち渡れるものは國王にもあらず、戦ひの勇者にも非ず、又博學の國手にも非るなり。新世界發見の情報と共に蠻人兩三名を伴ひ歸りしが、憎むべき哉此の蠻人共は此の蠻風を伴ひ來れるなり。然して此の愚昧の蠻人は死せりと雖も、此の野蠻の惡風は未だ亡びず——否更に新しき力もて蔓れり。かくの如き蠻地より起れる習俗の、しかも彼の如く一般より嫌はれし人物によりて紹介せられたるものにして、尙ほかくの如く歓迎せらるゝこと、予にはまことに奇怪至極の思ひあり。」

ジェームス王の此の所論は、殆んど全部真違つて居るのであるが、唯こゝで王は煙草の傳來そのものよりも、一般より嫌はれし人物が如何に悪む可き罪を犯して平氣であるかといふ所を強調したのである。此の一般より嫌はれし人物とは即ち、サー・ウォルター・レイをさすのである。ジェームス王とレイとの交渉、英國の煙草史はこゝらあたりから興味多いものとなつて来る。



英國における初期煙草屋風景、左にあるは、インディアンのマネキン（フランスウエイットの〔喫煙時代(1617)〕より）

緋き煙草をのむといふ幽囚生活十二年、やうやくにして出獄は叶つたが、ジェームス王の憎悪は解けることなく、遂にイスパニヤ問題の犠牲となつて一六一八年十月ワイトホールで首を斬られて了つたのである。さもなくてさへ嫌ひなレイが、更にまた喫煙の蠻風を流行らせて、人を馬鹿にしたやうな煙の輪を吹いたりして

は一層癪にさはつたものであらう。遂にジェームス王は、有名なる煙草排撃論を公にされるに至つたのである。小心者のジェームス王としては、成程煙草も呪ふべき存在ではあつたが、その目的とする所はむしろレイにあつたのかもしれない。レイ以外の人によつて流行されたものであつたなら、煙草もこれ程に迫害されなかつたかも知れないのだが、何れにしても、ジェームス王とレイとは、よく／＼の悪縁でつながれて居たのだ。

だからジェームス王もその排撃論の中で、盛んにレイをあしざまにいふて居るが、レイは平氣で煙草だけは離さなかつたと見えて、獄中にも英國産の煙草を賞味して居た由であるが（ジョン・パーキンソンの著による）、更に「死刑執行の朝も死の一時前に靜に一服くゆらした」由である。當日の立合人、ウエストミンスター牧師長も、「彼は快く朝食をとつてから煙草を吸ふた」と述べて居るし、又ジョン・アウブレイは彼を辯護して云ふて居る。「彼は斷頭臺に上る少し前に一ふくの煙草を吸ふた。その時二三人の婦人がこれを罵つたが、これは彼の心を落ちつかせるに適當なものであつたと考へる。」

彼はかくして死んで行つたが、煙草に關しては何の文學的作品も残さなかつたといふ事實は、彼の心情の奥底に沁んで居た寂しさが思ひやられるやうな氣がしてならない。彼があともさきにも煙草に言及して居るのは唯一度、彼の不運であつた航海の決算に於てである。即ち「サー・レキス・スタクレイはプリマスにて煙草を盡く賣拂ひたり。余は彼の給料の代として、其の五分の一を與へたり、他に我が海軍部に一卷きを贈れる時にも彼に一卷きを與へ置きたり。余は彼がその煙草に關して説明を誤らざる事を希望す。」

レイがヴァージニアの物産視察の目的で派遣したトーマス・ヘリオットは一五八八年の報告に「其草は一部分自

生して土人は是をウボウラツクと呼べり。西印度諸地方にありてはその所を異にするまゝに、其の名も異れり。イスパニヤ人は皆タバコと呼べり、(中略)我等亦彼地にありし間其の風を學び煙を食へ試みて歸國後も續けたり。然してその不思議なる効能數多を認めたり。その事を詳述せんとならば又こゝに一卷をなすに足るべし。近頃に至りてその名聞ゆる男女の人々多く是を倣ひて博學の名醫亦尠からず、以つて證たるに足るべし。」とある。

ラレイはヘリオットの持ち來つた煙草を多く貯へ、自らのむは勿論、他人にも頒ち與へて居たのであるが、一六〇一年一月二十六日附、サー・ジョン・スタンホープから、サー・ジー・カールに送つた手紙の一節に「此度は煙草を送り難きを遺憾と存じ候、シクレタリ氏も、サーウォルターも他の友人も盡く、最近貴下に差し上ぐべき分を缺き候由に御座候。」など、讀まれる。

英國に於て喫煙の風を盛ならしめ、「優雅に煙草をくゆらす」ことが紳士の一條件とされるまでになつたについては、ラレイが與つて大いに力あるところと言はれて居る。彼の名は此の新しい風習と共に傳へられ、後世に至つては煙草の神様の如く崇められる始末となつたのである。彼が一日、安樂椅子に身をおとして靜かに紫煙の影にうつゝをぬかし、その芳香に蕩然として居た時、新參の召使が立のぼる煙を見て、主人の頭が火事だと思ひ、水をぶつかけたといふ様な底の見えたユウモアも當時の「たばこばなし」の一つであつたのである。

當時は、英文學史上にもたぐひなき絢爛の色彩に輝き、燦然の光を放つて、後世是を望み見るものをして眩惑せしむるに足るものがあつた。即ちスペンサーがその仙女に於て新しき詩の世界を開拓したるに初つて、大シエークスピアの出現以下、大小の文人騷客は、宮廷の生活を背影として百花の燦爛たる有様を呈した。グリーンは南歐の野に

羊追ふ青年の褐色の膚に心をおどらせ、倫敦のちまた、悲戀の乙女に涙をながし、マアロウはその血を奔放なる瀧とたぎらせて意氣天を衝くクマレイン大王を世に送り、ジョンソンはその縦横の才筆に世態をうつして遺憾なく、シエークスピアと並び稱せられ、フレツチャールはポーモントと共に人氣をあつめ、ベーコンよりブラウンをへてミルトン・ドライデンに至るまで、更に *etc.*、*etc.* に至るまで實に迎接にいとまなき目まぐるしさであつた。我がラレイは此の間にあつて右手のペンこそ二流なれ、口にくはへたパイプは實に「文學以上」のものであつたが故に、彼は一流文人の地位を與へられて居つたのだ。

Maiden Tavern
彼等は居酒屋人魚亭に夜な／＼集つて文藝を論じ、人生を語り、コップを振り廻して喧嘩をして居たのである。

リエウスの神はいつでも若い
ほめてたゞへてさうして歌へ

元氣あふれる葡萄の血潮

十の象も眞赤にあびて

躍れ酒樽ふちの上

泳げ眞紅の酒の中

聖く豊けきその手から

酒の流れをせき下せ

若さの神よ今日こゝは

怖れも憂ひも眞平だア

フレツチャーが酔つぱらつて、テーブルの上に吐鳴り出すと、片隅には泣上戸のボーモントが、蠟燭の火影にピールの泡の憂鬱を見つめ乍らジョンソン相手にくだをまいて居る。

星が隕ちるやうに

又鷺が飛ぶやうに

又清い泉の色のやうに

又朝霧の銀の雫のやうに

又流れの上を吹き過ぎる風のやうに

流れに浮がうたかたは且つ消え且つ結んで

此のビールの泡だつてさうだ、

人間だとしてこれと何かはらう。

ジョン・リ、は又女を相手にして、極上の酒が最も酸っぱい酔になると同様、最も深い愛情は又最もはげしい憎悪に變りやすいものなんだぜ」などとやつて居る。グリーンは又こゝは俺の天下とばかり特色を發揮して落ちついて居る。

足ることを知る思ひはよし、

静けき心は王者の冠にまされり、

憂ひなき熟睡の夜こそ嬉しけれ。

チョツ。フレツチャーの奴八釜しいなア。

などと獨言をいふて居ると、あつちの隅では、ナツシユと誰か掴み合ひを初めた。仲好しのグリーンは王者の冠もかなぐりすて、飛んで行くといふ騒ぎ。

この人魚亭の夜は正に十時。我が二流の文人レイは一流の誇りを口にくわへてやつて来たのである。英國の文壇初物食ひの名譽を負ふ彼は、今夜連中をアツと云はせてやらうとてやつて来たのだ。従つて彼の氣煙は當るべからざるものであつたが、流石に當時の紳士だけあつて静かに入つて来て、さてジョンソン——彼が一番酔つてない様だつたので——に近づいて

「一服いかゞ？」

とパイプを差し出した。リリは警句をすてて乗り出して来る、フレツチャーは吐鳴るのをやめ、ボーモントは泣くのを忘れ、グリーンもナツシユも喧嘩を忘れて集つた。さうしてジョンソンの一服を次から次へと廻した。(此の時こゝにシエークスピアの居なかつたのは後世永久にあきらめ難き遺憾事であつた。)

やがてジョンソンは立ち上つた。

「アダムの園に葡萄が實つてより、酒は人類に缺く可からざるものであつた。パツカスは永遠に讃へられてあれ。然して永遠に青春であれ。更にこゝに新しく神の恵み給ふところのものを稱してタバコといふ。これぞ我等が地上に得たる最も甘美、最も高貴しかも素晴らしき極みなるもの一つたるを失はない。レイ君が何處から見つけて来たかは問題ではない。認めなければならんのは實に君が持つて来たといふその事である。我等はこれによつて更

に人生を享樂し得るであらう。新しき世界の發見によつて此の草は知られたものであるが、我等は此の草を知ることによつて、更に新しき世界を發見するに至るであらう。我等の生活の内容は今後數倍の豊富さをもつて發展して行くであらう、されば此の草の前途に祝福あれ、酒と共に永遠の讚辭をうけよ、更に此の草を持ち來れるラレイ君亦永遠に感謝されてあれ。」

と祝福感謝乾杯して、煙草とラレイの萬歳を三唱して感銘ふかい歴史的一夜を飲みあかしたが、彼等がみんな酔ひつぶれて了つて、その時のありさまを書き残した者が一人もないといふことは、かへすくも遺憾の極である。

然しジェームス・バリーにきけば、當時を讚へるの言、まことによくその肯綮にあたつて居る (My Lady Nicotine)。
「エリザベス朝時代ひとり、英國史上擢んで華々しき事業、貴き文學に富める所以のものは何ぞや？ 吾人はすでに昨日及び今日の思想家、歴史家、又批評家の群が如何に此の問ひに答へたるかを知れり。されど、吾人の理性と感情は彼等の迷ひ居るものなるを訓ふるのみ、彼等の驚くべき不注意は彼等をして煙草の影響に關して何等の言及をもなすに至らしめ居らざるなり。エリザベス朝はむしろ喫煙時代の初期とも稱すべきものにして、若し何等の偏見なきものならば、我等の歴史をむしろ喫煙以前、喫煙以後の二期に大別するの適切ならざるやを問ふべし。ラレイの名譽のためには、英國はまさにその名を改むべかりし程のものなり。事實、ラレイは煙草を此國に齎し、かくて華々しきエリザベス朝は展開せるなり。吾人は、英國は煙草の輸入によりて、その永き眠りより醒めたるものなることを信す。」

バリーの言ふところ、あるひは文明批評家の嘲罵をうけ、あるひは藝術至上論者を逆上させるものがあるかもしれないが、必ずしも單なる煙草狂の暴論とは云ひがたい。他日世界の海軍國たるべき基礎は此の時すでに、ハワード、ドレーク以下によつて固められ、東方に於てはその雄圖よく東印度會社の成功となつて現れて、百年の大計こゝに定まるに至つた。内にはシェイクスピア、ジョンソン、スペンサー、ベイコン等あつて、エリザベス朝文學に不朽の桂冠を戴かせた。

これひとへにタバコと云ふ印度の草の力によるのである。當時の文豪英雄ひとしく煙草を嗜んで——シエクスピアは煙草を嗜んだとは云へないが、然し全然のまなかつたとは勿論云へない、多分のんだ事はあつたらう——偉業を後世に誦はれるに至つたのである。

しかし乍ら、人は足があるが故に立つのではなく、大地がこれを支へてくれるから立つて居られるのである。英雄は決して一個にして英雄ではあり得ないので、これに聽きこれに従ひ、集り來つてこれを支へる大衆の力によつてこそ英雄たり得るのである、つまり英雄とか偉人とかすべて傑出した人物とは、如何にして大衆の支持を得るかといふことをよく知つて居る者の中から生れるのである。ギゼのピラミッドは決してクフ王一人の手に成つたものではなく、百萬の民衆が幾十年の協力の結果であり、アレキサンダーの偉業はマケドニア軍隊の勇氣と訓練に依存し、ハンニバルは尙ほ三萬の兵力の支持を得たが故にアルプ越えの壯舉に成功し、ローマ法王朝の妖權は愚昧なりと雖も、夥しき狂信者の群によつて支へられたものであるし、アツチラ大王歐亞の覇業はフン族百萬の精悍によつて遂げられ、ナポレオンは全くフランス國民の信仰的支持によつて初めて英雄の名を擅にすることが出來たのである。

エリザベス朝の文學事績と雖もまた同様であつて、當時の英雄、豪傑、文豪、論客、如何に頑張つたところでこれ

を賛し、これを支持し、これを助ける背景がなければ、彼等の成功は不可能であつたわけである。つまり彼等が如何に煙草によつて靈感を得、新しき力を得て活躍するとしても、もし大衆にしてこれに反響共感するところがなかつたらば、畢竟それは暖簾に腕押しであり、手がかり足がかりのない木登りである。然して大衆の支持共感を得るためには、少くも兩者の間には何等かの一致點が存せねばならぬ。即ち煙草によつてインスパイアされた明敏の才、豪宕の膽を迎へるところのものは、また煙草を理解するところの大衆の中にのみあらねばならぬのである。

祝福すべきことには英國はすでに此の好條件を具備して居たのである。もし煙草が單に宮廷のスカート襟飾にのみ獨占されて、一般大衆を拒んだとするならば、一七世紀の初頭、早くも労働黨の出現となり、ユニヴァーシティ・ウィツツの一團は、新興プロレタリア文學の牙城に立て籠つて、敢然宮廷文學に對抗したかも知れない。然しすでに十三世紀の初にマグナカルタによつてその力を示し得た大衆は、煙草の初夜權と雖もまた、これを宮廷貴族の獨占にまかせはしなかつたのである。西印度に渡つた無頼の水夫達こそ英國最初の喫煙者であつたのだ。然して英國國民の名に誇る大衆亦河を決するがごとくにして煙草に親んで行つたのである。

すでに大衆の勢に至れば國家の大業、文學の隆盛期してまつべしである。一六一四年版「最高至上の王者の忠良なる奴僕バルナベ・リツチ・ジェントルマン著、過去の世界が決して正直ならざりしを證明せる現代の正直論」をその題名に怖れることなく讀んで見ると、煙草を愛用した當時が如何に正直であつたかの證明のために、まづその商況が述べてある。

「酒場に入りて直ちに酒を求むるほどの卑しきものは車夫、馬丁にもなし。先づ入り來らば一服の煙草を注文すべ

し。蓋し今や酒場に於ても宿屋にありても又ビール屋にても、煙草は葡萄酒、酒、麥酒のごとく賣られたればなり。藥種屋にも食料品屋にも雜貨店にも此のものありて朝より夜にかけて買求められたり。家を持ち店を張りて煙草を商はざるもの他に幾何ありやと疑はるゝばかりなり。最近ロンドンの内外に新に開かれし店にして煙草を商ふところのみを記せるものを見るに、七千戸の店はこれによりて立つと信ぜらる。藥種屋、食料品店、及び雜貨商亦此の中に數へられたるものなるや否やは斷定しがたきも、假りに然りとせよ。然して更に觀察を進めて、此の煙氣の中に幾何の財の消ゆるかを見よ。もし傳へらるるごとくロンドン市の内外にあつて煙草を供給する店七千ありとするを真なりとせんか、その一戸につきて一日平均五シルリングの商はなくとも、一日の收入二シルリング半を出でざる時は、地代も拂ひがたく、ロンドン市中如何なる小路にても如何なる隅にても店を張る能はざるべし。されば吾人の計算によれば一日三五〇〇クラウン、一年正に三一九・三七五ポンドの巨額に達すべし。總計皆けむりのみ。煙草は當時にあつては、なか／＼の高價ものであつて、アウブレイも、百姓がマームスベレイやチペナムの市場へ出た折には、煙草の目方と同じ丈の銀貨を拂はねばならなかつたと言ふて居る。我が朝鮮でも煙草の渡つた當時は同じ目方の銀と交換された由である。

エリザベス女王は、ヴァージニヤから輸入される煙草一ポンドに付二ペンスの税を課したに過ぎなかつた。しかるにジェームス一世は一六〇四年、彼の「煙草排撃論」によつて、*Commissio pro Tobacco*なる令を出して、是を六志十片にあげたといふのだから一躍四〇〇割の増税である。これがために、殆んど輸出煙草のみに經濟を支へて居たヴァージニアの殖民地は全く荒廢に歸せんとするに至つた。一六一一年にはヴァージニアから本國に輸入された煙草

の量は以前の六分の一に減じて了つた。

無論、國內の喫煙者は困却もし、憤慨もしたが、それより當のアメリカの殖民達は、本國への輸入の道をかく阻まれては、死活の問題となつて來た。アメリカ獨立の端緒はすでにこゝら邊に培はれて居たのであるが、やがてワシントンの出づるに及んで俄然その鬱積は爆發したわけである。

ところがこゝに我々の興味を惹くのは、デューヂ・ワシントン自身がヴァージニアの百姓で、煙草を作つて居たことである。さうしてそれをプリストルの帝國煙草會社に納入して、生活の資をかせいで居たもので、現に一七五九年十一月二十五日附、彼が同會社に宛てた手紙には、彼がジョン・カスチスと共同で、五十捆の煙草を發送したことを述べ、更に間にあへばもう十捆や二十捆は送るつもりであると附加して居る。

苟もアメリカ合衆國最初の大統領たるべき男が、自分の利害から打算して、善良なる民衆に對して、叛逆のデマをブツ飛す様な人間だつたといふ意味でワシントンを引合ひに出すのではさら／＼ないが、それでも彼が親しくやつて見ての葉煙草作りの結果が、更に英本國に對する反抗意識に一段の拍車をかけるに全然役立たなかつたとは何人が斷言し得るか？

ジェームス王はかくの如くにして、アメリカ殖民を苦しめたが、又國內にあつても大衆の反感をあふるに足りる事のかす／＼を行つて居つた。しかし、このジェームス王以下の反煙草派が煙草に對して加へたところのあらゆる迫害は、むしろ當時の文化に貢獻するの結果をさへ残して居る位である。即ち煙草の刺戟によつて文學、醫學の方面に注目すべき作品、研究が續々と現れたことは、この際ジェームス王の心事に思ひくらべて、いさゝか皮肉なるバラドツ

クスといふ感がないうでもなし。

John Frampton

一五七七年、ジョン・フレンプトンは、イスパニヤのモナルデスの著述を翻譯して、諸病に對する煙草の用途を明かにした。當時の醫師はみな此の草を分析研究して萬病に特效あり豫防藥として用ひても、可ならざるなきを確めたといふことである。然してこのセヴィラの醫師の名はタバコといふ文字と共に、當時の英國の藥局の藥壘に貼附されて殆んどあますところなく、あらゆる患者にすゝめて躊躇しなかつたのである。

煙草の効を謳つた二大詩人を、早くも一六世紀の末に見出して意を強うする者は、嘗に彼等竹庵箱庵の輩のみでは

Edmund Spenser (1552?-1596) Faerie Queene

なし。エドマンド・スペンサーの仙女王第三部にベルフェーブがテイメスの傷を治すために、藥草を探すところがある。

君が傷手をいやすべき

効ある草を求めんと

森の中にぞ走せ入りぬ

幼時ニムフのふところに

清く氣高く育てられ

藥草あまた知れるなり、

煙草か蓼か、靈草を

胸の血潮に倒れたる

いとしき君に持ち来る

煙草が血止めの効あることは一般にも認められるところであるが、此の詩は又英文學に於て煙草をうたつた最初であるといふ點に於ても貴重である。ユーフィーズの著者ジョン・リリは、當時の宮廷詩人として戯曲家として、又喫煙家として有名であるが、その喜劇「月の女」の中に、バンドーラが槍をあやまつて戀人に傷を負はせる。

持つて来てくれ匂ひのすみれ

そしてたふといニコチン草も

それと一緒に蜂蜜も

妾の負はせた傷のため

と大騒ぎをするのも、煙草が血止として用ひられたことを示して居る。ベルフェーブの場合はほんたうに眞剣だが、バンドーラはこんな危急の場合にも矢鱈に形容詞をつかつたりして、何か嘯煙草でも作りさうである。

Raphael Holinshed? - 1589?

しかるにラファエル・ホリンシェツドは、生れた年も死んだ年もはつきりせぬが、いふこと丈けははつきりして居る。「近頃煙草の効用を讃ふることなみ／＼ならず。されど我等が見るところ、或はその使用の法を誤れるや、又所によりてその効を異にするものなるや否やははかりがたけれども、先づ彼等の述ぶる程の偉功あるものとはおぼえられず云々。」

Sir John Davis

シエクスピアー以後の詩壇に、幽玄流麗の筆をもつて知られたジョン・デヴィスも

ホメロスはモリイと無憂華を讃へぬ

モリイは神の聖く尊き草にして

ヘレンの飲める無憂華は歡びを興へ

胸の憂ひを消し去りて智をみがく

されど我等は今新しき世界を見出して

天上の効ある草をもたらしぬ

モリイも傷にはさして効なし

無憂華もかほどの不思議はあらず

そは煙草、その匂はしく和める香り

悪魔の如き齒痛も鎮め

鼻の病ひも根治して

萬病看護の母と謳はる

私が譯したのではどうもうまく出来ないが、大體こんな意味である。モリイといふのは、白き花黒き根の草で靈驗いやちこなるものゝ由であるが、それでも無憂華でも、出血や、虫齒や鼻風邪にはきかないといふのだから、以つて煙草の靈効を知るべきである。

戯曲に於てはシエクスピアーに次ぎ、詩才にも富んで居つたジョンソンの諷刺劇「なくて七辯」の中に、ボバディ

ラが煙草の藥効を論じて居る。

Every woman in her Humour (1597?)

「されば貴殿、拙者の申すところをお聞き召されい、拙者は此の草の生ずる印度へ行つて参つてござるが、拙者を初め十数名、彼の他にありし五ヶ月間、煙草の外は何も食べいで過したで御座る。さればこれが世にもすぐれたる草なることは否定しがたきところで御座らう。更にその真正のものをそのまゝ用ふる時は、解毒のはたらき見事にして、貴殿がよしフロレンス第一の毒草を飲まれやうとも、直ちに解して安慰なること、拙者毛頭いつはりには申さぬ。まつた貴殿の生傷にはバルサマム特にトリニダドを試みられよ、ニウコチアン亦よろしう御座る(註、共に煙草の種類)。鼻風邪、悪寒、消化不良其他千餘の病をのぞく此の草の徳を拙者熟知致し居ると申すべきか。さればとて拙者は決して山師醫者の味方では御座らぬことを誓ひ申す。唯かくのごとくであるといふ丈けのことでは御座る。ヘルクレスの力をもつて主張ないたし、ヨーロッパ何處の國の王子の前にも、煙草は最も靈効あり、最も高貴なる草にて今迄用ひられてこれに及ぶものは地上に且つてなかりしを確言いたす御座らう。」

と息もつかずに述べ立てると、片方からコブが出て來て反對する。

「神かけて言ふ、拙者は此の無頼の煙草をのんでよろこぶ輩には泥をぶつかけてくれる所存で御座るぞ。煙草の何處がよいと申されるか。人をむせかへらせて煙でいつぱいにする外には、何の益があるので御座る。現にそれ先週も煙草を飲んだばかりに、一軒で四人の葬禮を出した所も御座る。昨夜も昨夜とて二人倒れて一人は絶望の由で御座る。そ奴はきのふその煤の一俵をきれいに空にしたので御座る。されば拙者ほどに先見の明あるものは先づなしと覺える。男女を論ぜず、煙草のパイプを手にする輩は、早晚硬直になりおはるものと存じ申すわい。かやうなもの、鼠の骨よりどれ丈けましたと申されるか？」

とこき下すあたり、煙草渡來によつて惹起されたセンチシオンを物語つて興味すてがたいものがある。

一六〇二年、「煙突掃除人に與ふる書、又喫煙家を誡むる書、煙草の毒を論じて讀者に興味と利益を與ふ」といふ本が現れた。著者は匿名でフィラレテスといふのであるが、多分ジェームス王の廻し者、その手先きとなつて動いたもの、仕業と考へられる。彼の煙草反對は大體八ヶ條より成るが、その重なるものは、煙草最初の發見者及び著述者は悪魔なる事、及び最初の使用者は悪魔の使者なる事、さればその故に彼等クリスチャンのもつて取らざるところである事等である。

別に何の新しい所もない平凡なものであるが、當時ではキリストは最も尊く、悪魔は最も恐る可き對象であつたので、これさへ出せば、一般にふるへあがつたものである。だからこの悪魔の手はよく利用されるのであつてセヴィラの醫師で、煙草の最初の研究者であるモナルデスも、「夫れ悪魔は欺瞞者にして、千種の効を知れるが故に、彼は此の草の徳を印度人に示して、是によりて夢幻のすがたをまのあたり見るを得べしと欺きぬ」といふて居る。ジョンソンの作品中にも悪魔の草と罵つてあるが、ジョシユア・シルヴェスターに言はせれば、「地獄では悔ひ改めざる煙草香みを煙攻めにする」由である。

ジョンソンあたりに「つひどくたゞきつけられても、「おゝ快き満足よ」などといふ詩を作つて居た。トーマス・デッカー(1570?-1641?) The Gull's Horn-Book (1602)の「鷗の嘴」の中で、煙草に呼びかけて居るのがあるが、これは少し揆つたものだ。「私をあなたの息を繼ぐべき嗣子にして下され。その時私はあなたの徳を世界中にひろめまして、とりわけ空想的な英吉利人を、あなたのトリニダッド巻きや、葉のまゝやブデンになつたのを見分けるのに、白い齒をしたアジアの黒ン坊よりすつと上手にさ

して御覽に入れます」などと。

ジェームス王が一六〇四年「煙草排撃論」を出したことは、あまりにも有名な話である。王はその名を出さず、唯キングとかいてある丈けである。これはジェームスの名を出すとすぐジムの野郎などとスライトされるおそれが多分にあるので、こゝに神につく至尊の名詞キングの一字を用いたのである。煙草黨は如何に激情を發するとも、王者を罵ることはせまいであらう。まして英國國民の禮讓はわづかにストライキング (strike king) といふやうな言葉しか持ち合して居ないのである。

然し乍らその名の如何にかゝはらず、このジェームス王のパンフレットは、無敵艦隊の來襲につぐほどの大きなセンセーションを惹起して、輿論は轟々として渦を卷いた。さうしてその轟々の怒は、皆これ全大衆的反對のそれであつたのである。ブラツグ氏 (J. Bragg) (Philologia Nicotina 1880) (J. Bragg) によれば、「彼は人間の強き慾求の一つに勇敢に突きかゝつて行つてベクリとその槍を折られた最もドンキホーテ的の男」なのである。非難は理解の努力を必要とせずして放たれる。彼ジェームスもまた、これが理解なき非難をなして得意であつたのだ。

D. G. Swinburne スキンバーンの言ふところを何等の誇張なく、極めて忠實に原文のまゝを紹介して見ると「ジェームス一世「悪漢であり、暴君であり、愚者であり、嘔吐きであり、臆病者である。がしかし私は彼を愛し彼を尊敬する。即ち彼は此の汚らしい喫煙の風を發明したところの下郎ラレイの咽喉笛を切つたからである。」

これではジェームス王、得意になつてよいのが消氣てよいのか迷はざるを得まい。いや實を言へばスキンバーン、如何に彼が嫌ひな煙草を流行らせた故に嫌ひなラレイを死刑にしたとは云ふても——ジェームス王は結局、惡漢で暴

君で愚者で嘔吐きで臆病なのを認めるといふ事になるのだ。

然し純情正直の美德を有するすべての愛煙家諸君には、常に何等の偏見をも許されては居ない。器は空なればこそ盛ることが出来、空には遮るものなきが故に、大鵬千里の翼といふことがある。だから正しく理解し正しく行はうとするならば、宜しく虚心坦懐何等の偏見も交へない純情の虚をもつて對すべきである。如何なる排煙家の暴言と雖も先づ靜かに聞くの雅量は失ひたくないのである。ジェームス一世といふとすぐ、嘲笑筋をパイプの吸口のあたりから動かし初めるのは、決して教養あるタバキヤンのなすべきことではない。

しかも彼ジェームス王、愚直なりと雖もその排撃論には國家を愛し國民を思ふの情、敬神の念と相まつて純真見るべきものがないとは言へず、その文化史的價值もまた乏しくないとされるに至つては、その情熱の發するところや、詭激に走つた思はれる點がないでもなからうが、正に一顧の價值は否定できない。

「喫煙の惡風の様々なる濫用を更によく究めんためには、先づその起源と共に、その最初に我が國に入り來れる原因を考ふるをよしとす」といふところから初つて、神聖にして名譽ある土地から有徳の貴人によつて紹介された淳風美俗が、又常にすべての貴婦人や有徳の人々によつて尊敬されて居るといふ様な場合は、全く正反對に、腐敗墮落の根據による喫煙の惡風が、考へのない子供じみた模倣から此の國に入つて來たことを述べて、更に

「然して又我が善良なる國民よ(庶幾くは)熱慮せよ。そも如何なる名譽、如何なる政策が彼等を驅つて、かの粗暴にして神を有せざる奴隸的印度人の畜生にひとしき生活、特にかくの如き惡臭を放つ風習を學ばしむるに至れるかを。吾等(最初のキリスト王國の體を具へし)隣國フランスの態度を學ぶをいやしとなすや。吾等(土耳其古大帝國

にも比すべき領土に王を戴く)イスパニヤ人の精神に堪へずとするや。更に言はん、吾等今日に至るまで久しく、平和の間にありては禮讓にして富裕、然も戦ひに於ては勇名轟きてその敵なく、常に幸運に恵まれ、何時にても隣人を助くるに吝かならず、(さればとて援助の申し出をもつて他の耳を聳せしめたることゝてなき)我等、敢へて愧づるところなく、自ら墮してスペインの奴隸にして世界の殘滓且つ又神聖なる神の誓約より遠ざかれる獸のごとき印度人の風を模すべしとなすか。然らば何故我等は歩行の際も彼等のごとく裸形となることをせざるか、何故に彼等の如く黄金と寶石よりも、ガラス玉を好み羽毛を喜ぶの風をなさざるや。否我等何故に彼等のごとく神を否定して悪魔を信奉するの事をせざるや？」

國家の見識のために、此の蠻風をすて、フランス、スペインにならへといふあたり、當時の國家思想、對外の面目など我々を微笑させるものがある。彼は更に追及してその藥効あらたかなることを、透徹せる理論をもつて否定し、畢竟これ先人の書に残る非合理的諛辭を盲信せる結果と斷じて居る。「もし彼等にして、自らの體驗によりて、煙草が一部の間に喧傳せらるゝが如き靈効なきものなるを知る可き時には、かほどまでに此のものを讚ふるに至らざりしものならん。」即ちこれは單なる模倣流行の結果と見たあたりは、中々の卓見、いふべきであらう。

「他の爲すところ盡くこれを模して行ひ、他の爲す所我亦能ふてふ事を證して、猿猴のごとく他の行爲に對抗して、自ら破滅に至るも知らず、心中足れりと喜ぶもの、畢竟これ、萬人の心中にひそむ自愛の本能、内に育まれし羨望心の腐敗の結果に他ならず。」

といふのである。更に病に効ありとするが如きは心理的欺瞞に陥られたか、又は原因結果の錯誤顛倒によるものであつて、人死すべき時の他はどんな病氣だつて癒るものである。偶々此の時煙草を喫してもとの健康體となつたやうには見えても、煙草をのますとも癒るべきものは癒るので、死すべき病には結局何にもならぬ話である。煙草に治病・起死回生の徳なぞはないのであつて、むしろ煙草の飲み過ぎによつて死ぬ事がある位、こんな時でもなほ、喫煙家は他の何等かの病に此の死の責任を負はせる氣かと論じて、浩嘆して居る。「あゝ萬能の力ある煙草よ、もしまことトピアスの魚の煙のごとく(信すらくはその臭氣なほ煙草に劣れるもの)悪魔を逐ふべしとせば、なほ迷信の牧師、不遜の清徒にも魔除けの聖物たるべし。」

更に喫煙の道德的非難に移つて、煙草飲みは飲酒とすぐ隣りつゞきの罪惡を犯して居るのであつて、情慾煩惱にとらはれた墮落者故、兵役に服することが出来ぬとて極力攻撃して居る。

「我等の祖先が光榮ある戦勝に於ては、今日迄タバコの言葉すらなかりしものなり。もしそれひとたび事ある時に於て、一服の煙草を吸はんが爲めに戦友の背後にかくるゝ隙をうかどふ如くんば、何をもつてか敵を破るべき。我等はかくの如き者の前に、如何なる災禍の起るともあへて悲しむ所にあらず。再び逃れ難き習慣ともなるべきものに親むは何處の國の民にも最も害多きものなり。」

「更に此のものによりて如何に國富を浪費し居るや、此の國の紳士の計算をもつてすれば、一年三〇〇ポンド乃至四〇〇ポンドの黄金を此高價なる煙に費すものあり。かくの如きもの、更に有用の使途あるべしと思はるゝに。」更にこれを嫌惡する善良なる紳士の出席せる食事の席にても、喫煙するの風が流行るのを難じては居るが、滔々たる大勢は、濛々たる紫煙をあげて阻止しがたく、遂にはその欲求もない者にまでも吸はせる様になつたのである。そ

の原因は、ジェームス王に言はせれば、「彼もまた大勢より獨り離れて變物と見らるゝを好まず、且つ我といへども此風に親しめざることなしとする半意識的半無意識的自己主張、示威行動を以つて好まざるを嗜み、更に悲しきは喫煙者の前にむせざらんとする練習のために煙草をとるに至る」ので、それは結局いたましい自己防衛に他ならないといふのである。

つまり賓客に接してはその禮をつくす前に先づもつてパイプ片手に泰然とかまへて見せねばならない。パイプによつて、威嚴を代表して貰つて、さて然るのち紳士が喋り出すといふ順序になるのであるから、煙草を奨められてとらぬ様な奴は紳士道を解しない田舎者とされるのである。これはひとり男性の間にのみ止らず、婦人の間にあつても通用するので、「一人二人の御婦人も一服二服を私の手よりおとりなされてお褒め下された」(デッカーのサチロマス)といふ有様である。

だからジェームス王はます／＼躍起になつて、「反逆者よ、呑ばしき人のいぶきは神の恵み給ふところなるに、いたづらなる心異教の風を學びて惡臭ある汚惡の草の煙をもつてこれを漬す」と罵つてもきかぬと見るや今度は、「更に夫はその愛する妻の白き齒、朱き唇を惡魔に委ねて、醜惡嫌惡のものたらしめて愧づる所なきか。かく妻を汚して自ら責むるところなきか」と攻撃の手は搦手へ廻る。

「かくの如くにして尙ほ此の惡徳を離るゝの心なきか、不潔なる奇習、その原初に於ては神なく、その輸入にありては下劣、その使用にあたりては誤謬、一つとしてとるところなきこのものを棄てずして愧ぢなしとするや。神を欺き、身を汚し、人をも財をも損じて虛榮の烙印を残す。異邦の文明には嘲けられ、他國の人々には難ぜらる。その

風たるや見れば忌はしく、嗅げば嫌はし。腦を害ひ肺を損す。然してその濃煙は底しらぬ地獄の穴のそれを思はしむ云々。」

かうして言々々々肺腑を抉るべきジェームス王の排煙論は、何の共鳴も民衆の間を得るところがなかつたのみか、煙草の流行ます／＼さかんとする傾向であつた。更にケイネル博士との立合演説において、完膚なき迄に打ちのめされたジェームス王は、その無念のやり場所を煙草の輸入税にむけるといふ、陰險惡辣の手段に出ることになる。

さてその翌年一六〇五年、牛津大學の碩學ケイネル博士は奮然パイプ片手に颯起して、ジェームス王に對して、立合演説を申し込むに至つた。ジェームス王もさるもの、得たりやおうとばかりに承諾して、こゝに政治の最高權威と學界の重鎮とが、舌端火を吐き煙を吐いての大論争とはなつたのである。此の事件は、故に一七世紀初めの英國に於けるセンセーションを獨占するの觀あり、上は明眸白膩、楚々として裳を引くところの宮廷の佳人より、下は褐色頑健、くろがねの如き勞働者に至るまで、ひとしく此の論争に湧きかへる有様である。此の年、遠き極東の日本では、長崎櫻の馬場に初めて煙草の花が咲いたのであるが、思ひ合せて又感なきを得ないではないか。

論争の場所は宮庭の大廣間、ケイネル博士もとより公開を希望して、能ふ限りの傍聽を許したので、此の歴史的の大討論をきかんものと集り來る紳士淑女は室に滿ちて溢れるの盛況を呈するといふ有様。一段高くジェームス王は原稿を丸めて、緋のガウン、白き襟飾りに昂然と立つ、ケイネル博士はやゝ離れて設けられたる壇上に相對す、博士は黒色のガウンに銀のパイプを片手にもつて、天晴れ一國の王者を相手として大衆的聲援のもとに、煙草の爲めに戦はんとするの氣慨悔りがたく、精悍の氣眉宇に漲つてたのもしき極みである。

居並ぶ紳士淑女の間には、脂粉の香りなまめかしく、功臣名流の間には又自らなる氣品が漂ふて居る。ハクルート、ダニエル、カムピオン、フレツチャー、ボームント、ジョンソン等文壇の大類もずらりとならび、ペーコン亦美服に東洋の香料を匂はせて居る。放蕩兒デツカーは又宿醉と見えて姿を見せぬし、シエクスピアの丸い目玉の見當らぬのも物足らぬ。然し何より遺憾なのはラレイが居ないことである。彼もしこゝにあらば、ケイネル博士の聲援だけでは齒がゆくて堪らず、或は博士を退けて、自らジェームス王に喰つてかゝつたかも知れないのだ。さうしてあのマツフのやうな煙草入れから、パイプを引つぱり出して、ジェームス王に對して、スライトをやつたかも知れない。然し悲しいことには、彼ラレイはすでにロンドン塔内で、高い窓を低いところから仰いで居たのである。

ケイネル博士は昨年出版された王の煙草排撃論についていち／＼痛烈な質問反駁をして行く。

博「王は印度を目して野蠻未開の裸國なるが故に惡魔の國、神なき所と罵り給へども、我等の研究推理するところによれば、彼等もまた天を崇めてこれに奉仕せり。その祭祀のさま、偶々我等と異りて幼稚滑稽なる點なきにしもあらねど、その稚拙の中にこそまことに神を畏れ天を敬ふの純情あるにあらざるか？彼等亦神の子と稱するに決してクリステンダムの人々に譲るものに非ず。彼等の信仰には毫末の虚偽もなし、然して彼等は神の命するまゝに、自然に生きて此の草を用ふ。王は如何なればこれを學ぶ者もまた異教の徒なりとはなし給ふや。まことに王の言ひ給ふごとくに、我等と神を同うせざる輩の風に倣ふものは、直ちに異教野蠻の徒となすとせんか、然らば王みづから場合は如何？ その白き絹の襟飾りはキリストの敵、異教の國東方ベルシアの沙漠をこえて來れるもの、まつた王の穿ち給ふ靴にても然り、そは新教を奉ずる國の新教を奉ずる民によつて作られしものに非ず。その小羊の皮は

中央アジアの高原に、魔法と妖術とを以つてきこえし蠻國より來れるもの。是を身につけて自ら責むるところなく、然も恬として我等が主の守護し給ふ大英帝國の王座に君臨す、王心に問ふて責むるところなきや？」

王「予は決して愧づる所なし。予の身につくるものは、今にして新に成れるものにあらず。幼時より用ひて變るところなかりしものにして、然も宮廷の僚臣皆此の風をなして、いまだ嘗つて主の叱責を蒙れることなし。主は何等責め給ふところなくして、予を王位に即かしめ給ふ所以のものは、主これを認め給へばなり。主もしこれを怒り給はばなんぞ予を此の地位に許し給はんや。身は常に神に奉仕する僧正の袈裟といへども、その聖匣を飾る寶石と雖も、又卿の所謂異邦の産たり。然して神はこれを嘉し給ふ。此の點につきては、予はあへて卿の非難を受くべきにはあらざるなり。然るに彼の憎むべき煙草は、いまだ我が主イエスの認め給はざる蠻國の妖草、生ずるところは主イエスも拜せざれば洗禮も受けず、されば死して昇天することなく、直ちに墮地獄の呪ひをうき裸形の國。もし卿の如くんば、直ちに東方の妖術をもつて我が主を汚し奉り、その衣をすて、裸形となり、惡魔の申し子たる怪鳥の羽毛をつけて三つ目の神を拜すべきなり。恐るべき反逆、惡むべき背信、我等神の子の口にするだに汚惡を感ずるところ。あゝ神よ願はくは我が口を淨めさせ給へ、アーメン。」

博「理論に於て感情をまじへ給ふは卑怯でござりませう。我等あく迄堂々と論争いたす所存故、兎角信仰の問題に流れやすきことはこれを避けて更に問ひ申す。王の云はるゝには、單なる流行、自己の虛榮、模倣の本能よりして、喫煙の風盛となれる由にござりまするが、是、謬論の甚しきものに非ざるか。もし果して王の言はるゝ如く徒らに新を好み奇を求むるの淺ましき本能によりて、煙草の流行を來せりとならば、又印度の裸形この國に流行して可な

るものに非るか、腰に草葉をまとひて奇怪なる舞踏をなす事を何故に吾人は流行せしめざるか。何故にこれを傳へ来るものなきか。新世界より歸り来るものは、彼の地の珍果、香水、黄金、寶石の限りを齎し、語るところはこれ悉く目を眩り、耳を聳たしむるの奇習のみ。しかも一つとして此の奇習を倣ふものなきは何故ぞ。これ我等文明の國人はその愚を知ればなり、その許し難きを悟ればなり。成すべきと成すべからざるとは、我國三才の童兒もよくこれを辨するところ。煙草を用ふるはその用ふべきを知らざればなり。裸形を倣はざるはその倣ふべからざるを知らざればなり。採長補短、これぞ文明開化の原則にして動かすべからざるの哲理、我等たゞ印度の草をとりて、他を學ばざるの所以、實にこゝに存す。煙草を用ふるに至りて、こゝに又我等の文化は一日の長を示せるものと信す。」

彼はこゝで昂然として銀のパイプから一ふく煙を吐く。

王「否否否、煙草は文明の敵なることを予は斷言す。すでに昨週もこのものを飲みたる故に死せるもの二人あり。一人は尙ほ病舎にありて生命覺束なしと傳へられたり。此の事實をもつてもなほ卿は煙草を讃へんとするか。身體を損じて生命を奪ふ。國をあげてこれに惑溺する時の事を思はゞ慄然たらざらんとしても能はず。ローマは遊墮と放縱とのためにその健康を失ひて倒れたり。我が大英帝國もまた、煙草によりて健康を損じて敢てローマの轍を踏まんと欲するか。もしそれ軍役にある者喫煙の風に染まんが——あゝ親愛なる國民よ、煙草を斥けよ、煙草を斥けよ、國殆し——」

王は顔を蔽ふて、怖しき幻想から逃れやうとするが如くである。婦人、軍人の間にはいたく感動した者も見える様子である。

博「王が憂國愛民の至情、我等まことに感激する所で御座ります。さり乍ら煙草を吸ふが故に健康を損ね、國防の大事を全うする能はずとは、いさゝか偏見狹量且つ淺學の難をうくるのおそれなきやを危ぶまるゝ次第と存じます。イスパニヤ・ポルトガルの探險家、學者にしてすでに前世紀の間に、親しく印度に渡りて煙草を審に觀察いたして、彼等印度の土人此の草の葉をもつて丸薬を作り、一個これを口中に含んで旅する時は、他に一滴の水も要せずしてよく千里の道に堪ふる由を述べ居れるもの一二に止らず。王もし是を疑ひ給ふとならば、しばらく我が國の探險家ハウキンス少將の報告を読み給へ。彼は今より五十年の昔、早くも此の事を研究して「それをもつて彼等フロリダの土人は、四五日の間他の飲食を斷つて生くべし」と申して居らるゝ。願はくは王、その高邁なる識見、判斷の御力をもつて、是等の書につきて見るところありて然る後、煙草の害を論ぜらるゝならば論ぜられんことを。王は又多忙にして文學に親しみ給ふの時なきか、又はその能力なきかは我等の存知する所に非れども、こゝに居らるゝジョンソン君の「なくて七癖」をも知り給はざることは、我等の遺憾とするところに侍る。」

とてケイネル博士、ジョンソンの方を見れば、彼は我が意を得たりと莞爾、胸を張り大きく息を吸ふておさまつてゐる。

「その作中に現るゝボバデイラの言をきゝ給へ。稍誇張のことあるべしと雖も、彼は親しく印度にありし二十一週の間、他の一物をもとること全くなくして、唯煙草のみにて極めて健康にして愉快なる生活をなせりと云ふ。すべものには中庸あり。我等常に主キリストの聖なる血と肉として、敬虔と感謝の念もて攝るところのパンと葡萄酒と雖も、量を過さば胃腸を害し、延いては一命を劫す事あるものなり。王は煙草を吸ふて死する者あるをもつて、

直ちに煙草は有害ありとなすも、こはその者に節制の徳なく、過量を用ひたるが故なり。偶々此の一事をもつて全般を論ずるは、これ極端をもつて、常例とするの暴、その理論の誤りて甚しき、もし又知つて此の言ありとせば、狡猾邪智あるひは排斥の的とならざるやも保し難き次第、ものにはすべて異例あり、その本質を論ぜんとするならば、よろしくその全般に亘つて研究の後なすべきものなり。又、国防云々につきては、我等はむしろ王と正反對の立場にあるを悲しむ。將來戦線に立つべき者は、此のものなくてはかなふまじとさへ思はるゝなり。それ食糧は戦時にありて最も重大なる問題なるが、もし以後に於て煙草をもつてパンに代ふべしとなさばその効如何。願はくは王その明を以つて熟考し給へ。數日の亂軍にもパイプをだに失はざれば、士氣何ぞ衰ふることあらんや、力何ぞ竭くることあらんや、すでに然りとせば、烹厨の煩もなく、輕重の大部もあげて銃剣をとつて戦線に起つを得べし。此の費をあげて悉く武器彈藥の方に充つるを得ば、戦時能力の強大となるべきことは、論をまたずして明白なり。若しそれ對戦の間に於て、一齊に喫煙する時は、煙氣濛々と陣中に漲り、敵より我が行動を隠すること最も妙なるべし。此の間に於て速かに陣形を變じ、移動をなして敵の慮を衝くに何の難きことあらんや、然れば即ち今日迄、最も危険なりし食事の時も、積極的に敵對行動の一部となりて、戦術上の一大革命となるべきは必然なり。我は牛津の一學究書籍堆裡にありてなほ此の考へあり。千軍の總帥ジェームス王は、敢て我等の言を俟たずして見給ふところあるべきに、かへつて戦争に對して有害なりとさるゝに至りては、國民或ひは王の頭腦の健康状態を疑ふに至らざるなきやと危ぶまるゝ次第なり。王よ熟慮し給へ、戦時にありては、煙草は實に彈藥と共に缺くべからざる軍需品なることを——。

拍手しばし鳴りもやまず、特に彼の無敵艦隊を撃滅して勇名轟くハワード將軍、此時齡すでに七十に近いがなほ饒傑の意氣たのもしく、感激拊舞してケイネル博士の手を握り、先だつた戦友、ホーキンズ、フロピツシャーに聞かせたかつたと涙を流す有様である。かくて此の論争に於て王は、煙にまかれて悶絶するの敗北を喫し、ケイネル博士の大成功は全國のタバキアンの歡呼によつて迎へられるところとなつたが、其の日より、ロンドン市中の煙草の賣上高が一割六分の増加を示したなどは、無責任なる後世の附會である。

しかし此事あつてより、ジェームス王は快々として樂します、一室に深くとち籠る日のみ多かつたが、此のまゝ敗れて了ふのが残念でならず、更に陰險惡辣の術策をめぐらして、その腹いせとした。即ち先に云ふた四〇〇割の増税がそれである。同年十月の十七日ウエストミンスターに於て煙草令を發して、英國の何處の港、何處の波止場に於ても煙草を陸揚げせんとするものあらば、その邦人異邦人たるを問はず、今日迄煙草一ポンドに課せられたる二ペンスの慣例を破棄して、更に六シリング八ペンス、輸入税を課すべき事を命じたのである。

しかしか様のことで、煙草が衰へると考へるのは大間違ひであつて、王は結局、大衆の反感と、ヴァージニア殖民の怨嗟とを買つたにすぎない。かくてその後十年を経ずして、ロンドン市中にはアメリカインディアンを現した黒ン坊の看板が煙草屋に掲げられ(一二四頁挿繪参照)、人々は煙草入れにパイプ、灰搔き、煙草を詰めるに用ひる金屬製の棒その他いろ／＼の道具を携帯してあるく様になつた。ケンブリッヂの學生が、聖マリア寺院の境内に喫煙すると放校處分にするとおどかされたのも、此頃のこと、如何にタバコが大問題であつたかゞわかる。

一六一六年、モンタギュー僧正はジェームス王の煙草排撃論を、Bishop Montagu ミソカブヌス去ち煙草嫌ひの反對論として再刊した

が、これでは王の激論も更に誇張擴大されて居て、それが宗教家一流の厭世観にすつかり憂鬱となつて、チク／＼と終つて居るのは、どつちから見てもまことに不快の極みであつた。これはニコパヌシストにとつても、明に失敗を承認せねばならぬ程の愚擧であつた。従つてそれは、反對にフィロカプヌシスト（こんな言葉はないが）をして、ヤンヤと喜ばせたことであつた。

ジェームス王に云はせれば、彼の四〇〇割の課税は、煙草の莫大なる輸入を極度に制限し、「イングランド、ウェールズ、バーウキツクの諸地方に於て以前よりも少量の煙草を許し、上流階級の中庸を得たる使用に對しては、充分の供給をなして以つて彼等の健康を維持せしめんとする」(煙草排撃論) 目的であつたのである。かういふ考へ方は當時は何處も同様であつたと見えて、上流階級、支配階級こそ國家第一の有用人種として是を待遇し、下流階級にはその經濟的口實によつて煙草を禁じ、以つて彼等の生活難を幾分なりとも緩和させてやらうといふ有難い主旨に出でたものであつた。

當時にあつては上流階級が、その健康のために程よき喫煙が許されたにも關らず、「劣等階級の野人共は惡風に染まりやすく、騒然として節制なく此のものに惑溺して、上流貴族と異りて、彼等の勞働すべき時の、大部分を喫煙に過し、虛榮に流れ、更に他をも誘惑墮落せしめ、その生活の道に障害を來し、ために家族は救はれ難きもかへり見ず、更に甘美の煙草を求めんとして無用の努力をなすのみにして、益々その貧弱なる財囊を困窮に陥れ、更に國民の夥しき數はその健康を損ねて、勞働能率の低下を來すに至り、彼等の田地その他は、此のにくむべき喫煙の風を支ふる爲めに、荒蕪に歸して省みられず、之に加ふるに莫大なる國民の財は煙となるに至る」(煙草排撃論) が故に下層貧民階

級には斷じて許せないといふのである。

Edmund Gardiner

一六一〇年、當時名醫の聞え高かつたエドモンド・ガーディナーは煙草擁護の大著を公にした。「その價值を最もよく論じ、名稱性質を明にして、すべての人の季節・場所・顔色・氣性・身體の組織に最も適するやう、正しく誤りなき使用方法を論じて其の効を利すべきを示せる煙草研究」が即ちそれである。

その内容は題名の通りであるから説明の要はないが、彼のモナルデスの名著にも比すべき科學的良著であつた。然るにその後四年一六一四年、ジョシユア・シルヴェスターなるものが、ジェームス王の後塵を拜して、反煙草の長詩

Joshua Sylvester

一篇四百行をものした。題して曰く、「ヘリコンの頂より雨とそゞぐ神の射撃によりて、彼の下賤野蠻の草を禮讚し、又此の惡むべき虛榮に溺るゝ輩の耳もとに、煙草、パイプをブチ碎く」といふのである。

Heart of Buckingham

此の詩は、ジェームス王の主馬頭バツキンガム伯に獻呈されたものであるが、それまで禁煙で通して來た伯はこれがために心境の變化を來し、煙草飲みになつて了つたといふことである。此の詩においては、煙草は十字火を浴せられて悲惨な目にあふのであるが、少しよんで見たら獻呈されたバツキンガム伯の憂鬱——及びそれを消すための喫煙の理由が成程と同情出來やう。

此のほどに二つの煙噴く器械

(惡魔の近路、更に彼の忿怒を激す)

慾深き輩によりて發明せられたり。

否むしる地獄の穴より噴き出されぬ

焰と煙の大砲とパイプ

少くとも人間の三が一を息づまらせん。

(默示録に豫言せられ居るこそかたじけなや)

されど我等此の二つに對しては勇敢なれ。

場合によりてはパイプは最悪

(兩つ乍らその力は呪はるべきも)

火砲は單に敵の方へと發せらるれど

煙草パイプは彼等自身の家庭の方へ

(その銃口は火を發して

我等の中に毒氣を深く吹き込むなり)

その推敲の足らざる、其の思想の混亂せる、拙劣晦澁、讀むにたへない程のものであることは、萬人の認めるところだ。彼は更に煙草と地獄とを關係せしめて、タバキアンを火焰地獄の眞只中に墮として了ふ。

さらば何人も嫌惡して否と云はん

煙草飲みよ、汝が道を進み行け

その煙吸ふことを續けて行かば

地獄の硫黄の煙に堪へ易からん

然してこゝにも(他の罪に於ける如くに)

更に惡魔に近く似るべし

× × ×

惡魔は繪にも劇にも

火焰の顔を以て現れ

口鼻よりは煙を噴くぞ

いとふさはしき飾りなれ

眼きらめきて脂ぎつたるその手には

長大巨大の煙草パイプを握りたり

思ふに大方の煙草飲みは

此の戯れを認め、又は讃ふなるべし

されど更に多くのクリスチャンは

其が次第に惡となり惡魔となるを知れるなり。

更にシルヴェスターは、煙草飲みを憎み呪ふのあまり、何時か彼等は地獄の首吊り繩にぶら下げられて、煙製にされて了ふのは必定で、丁度豚肉を煙製にするのと何の變りもない。彼等はずまり人間的家おとこにすぎないと罵つて、死後の煙製が一番適當であると云ふて居る。彼の晦澁で執拗な呪咀は、正に地獄に於てアクの強いベーコンを作るに役立

つべきものであらう。しかも彼は國內の煙草飲みばかりでは物足らず、遂に世界のはてまで罵り出す意氣の旺なるは敬服ものである。

されどそは迸り出でてすべてを襲ひ

殆んど極地より極地に達す

ムアー、トルコ、韃靼、波斯

他の異教にも行き亘る(愚蒙の輩)

といふと思ふと再び歸國して、今度は煙草商を攻撃するのだから忙しい。

煙商賣は煙にまかれて窒息せ

彼奴等にこんなふさはしい事はない

煙草卸屋輸入商

會計調査によれば毎年

十萬ポンドの良品消費

彼の詩を——これでも詩——これ以上引用すると、他人のさもしさに何の関係もないこつちが赤面させられる時のやうなあんな氣持ちになりさうなのでこれくらゐにして置く。

だからこれを献呈されたバツキングラム伯は、當時英國の最大不運兒として、全國の同情を集めたものだ。シルヴェスターのために、如何に煙草が誘惑的の草であるかを知り、遂に墮地獄の運命となり果てたからである。又旅行家の



十九世紀中葉酒場の光景(リチャードドイルの漫畫より)

William Lithgow (Rare Adventures)
ウィリアム・リスゴーも、一六一二年までは、禁煙の幸福を神に感謝して居たが、シルヴェスターの詩が出るに及んで、これまたバツキングラム伯と同様心境の變化を蒙り、つひに一かどの喫煙家になつて了つたとは彼自らの告白であるからたしかである。だからシルヴェスターの此のたぐひまれなる詩は、最初の意圖とは正反對の結果を齎して、煙草黨を罵り乍ら煙草黨の拍手をあびるの大恥をさらしたわけである。

シルヴェスターに此の名詩あるや、こつちでも黙つては居れぬとばかり、飛び出したのがウィリアム・パークレー、名からして如何にも酒場とクレイパイプが好きさうであるが、「無憂華 煙草頌」なる一篇もつて、生の葉も、枯れた葉も萬病に靈効あり、又新しき葉を丸めて病人の口に入れ、胃の中に煙を吹きこんでは、その効あらはれざるなしとたへて居る。彼はこれをマリイの僧正に献じて「此の聖草」を保護し給はんことを乞ふたのである。

我等が岸に漂ひし異邦の草は
寒く荒れたる此の國を救はんがため
であつたとて、神が此の草を興へて祝福し給へる國」から渡つたとこ

ろの「聖き徳あまた具へし」煙草を禮讚して居る。

John Deacon

Tobacco tortured; or the Filthie Fume of Tobacco refined

ジョン・デイコンはまたこれに憤然駭起して一六一六年、「煙草拷問、又は汚煙清掃論」と云ふ一作を、ジェームス

Capnistus

Hydrophorus

王に献呈し、又世間を赤面させたのである。これは煙と水を代表するカプニスタスとヒドロフォラスとの對話の形をとつて、吸ひ込んだ煙草の煙が身體と財布に極めて有害なる事を力説して居る。これを讀んでかどうか、そこまではつきり分らぬが同年キヤムベルといふお爺さんが倅に残した遺言狀が變つて居る。

P. Cambell

千六百十六年十月二十六日

P・キヤムベル

遺言之事

一、倅キヤムベルに余の全財産を與ふるものとす。然れども他の弟妹にして、彼が喫煙の現場を發見せる場合には、彼又は彼女は倅に代りて此の財産を所有すべきもの也

といふのだ、倅キヤムベル果して此の遺言と財産とを、斷然たる禁煙によつて守り通し得たか否や、そこまでは傳へられて居ない。

然し乍ら時代の精神、大衆の動きは、多くの挾雜物をも含み乍ら廻轉するところの必然の白である。やがて數年、ジェームス王はパイプ製造會社の設立を許可せざる可からざるに至つた。更に「若くさうして純潔のよき乙女等九十人」が各百二十ポンドの煙草と交換に、遠く海の彼方、ヴァージニアの煙草作る人の許に嫁ぎ、つゞいて「若く美しく徳育ある乙女等六十人」またヴァージニアに新しき家を營むべく海を渡るに至つた。

かくてさしも妻かつた煙草の迫害も、十六世紀の廿年目頃からは全くその跡を斷ち、やがて懐しい、パイプの時代

とはなつたのである。

第二章 クレイ昔話

ハリソンによれば、英國人は一五七三年頃には、杓子型の管で煙草を吸ふて居た由であるが、其後、十餘年、ラルフ・レインが新大陸から例のパイプを輸入して、これをレイに贈るに及んで、此の新型の大流行を來したといふことは、先に述べた。

ではこのレイのパイプ、即ちラルフ・レインが持ち歸つたパイプとはどんなものであつたかといふと、それは十六世紀末ヴァージニヤ土人の間に用ひられて居たパイプの一種に他ならぬ。然し的確に、レイのパイプはこれ／＼と

William Oldys

語ることは不可能に近い。といふのは、彼の煙草入れを親しく見たウィリアム・オルデイスは、それに六本か八本の

Re. Thomas

パイプを入れてあつたと稱して居るし、ソアスピイは更に十六本のパイプを入れる孔があつたといふて居るから、レイは愛煙家の御多分にもれず、多數のパイプを所持して居たものであらうからである。唯ダンヒル・コレクション中、レイパイプの一つと云はれるものは、アメリカ東部の土墳から發掘される土墳パイプの様式であつて、其の火皿は柄に直角に付き、吸口の方を向いた人間の顔がついて居る。この型はたしかにヨーロッパにおけるクレイパイプの先驅をなしたものと考へられる。

John Gerard

前述の、ローベル博士の本にも、新大陸より歸航した水夫等のパイプ使用が述べてあり、又ジョン・ジェラードの本草蒐彙 (The Herball of General Historie of Planes, 1597) にも、一寸言及して居るが、パイプを多少なりとも

Paul Henner

委しく説明して居るのは、その翌年一五九八年、英國を旅行した、獨逸の法律家バウル・ヘンツネルであらう。即ち「英國人は至るところに次の如く煙草をふかす——彼等は粘土製の管を持ちて、揉めば粉となる程に乾燥したる葉を其の先端に詰めて火をつけ、その煙を口中に吸ひ込み、再び鼻より吹き出すこと煙突のごとし」とあるのがそれだ。

William Camden
又ウイリアム・カムデン（エリザベス女皇の歴史編纂官）の信賴すべき著書（Annals reum anglicarum, 1615）によると、「忽ちにして多くの人々、或は放縱より又は身體のためとて土製の管をもつて、此の刺しき煙を貪り吸ひて、又鼻より吹き出す云々」とあるが、これ等は皆ヴァージニア渡來のクレイ・パイプを指して居るのである。

此等の書にも見る様に、そののみ方も、鼻から吹き出すのが方式であつた如く、ロウファ氏の如きはこれもヴァージニア土人の吸ひ方を學んだものであると云ふて居るが、しかし香氣あるものを、鼻孔を通して貪り嗅ぐといふのは當然のことであつて、さう何から何まで、ヴァージニアを學んだと極言する程のことでもあるまい。

鼻孔から、あまり濼々たる煙を出すのは、下品で粗野だといふので、鼻、口から半々位に吐き出す様になつたのは、ジェームス一世の死後のことである。但し、その鼻から煙を出すのは、中々通なものであつたらしく、「フン、彼奴は鼻から煙が出せねえんだ！」とは、當時のシークボーイ達にとつて最大の侮辱であつたとか。

この事は、紳士の條件としては、その吸ひ方にもどんな技巧が必要であるかを教授する學校があつたのもわかる。その教授するところといふのは即ち「スライト」^{Slit}と稱して、輪をふき玉を吹くといふ高等技術であつた。何も相手を馬鹿にするといふ意味で、スライトといふたのでもなく、又チヨロマカシの意味に通じさせてスライトといふたのでもないのであるが、あの有名な煙草論争の眞際に流行して、ジェームス一世が死ぬとすぐすたつたといふところから考へて見ると、このスライト學校の校長の意圖もどうやら怪しくなつて來る。

或ひは、煙草嫌ひの前で、このスライトを盛んにやり乍ら、「ジェームス王は我等の名君、シルヴェスターはブリテンの大詩人」などと吐きちらして愉快がつて居たものかも知れない。こうなるといかさま、スライトのスライトたる所以もうなづけるやうに思ふ。パリーの「マイ・レディー・ニコチーン」の主人公は靜かな室の爐の前に、ふかふかとソファに埋つて、輪を吹き出すと、いくつも眞直に昇つて行くので、下からスウと鐵の棒を通すことが出来るといふのだが、こゝまで來ると讀者の方がスライトされることになる。然し、娘煙曲師が街の四辻で、三十一文字を吐き出すなどとやられるよりは、顔負けもしない。

話が少し脱線して了つたが、兎に角、當時の紳士と煙草は、到底離すことの出來ぬ密接な關係にあつたもので、Ben Johnson
ベン・ジョンソンの言葉をかりて言へば、「根つからの田舎者のくせに、紳士の名にひどく惚れ込んで、それが賣つて居たら金を出して買ふて來るつもりで居る奴」などまで、煙草を覺えるのあらゆる努力をし、又イタにつく様になるまでに慘憺たる苦心をして、やつとのあげく、鼻から煙も出せる様になると、それでもう紳士の仲間入りをしたつもりの連中も少くなかつたので、さういふ連中のためには、

彼女の愛は煙草のけむり

John Marston 1575?-1635
口から鼻へすぐぬける。(マーストン)

といふやうな小唄が、現實の悲哀と共に流行した程である。然しこれとても、前述のやうにジェームス二世の死後は、質實の風を帯びて來て、モボや田紳の見榮やお洒落は見られなくなつたので、その後は

いかに口でも吸いたる仲よ

消してわたしは鼻しやせぬ

といふ都々逸が流行つた——といふのは冗談。

十七世紀の中頃にはもう、「今は煙草を薬として用ふるものきわめて稀なり。そはくすしの手よりはなれて、よき友となり、吾等すべてのものとなりぬ。脂じみたるパイプ持たざる者は語る可き友にあらず」(ウインスタンレイ)と云はれる様になつた。

大抵の本は、印度土人より持ち歸つた、又はそれに倣つたクレイパイプが、最初のやうに書いてあるが、その以前に、胡桃の殻に麥わらをさした、原始的のものがあつたのは事實だ。然しこれは、決して一般的のものではなく、極めて小部分のみ使用せられたものであり、且つ今日では全く残つて居ないので、さう重要なものとは見られない。

これに反して高價なパイプとしては、十七世紀初めに早くも銀製のものがあつたと見えて、醫學者ウイリアム・ヴァン・オーン卿の「自然的並びに人為的健康法」(一六〇二)には、「早朝銀のパイプによく乾きたる煙草を用ふれば頭痛、齒痛、感冒の悪化を防ぎ、妊婦のつはりに効ある」由見えて居るが、煙草そのものよりも、むしろ此の銀製のパイプが患者に利いたものらしい。

英國に煙草の渡つた當初は、其の値段が高價であつたのは當然だが、更にジェームス王が四百割の増税を課するに及んでは、流石にアメリカから輸入することが出来ず、スペインの方から輸入されたといふのが、一オンス三志——今にして見て約十八志(標準値段に約九圓)もした——これで比較的安いといふのだから驚かされる。それから五十

年も経たぬ中に約二圓位に値下げされたが、これはジェームス王が死んで、ヴァージニア煙草が再び多量に輸入されるに至つたからである。

十七世紀の中頃には、國內にも盛んに栽培される様になり、グロースターシャイアの絞首人をして、「どうも近頃は、どいつもこいつも煙草作りのにぼせて居て、羊を盗む奴も居ないんで、仕事はあがつたりだ」と滾させる程であつた。チャールス一世の輸入制限の如きも、單に國內栽培を盛ならしむるに役立つた位のもので、ピュリタンのクロムウエルは、「煙草は悪魔と地獄の匂ひがする」とばかりに腹を据えかねて、とうとう軍隊を出動させて煙草畑に大訓練をやらせたが、尙ほこれに慊らず、一六五〇年には、議會に諮つて、又々輸入煙草に重税を課した。

ところが、チャールス二世に至つては、「貿易を盛ならしめる爲めに」、國內の栽培を禁じたが、その際「國內に栽培せらるる煙草は不良にして衛生に害あるものと認める」といふ理由をも附加したのである。しかしこれ丈は、流石に我が徳川時代の農民同様、イギリスの百姓達も中々言ふことをきかず、栽培は依然として続けられた。ウインチコムSeamuel Pepys (1633-1703) Pepys Diaryの百姓なども、再三軍隊のドク靴のお見舞をうけた由、ヘビス日記(一六六七)にかいてある。

「我等の従妹の申すには、先頃の一揆の際、此地に來れる軍隊と覺しき近衛兵、ウインチコムに來りて、百姓達法を犯して作れる煙草今日迄すて置かれしを、損じ棄てたる由なり。されど百姓達はこれに懲りず、再び栽培するものと思はる。」

どうしてさう思はれるかと云ふと、一六五八年、クロムウエルが死んだ時、其の葬儀に參列の兵隊達は、みんな煙草をふかして、文字通り、彼を茶毘一片の煙と吊つたといふ前例があるからだ。

こんなにして、打ち續く迫害の中にも求められる煙草が、前述のやうに高價なのは當然のことで、従つてパイプの雁首が大變小さくなるといふの亦、まことに同情すべき當然である。煙草流行の初め、即ちエリザベス時代の後半のクレイパイプは、大變小さく可愛い恰好をして居たので、フェアリーパイプとかエルフィンパイプなどの名で呼ばれて、今日の好事家、蒐集家に珍重せられるところである。

その頃のパイプの柄は約三寸から五寸位あり、火皿は今の朝鮮ぎせるのそれ位のもので、中程にふくらみを持つた樽型であつて、前方にのめり底には平たい踵をつけて居るのが特徴である。普通何の裝飾もなく、偶々線又は點線が火皿の縁をめぐつて居る程度のものであるに過ぎない。さうしてその踵に製作者の頭文字を彫つてある。

十六世期末における代表的のものにはR.A.パイプとて、踵に此のマークを入れた、黄白色のクレイがある。彼のパウエル・ヘンツネルがロンドンの劇場で見たと報告して居るものは、正しく此の類であつたらうし、又ハリソンが一五五三年に、「小さな杓子の形をしたパイプ」といふて居るのも此の類であつたらうと想像される。

これと同時代のものに、プロズレイパイプがある。プロズレイでパイプを作り初めたのは一五七五年に迄溯るさうで、これ亦「杓子型」である。

然し是等のパイプも、矢張りヴァージニア土人のパイプに模したものであるのは勿論で、一五九〇年、ド・ブリー(Bry)の短篇集に挿入されてある、アメリカ土人のパイプのスケッチは、雄辯に此の間の事情を語つて居る。又オランダの植物學者カール・クルシウスはアメリカに渡つて、ヴァージニアへ來た英人が、土人のクレイパイプを本國へ持ち歸つたことを報じて、それが一五八六年のことであつたと付け加へて居る。

がうして、英本國に於てパイプが製造される様になつたのであるが、下つて十七世紀・クロムヴェル時代には、火皿が稍大きくなつた模様で、パイプ製造人の名が明かに知られて居るものも二三に止らない。有名なブリストルのハント(Hunt of Bristol)ント、ハウエル等がそれで、前者の一族は皆パイプ製造を業として、

その中に、ジョン・フラワー、ジツフリー、トーマス等の名が、火皿の踵に彫られてある。

尙ほ當時の同業者には、フィリップ、エドワーズ、ハムフリー、バートリツヂ、トーマス、スミス、リチャード、ナニイ等があるがハント一族の作るものは、その火皿の胴のふくれと、前のめりの角度に特徴がある。

十七世紀末に入つて、此の雁首の前のめりも、次第に頭を擡げ出して來たが、これは必ずしも、煙草への迫害もなくなつて、公然樂めるやうになつたからといふ意味ではない。此種の代表としては、プロズレイのジョン・レッグがある。同時代のチャールス・リツグスの作つたものは、其の形も更に變化して、火皿も大きくなり、踵



が飛び出して「爪」となつて居る。現在のクレイパイプにその原型を做つて居るのである。

折れ易いクレイパイプは必然的に其の需要が大きく、パイプ製造業者の數も亦、多かつた。アン女王時代の一記録によると、さる男は五年間に約一千本のパイプを求めて居るが、して見ると此の男は一週間に約四本宛使用した割合である。その中には客の用いたものもあるとしても、兎に角驚く可き折り方である。従つて其の代價も大變なものであつたらうと考へられるが、「極上」品三打で十片、オランダパイプは一グロス二志——つまり百四十四本で一圓だ。ノツチンガム製が、少し張つて二グロスで五志半、それでも彼氏はその家計簿の最後につけ加へて「減法高い高い。」
Oh, very dear, very dear!
Charles Fox Sarah Fall
クエーカー宗のチャールズ・フォックスの娘、サラ・フェルといふお嬢さんの日記は殊に興味がある。一六七〇年代のものであるが、それによると、お母さんのパイプ代が三年間に五片、又お父さんの買物に「膠とパイプ三ペンス」「インキとパイプ八ペンス」などの支出があるが、又「パイプ一ペンス、妹のスザナの爲めに。」又「煙草四半ポンド、二ペンス半、妹ロアのために」などと微笑まれる。

これで見ると、當時ではクエーカーの娘さんさへ煙草をのんだ事がわかる。然しこれは、當時流行した悪疫流行の爲めであつて、極く少量しか呑んで居ない。薬用としては、もう全く忘れられて了つた頃、一六六五年の悪疫流行は再び女性に迄喫煙の風を學ばせる結果を招じた。尤も此の時は、それこそ猫も杓子もで、羊、馬まで煙草を飲まされた由、ベビスの日記に見るところである。

當時 Mrs. Grace Poole Miss Charlotte Brontë
グレース・プールの婦人は、氣狂ひになつたロチエスター夫人を保護して、日々煙草を與へて氣を静めさせて居たといふし、シャーロット・ブロンテ嬢なども、「女の煙草のむはさして珍しからざること」と云ふて居る。我

が國でも、最近婦人の喫煙者が漸く増加して來た模様であるが、問題になるといふ程のものでもあるまい。

例のデレック文士のデツカアの作、サチロマステイツクスの中に出て來るサボといふ男は、一本四錢ばかりのパイプを持ち出して、「さあどうぞ、通人諸君、こちらに煙草もあるです。これは中々の上物で、先日も婦人が二三人見えられました、私の手よりパイプを受けられて、一二服召されました折も、大變結構とほめられたものです。」などとあり、有名なビュリタン・ウイリアム・プリンも、當時婦人ともあらうものが、しかも劇場で、林檎に嚙りつく代りに煙草を吸ふて、疲れを癒して居たとて非常な憤慨であつたが、ヘイウッドの作にも、「娘さんにはまづ『煙草はいかゞ?』とモーシオンをかけるものさ」などと傳授するところがある。これらによつて婦人の喫煙は當時にあつても、相當行はれて居たことがわかる。

かくて一六一九年、パイプ製造會社の設立となり、ジェームス王はこれが許可調印をせざるを得ざる破目となつた。思へば王が煙草排撃論をものし、シルヴェスターが是につゞき、ジョン・デイコン以下有象無象がその尻馬に乗り、鼓を鳴らして、煙草黨を攻撃したのもきのふの夢、まことに有爲轉變の世の姿ではある。されば此のパイプ製造會社の得意は思ふべしで、社長一名監督四名、助手廿四名、總數卅名に一名しか缺かぬカムパニーは、皆其の社章として満開の煙草の花を飾り、「兄弟愛を持続せよ」の標語を掲げた。

即ち本社のパイプを以つて煙草のむものは、何人といへどもダビデとジョナサンの如くに親しみ合ふて、決してアケディア・ミクスチュアの五人のやうに喧嘩はするなといふのであるが、まことにグロースターの絞首人がいふ如く、みんなが煙草栽培に忙殺されて羊を盗む暇もなかつたとしたら、その煙草をのむのに又忙殺されて、喧嘩などす

る暇は到底なかつたであらうといふことは、より當然と考へられるところである。

當時パイプに火をつける方法がまた、アメリカンインディアンの風をそのまゝ行つて居たといふ。つまり彼等はパイプに詰めた煙草の上へ、眞赤になつた炭火をのせたのである。ジェームス王が「此の不斷の悪風に染みて、自らの身體を愧づ可き虐弱に陥れて、安息日の遠足もなす能はざるに至るも、なほ貧しき隣家の燻り炭を乞ふて煙草を吸はんとするや？」と卑しみ憤つて居る所以であり、又パークレイが「(略)ノルマンチヤの旅に英國の商人と一時行を共にせり。彼はその性快活なりしが、戸毎に煙草の炭を乞ひ行きたり。彼のフランス人は之を怪みしが、我はその節制なきを笑ひぬ」とある所以でもある。炭火を用ひるからには、まさか火殻を掌にころがす事も出来ぬ故、金屬製のピンセットを懐中して居たものである。

十七世紀後半、前述のやうに多數のパイプを産するやうになつた結果、やがてアメリカへ逆輸出をし初めた。殖民は是を以つて、インディアン懐柔の具となした。インディアンは此の舶來のクレイパイプを喜ぶこと甚しく、更に此の型を眞似て、パイプを作るといふ心理は、丁度嘗つて日本の洋畫が、浮世繪から學んだフランス大家の技法を模倣して得意であつたやうなものである。

だから、彼等インディアンは、百廿本の舶來パイプと、琴百挺と交換に、ニュージャージーの沃土を手離したりする。ベンシルヴェニヤの開拓者、ウィリアム・ペンWilliam Penn (1644-1718)も廣大の地を求めるのに、三千本のパイプなどを交換物の中に加へて居た様である。當時の開拓者達は土地の所有權などといふ觀念のない土人に對して、「これをやるから山の向ふへ移つてくれ」などとパイプを並べたて、居たものであらう。現住の地を、自分のものにする爲めに、何の苦勞をした

でもなく、且つ、半游牧的の生活でもあつて見れば、別に土地に對する執着といふ氣持ちもなく、彼等土人は、パイプを貰つた丈け儲けのやうな氣がして、喜んでそれに應じて居たものであらう。

十八世紀に入つてからは、英國のクレイパイプの柄はぐんぐん延びて、皆一尺以上で二尺五寸にも及んだ由であるが、長いもの、折れやすい道理で、これに困つたあげく、鐵製の代用品が、その缺點を補つたつもりで市場に現れたが、そんな瓦斯會社の導管みたいなものが喜ばれやう筈もなく、全然失敗して了つた。

ここに、ノア・ロッドンNoah Roddenといふ男が出て、長い柄のクレイパイプに成功したのは、十八世紀末のことである。ロンドン中のクラブ、カフェあたりは皆このロッドン・パイプを用ひた位で、火皿に浮彫りする當時の流行と相俟つて、非常な賣れ行きを示した。このロッドンの子孫であるサウソーンSouthorn——曾孫に當るといふ意味でもあるまいが——に至つて遂に蒸汽機械を動かして、パイプを作る方法を發明して、年額五十萬本を産するやうになつたが、これはすでに十九世紀も中頃のことであつて、すでに巻煙草の流行を見、ブライアなども現れた頃で、さう大した儲けにもならなかつた。

此外に、十八世紀から十九世紀にかけては、種々のクレイが現れては消え、消えては代りしたものが、その本來の形體を變ずるといふこともなく、現在のクレイパイプも尚ほ往年の踵を爪の状態に残して居る。これは日本へも、フランスあたりから輸入されて居る安物のクレイを見てもすぐわかる。

第三章 いんでいあん らめんと



マヤ人仰臥喫煙圖
(パレンク寺院の遺跡より)

アメリカンインディアンと煙草とは、その永い歴史の上に於て離すべからざるものであつて、是を詳細に説かうとする時は、優に一冊の書物となつて、尙ほ及ばざるの憾みがあるであらう。實にインディアンを語るに、煙草に言及せずしてはその完全を期しがたく、又煙草を論ずるに、インディアンを除外しては、河を拓いてその水源を求めないに等しい。然しこゝでは、敢てインディアンの人類學的研究とか、煙草の歴史的研究とかいふ風な堅ぐるしい立場からするのではなく、極めて自由に拘束されるところなく、興味中心として話をすゝめて行くつもりであるから、自然非系統的となり、場合によつては非科學的となるであらうことは諒とせられたい。

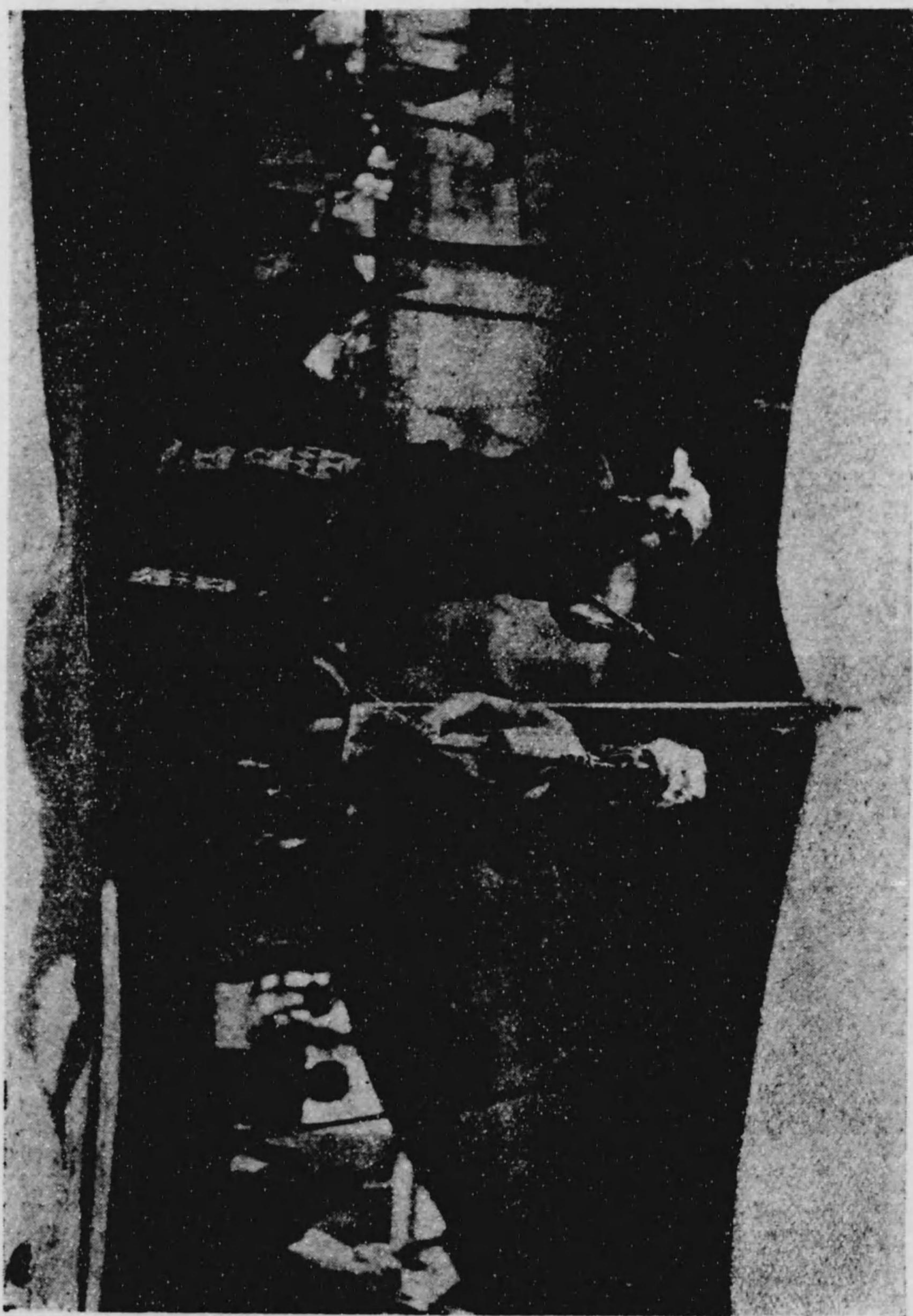
アメリカンインディアンが、煙草と相より相親んで來たその長い生活の間に、美しくも育まれた傳説信仰、即ち煙草の神性、パイプの神秘、それに關聯する祭祀の神聖など、深く彼等の精神生活の核心にまで入つて居るあたりは、煙草に對して觀念的の偶像を認め一居るとさへ思はれる程で、まことに彼等の生活は煙草を離れては充分に理解せられ難いのである。

彼等の間に傳へられる傳説の一つをもつてしても、この間の事情は察知することが出来る。

むかしむかし、一匹の山犬が野道を通りかゝつたら、そこにいたましい野牛の死骸が横つて居た、山犬は、此の死んだ牛に對して、ふとした惡戯心から侮辱を加へた。これを見た同僚の牛は、是非共復讐をして友の靈を慰めようと山犬を追ふた。山犬は野牛に到底勝てるものではなかつた。これを見た大神マニトウは、いたく山犬を憐んで、彼に最初の煙草とパイプとを與へ給ふた。野牛がとう／＼追ひついて、怒りもの凄く飛びかゝつて來た時に、山犬は彼にパイプを勧めた。野牛が、すゝめられるまゝに煙草をのむのを見て山犬のいふやう、「此の後多くの人間が一緒になつて居る所でも、皆かういふ風にならねばならぬ。お互ひに怒り合ふ折には煙草をのんで心を鎮めねばならない。」

稚拙何の見るべきところもないやうな物語ではあるが、これで、彼等インディアンが、煙草によつて激情を制することを知つて居たことは、丁度アフリカのブシヨングの物語にあると同じである。だから煙草には、言ひ知れぬ神の意志が具現されて居るものと信ぜられて、平和パイプといふ様なものが、神聖なる儀式において現れるに至るのである。彼等が自然に對する素朴さは、やがて敬虔なる信仰となり、安心立命の境地を、その内に見出すまでになるのである。

アメリカ土人往古の煙草使用に關しては、勿論明確なる文献は全然これを缺いて居るのだが、彼等が最初宗教的の儀式に是を用ひたことは、疑ひのないところである。ロツキー以東の土人間には、煙草は超自然の神力に捧げられる最上のものであつたし、中央アルゴンキアン(北アメリカ中央部一帯に亘る)に於ては、如何なる儀式も煙草なくしては行はれなかつた。煙草は「いけにえ」として火中に投ぜられ、その芳香を以つて天上の神の降り來まさんことを祈るに用ひられる。又は天地清淨のために、空中に撒かれ、地上に敷かれ、土中に埋められるのである。各地に、



バンタネ族の祈禱

我國で云へば庚申塚のやうな聖壇があつて、そこを通る者は必ず一つまみの煙草を捧ぐ可きものとされて居り、又嵐の時などには、水神の怒りを鎮めるために、川に湖に投ぜられるのである。

したがつて喫煙亦、すべての儀式の神聖なる可き場合には、缺く可からざるものであるのは勿論であつて、部落の重要會議などに際しては、此の煙の渦によつて可否左右を決し、善惡正邪を斷ずる所の、最も嚴肅にして權威あるものとされる。だから此の會議に用ひられるパイプは、それ／＼煙草を詰めるのも、これを捧げるのも、又は火をつけるのも、吸ふのも吐くのも、こと／＼／＼そこに各々の意義を含んで居つて、最初の煙は酋長によつて、先づ天地四方の神々に捧げられる。さうして此の儀式もまた、會議の性質によつて各々異り、又は部落によつて異なるのである。

更に、その部落に於ける地位、役目によつて複雑なる喫煙の規定が設けられてあり、パイプに對して過失ある時は、生命に關するとまでせられて居る。例へばホビ族の宗教儀式では、酋長は副酋長に命じて、煙草に火をつけさせる。副酋長は一定の儀禮の型により、火をとり呪を唱へ乍ら點火する。酋長はこれを受けとつて、又祈禱の經文を唱へ乍ら、天上の神々に煙を捧げ、更に祭壇に向つてこれを吹きかけて、降神の儀をとり行ふのである。(寫眞参照)

是と反對に呪咀の場合にも用ひられる。即ち、部落の規約を破つた者があるとか、許す可からざる冒瀆を敢てしたとかいふ様な場合には、その神聖なるパイプが集會所に持ち出される。先づ酋長から全員に渡されて、各々順次一息宛吸ふのである。神に對し、又は人に對する罪惡を裁判すべき、絶對の權威は、此のパイプの取り廻しの、音一つせぬ嚴肅の裡に存在する。かうして全員が吸ひ終つて、酋長の所へもどつて來ると、彼は火箸を以つてその灰をかき落す。さうしてその呪ふべき罪人の名を呼びつゝ、「此の灰は彼が脛の上に滾れよ」と云ふ。滿堂無言、呪ひの氣は凄慘

にあたりを罩めて居る。更に一掻きの灰は「彼の背筋に降つて苦しみを與へよ」、更にまかれる灰は「彼の頸にふりかゝれ」と云ふ。かくてこの灰が撒かれ終るや、其の男の命は断たれるものと信ぜられるのである。

此の呪ひは、慙じおどけた偶像を對象としないだけに、中世のヨーロッパに於ける蠟人形、我國に於ける藁人形に對する場合などよりも、より精神的の力強さが迫つて來る様に考へられる。

更に、神の怒りにふれた時には贖罪の式が行はれる。何等かの兇兆が現れたとか、何かの劫威を感ずるとか、又は危険が逼つて來たといふやうな場合には、神に祈つて其の力にすがるのであるが、此の際も同様煙草が用ひられる。十九世紀の初めに北方探險をしたジョン・フランクリン(John Franklin (1790-1847))の一行中に、クリ族が此の式を行ふのを見たものがある。

それによると、土人は特に作られたる小舎に神を祀り、土間の中央には、眞赤に焼けた大石を置いて、時々これに水を灑いで湯氣をたゞせる。彼等は全裸體となつて此の湯氣に蒸されて身を淨める。やがて、その濛々たる湯氣の裡に、神聖なるパイプがとり出される。酋長はそのパイプの中央をとつて、水平に保ち、焼石に近づいて煙草に火をつける。此際用ひられるパイプの柄は葦(カヤ)で作られ、煙草にはくまけ(クマケ)ももの葉が混ぜられてある。これが順次圓く座した人々に渡されて、各々「神聖なる煙草を太陽のめぐるにならふて」呑み廻しするのである。

かくて一順した時、酋長は恭しくこれをとつて神の口にあてること暫し、更に地の神に捧げられ、天上四方の神々に捧げられる。ついで自ら吸ふこと二三、再び一座に廻すのであるが、かうして繰り返すこと約三十分、煙草の燃えつくす時は更にこれを詰めかへて極めて嚴肅に儀式を繼續する。かくする中に、大鹿の生皮を以つて完全に蔽はれてある此小舎は、焼石より立つ湯氣と、煙草の煙を以つて、全く飽和されるに至る。彼等よりすれば、これで神は充分

に満足せられたのであつて、彼等亦救はれた歡びを以つて小舎を出で、冷水を浴びて汗を流して、此の式を終るといふことである。

中部インディアン間に用ひられる所謂メディシンバンドル(Medicine Bundle)「呪ひ束」とでもいふべきかは、彼等の聖物を集めたもので、こゝに宗教的意義の對象をおく部落さへある程なのだが、此の束の中でも、パイプはその中心をなすものとして、最も神聖である。アラバ族の如きに至つては、その守護神は黒色の石に製した、眞直なパイプ一本である。東部シオウアン族の間には幼兒の命名の際に用ひるパイプさへある。又他部落の儀式に招かれた際持つて行くパイプもある。是等パイプの柄には精巧なる裝飾がほどこされ、諸々の精靈を表徴する繪が彫られてあり、遂にはパイプ本來の性質を離れて、單にその柄が神性の對象とさへなり了せて居るものもある。

メキシコ灣から、ミシ、ツビー沿岸に亘る東南部の古墳からは、屢々大きな石製のパイプが發掘されるが、これが即ちマウンドパイプである。是等の大なるものは重さ數磅に及ぶものがあり、明かに祭祀用のものであることを語つて居て、其形式亦多様であるが、中には精巧なる技能を以つて裝飾をこらして、これがインディアンの手になつたものであるかと疑はせる程のものさへある。

然し又、ジョージア、アラバマ、南部ミシシッピには、その形式素朴で、パイプの孔は單に申譯的に穿られてあるに過ぎず、其の祭祀用として外觀を重んずるところから、火皿には鳥獸や人間の形が彫つてあり、すでにパイプの域を脱して、一種のシムボルとなつて居るものさへある。此の極端な例としては、パイプの外觀を辛うじて保つ程度であるのみか、其の柄に孔の通じて居ないといふ徹底したものもある位である。

更に甚しいのになると、オマハ族の間には、平和パイプの石が得られなくなつてから、其の代用品も見當らぬまゝに、可哀さうにも唯柄丈けを持つてあるき、マングン族亦、單に飾付きの柄丈けを大切に於て居るといふ有様である。

即ち、最初の煙草の神祕から、その用器たる煙管の神聖を認めるに至つた彼等が、更にそれを觀念化して、こゝに單なる柄だけが、なほよく神に通ずる聖物として崇められるに至つたものである。然しこれとても、その雁首を作るべき石を失ふて、止むを得ずこんな情ない變化をとげたものであつて、なほ神聖なるパイプ本來の面目は少しも損ぜられては居ないのであるから、畢竟は一つのシムボルである。

先に一寸言及したカリユメットパイプ（蘆の意味の佛語シャリユモより來る、我國にチャルメラとて南蠻の餘韻なほなつかしい蘆笛も亦こゝより名を得たもの）は、アメリカンインディアンの中に、かなり廣く用ひられた所であつて、有名なロングフェローのヒヤワサの歌にも詠まれて居るが、あれとても元來パイプ（管）ではなく、單に美しく裝飾を施したところの棒であつて、其の片端をパイプの吸口のやうに作り、火皿も單に附屬的の意味しか有して居ないものである。

J. N. B. Hewitt
此のカリユメットに關して、ヘウキット氏は深い研究をなして居るが、氏の著述によると、

「カリユメットの單なる外觀、其の用途よりしても、それがすでにパイプ本來の意義を離れて祭祀の表象となつて居ることが理解されるのである。然して此のパイプに、神に捧ぐべき煙草を盛つて燃す時は香爐の用をなし、更に一轉しては祭壇の主部ともなる。然して、こゝに至れば、便宜と傳統の力は、極度に表象化された所のカリユメット

トの柄と犠牲の祭壇即ち煙草を盛るべき石の火皿とを合して一つとする。かくしてこのものは、北アメリカ土人の最も神聖なるものゝ一つとなり了せたのである。然して此のカリユメットの柄の色彩其他の裝飾は、皆彼等が至上の神の表象であつて、これを以つて神意を具現すべきものとされる。更に重要複雑なる祭祀にあつては、彼等の信する、父神、母神、男神、女神、天神、地神の如き一對の神を表象して、各々自然の支配即ち父性と、生産即ち母性ととの二つを表現せしむるものである。」

此の二元論的信仰は、オマハ族あたりに最も顯著であつて、彼等は天族地族の二組に區別されており、キャンプの位置からその試合、其の祭祀、其の狩獵に於て、常に此のデュアリズムの大原則が支配するのである。従つて彼等の祭祀のバイプ亦二本あるのは當然で、此の二本は何時如何なる場合でも、別々にされることは出來ないのである。さうしてこれから更に、戦争と平和との對立した二種のバイプが生ずるのであるが、これは後に讓ることゝして、今少し、ヘウキット氏の説を引用して見る。

「カリユメットは又旅券として、部落の使者や旅人が持つてある。又異邦敵國との交通和解の際に用ひられ、部落間の親善のしるしとして交換されたりする。更に旅路やすかれと天候の恵みを祈り、又雨乞ひの祀りにも用ひられる。其他すべて神の怒りを解くべき場合に用ひられぬといふ事はないと云ふてもよい。彼等の舞踏にも、カリユメットダンスといふものがあるが、これはカリユメットを持つて歌ひつゝおどり、おどりつゝ戦ふ可き敵の名を叫ぶのである。これによつてその敵の命は、かく叫ぶ我が手にかゝつて死すべしと信ぜられる。然し此の歌もダンスもカリユメットを持つてやるとは云ふものゝ、むしろカリユメットそのものを讃ふる意味を多分に含んで居る。」

「然るにオマハ族あたりに通用するカリユメット踊りの名稱には、元來ダンスの意味はなく、「神聖なる交りを結ぶ」の意味が存して居るのであるが、これは明にカリユメットの存在によつて、さう信ぜられて居るのである。ここに至れば、カリユメット使用の神秘の扉を開く可き鍵が見出されるかと思はれる。此のカリユメット踊りのもてなしを受けるといふ事は、又養父子の縁を結ぶ事を意味する。即ちある若者を自分の養子としたいと思ふ時は、その若者の前にカリユメット踊りをしたいと申込むのであつて、是を受諾することは即ち、若者が養子となる事を承知したといふ事になる。反対に女を戀する男は、その女の父にカリユメットおどりをやつて呉れと願ふ。他の者が仲に立つておどる事もあるが、如何なる場合とても、此のカリユメットにかけて誓ふ神聖さは絶対である。しかし又此のカリユメット踊りを拒み得るも勿論である。」

Pierre François Xavier de Charlevoix (1682-1761)

又、十八世紀初めに、ジエスイツト布教師として渡米したシャルヴォアによると、もしカリユメットが贈られ、受けられれば、それに煙草を盛つて、授受兩者の誓ひが神の名によつて交はされ、神意はその煙を通じて現れて、その誓約を人の世のつゞく限り犯すべからざるタブーたらしめるのであつて、従つて萬一これを破るやうなことがあれば、神の怒りは、何の躊躇もなく、その破約者の上に落ちて來ると信ぜられて居る。その絶対なる神聖、權威は、近代人の信仰を以てしては、全く想像もつかぬ程度のものであつて、如何なる激戦の最中とても、もし敵方の使者が馳せ來つて、カリユメットを捧げ、當方がこれを受けとるに於ては、兩軍は直ちにその干戈をおさめて停戦となるのであるから、カリユメットの意義は實に重大であると云はねばならない。更にその和議調印の際には、カリユメットの交換がその神聖を守るべき證據となるのであるが、これより轉じて、公の誓約又は諸種の取引の際にも、これの交換

が常例であつて、文明國に於けるサイン捺印などその意を同うするものではあるが、それを守る道義感に至つては

兩者同日の比ではない。

カリユメットを用ひて、煙草を吸ふのは、「これによつて日の大神を初め、諸々の神の照覽を乞ふて、誓約の神聖冒すべからざる證人とするのであつて、こは天の四方に煙を吹き送り、大地の上に吐きかけて爲される」(ヘウキツト)のであるが、これらの大體は別掲の寫眞版(一七二頁バウ
ネエ族祈禱圖)によつて見らるゝ通りである。然し最も主要にして興味のあるのは、何と云ふても戦争パイプと平和パイプである。

戦争パイプが極めて簡素であつて、裝飾と見る可きものがないに反して、平和パイプは中々手のこんだものである。(上圖参照)戦争パイプの雁首は大きく作られてあるに反して、平和パイプの方は比較的華奢だと云へやう。平和パイプの柄に飾られた、毛髮羽毛はそれ〴〵の意味を有して居つて、且つその形式も部落によつて異り、戰國時代我が武士がかざした旗印のやうに、それ〴〵一見何處の部落のパイプと判別の出来る特徴を持つて居る。前述の如く、使者の通行券ともなる所から、此のパイプの區別は極めて重大であつて、開拓當初の歐洲人に對して

は、特に此の通行券としての平和パイプは、重大なる關心を要求したものである。

